虚無を継ぐもの

片玉宗叱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
虚無を継ぐもの

【Ｎコード】
Ｎ８９０１Ｍ

【作者名】
片玉宗叱

【あらすじ】
この作品は『ゼロの使い魔』で「もし才人がとルイズが召喚前から知り合いだったら？」という所謂ＩＦ物です。今のところプロットは原作準拠（ラノベ）で進める予定です。

【注意】ゼロ魔とクロス先のネタバレ要素を含みます。

【注意】ファンタジーと思って読むと痛い目を見るらしいです。

【注意】Ｊ・Ｐ・ホーガン著「星を継ぐもの」関連作品の設定を中途半端に使いつつ捏造してますので、それらを知らないと全く面白味が無いかも知れません。

【注意】キャラ崩壊してます。主にルイズとかルイズとかルイズとか、あとエレ姉とかが。

※原作と同程度の戦闘や流血の表現が入ると思いますので予防線で「Ｒ－１５」と「残酷な描写あり」の警告タグを付けてあります。

※不定期更新御免。

プロローグ

「あんた誰？」

仰向けに横たわる才人の顔を逆さまから覗き込む様にしている女の子が言った。

歳は十六歳か十七歳程だろうかか。気の強そうな凛とした目に鳶色の瞳、そしてストロベリーブロンドと言うには余りにも鮮やかな桃色がかった髪をした美少女である。

あれ？この髪色って何処かで見たよな、と才人はボンヤリと考えたが、腰と背中の痛みに思わず呻き声をあげる。どうやら高所から落ちて身体を強かに打ち付けた様だ。体中が悲鳴を上げ、呼吸も苦しい。そのせいか今一つ頭もはっきりとしない。

少女の服装は黒いマントに白のブラウス、グレーのプリーツスカートをはいている。痛む体をどうにか捻って周りを見ると同じような服装をしている少年少女達が遠巻きにして見ているのが確認出来た。彼女の服装はどうやら制服らしい。

少女の後ろには禿げ頭で黒いローブを着込んだ人物が、物語に出てくる魔法使いが持つ長い杖の様な物を油断無く才人に向けて構えている。更に遠くの方にはヨーロッパにある古城を思わせる建物が見えた。

「ちょっと黙ってないで何とか言いなさいよ。その耳は飾りなの？」

ムスッとした彼女の表情を見て才人は、やっぱり俺この子の事どこかで見た事があるわ、と漠然と思ったが身体の痛みと背中を打った事によると思われる呼吸困難でそれどころではない。

「……ぐっ、はぁ……ちょ……ちょっと待ってくれよ……」

やっとの事で息をし言葉を発すると、才人は「いててて……」と言いながら、ゆっくりと時間をかけて上半身だけ起こすと、しゃがんで彼を睨み付ける少女に向き直って胡座（あぐら）をかいた。その時に位置関係から少女の下着が丸見えになってしまい、内心で“おおう！

白か！”と思いながらも紳士である才人はその歓喜を敢えて言葉や表情には出さず、彼女の目を真っ直ぐ見て誤魔化す事に決めたのである。

「誰って……俺は平賀才人。えーっと、欧米圏だとサイト・ヒラガって言った方が良いのかな？　サイトが名前でヒラガが家名ってやつ。それで、ここはどこなんだ？　ヨーロッパのどこかっぽいけど……それにお嬢さんは日本語が出来るのか？」

混乱しながら才人が自分の名を告げ質問をすると、彼女は信じられないと言うような素振りを見せ大きく目を見開き息を飲み「……そんな、有り得ない。でも、まさか……」と小さな声でぶつぶつと呟いく。そして暫し沈黙した後に少女は才人の質問にぶっきらぼうに答える。

「ここはトリステインにある魔法学院、ヨーロッパじゃないわ。それに話しているのは“日本語”じゃないわよ」

「トリステイン？　そんな所は聞いた事がな……」

そこまで言って才人は言葉を飲み込んだ。いやいやいや、聞いた事があるぞ。少なくとも地球上にそんな国は無いが、そこ出身の人物に関しての思い出があるし。それに今、この子の話す言葉が途中から何か変化しなかったか？　そんな事をまだぼんやりとした頭で才人が考えていると、少女が更に問いかけてくる。

「どうやら聞いた事があるみたいね。ところであなた、どこの平民？」

ぞんざいな言葉遣いではある。が何となく端々に申し訳なさそうな感情が隠っているように才人は感じた。

「なんだよ平民って……まあいいや。出身は日本の東京。今は学業の関係で筑波に住んでいるって言っても分かんねーよな」

どうせ理解不能だろうと思っていた才人に、少女から意外な答えが返ってくる。

「分かるわよ。小さい頃に“東京”で、ある家族にお世話になったし」

「……え？　嘘？」
それを聞いた才人は思わず驚きの声をあげる。
「嘘じゃないわ。あの経験が有ったから、わたしはわたしのままで居られるんだもの」
伏し目がちで話していた少女が急に上目遣いで才人を見つめると、その口から決定的な一言が飛び出した。
「……サイトお兄（おにい）だよね？　わたしの事おぼえてる？」
その台詞と表情に「ぐはっ！　萌え死ぬ！」とか思いながらも、痛みも治まって来た事で頭の中がはっきりして来た才人は思い出した。思い出してしまった。
ああ、俺はこの子を知っている。つーか忘れた事はなかった。こんな有り得ない髪色で自分を“サイトお兄”などと呼ぶ女の子を自分は一人しか知らない。
自分より五～六歳くらい年下で、この娘と同じ髪色と瞳の色をしていた。聡明だけど甘えん坊で気が強いくせに泣き虫な女の子。その子と二年近く一緒に暮らしたじゃないか。
あれから十年くらい経つんだよな。別れ際に「絶対に会いに行くからな」と約束してたけど、こんな早く再会できるなんてなぁ。しかもこんな美人さんに成長して、お兄ちゃん嬉しいぞ。けど胸はあまり成長しとらんな。ちゃんと食うもん食ってんのか？　と彼女が聞いたら躊躇（ちゅうちょなく）無く才人を蹴倒（けたおし）しそうな事を考えつつ、無意識に身を乗り出した途端に走った背中と腰の痛みに顔を顰（しかめ）めながら問い掛ける。
「まさか……ルイズか？　ほんっとに久しぶりだな。つーかこんな早くまた会えるとは思ってもいなかったけど」
「わ、わたしだって、ま、まさか“サモン・サーヴァント”でサイトお兄が呼ばれるなんて考えもしなったわ」
「おいおい、あれは呼んだって言うより拉致、いやどっちかって言うと罠だ。いきなり足下（あしもと）に落とし穴って、どんだけ凶悪なんだよ。お陰でこいつまで巻き込むし、あっちではその他色々ととんでもな

い騒ぎになったんだぞ」
　そう言って才人は親指で背後にある金属製の光沢を放つマイクロバス程の大きさの直方体を指す。それの表面はのっぺりして所々に筋が入ったり楕円形の出っ張りが付いていたりする。
「だ、だって“サモン・サーヴァント”は召喚する対象を選べないんだもの。し、仕方ないじゃない」
　そう言って頬を膨らませながらも目を泳がせて横を向くルイズを見ながら、そう言う問題じゃねーだろ、と才人は心の中で突っ込みを入れながら「まぁ本来の目的からすると結果オーライだけどな」と呟いたところでルイズが背後の物体について質問した。
「ところでお兄、それ何なの？」
「これか？　これはな聞いて驚け。近いうちに三機まとめて“お前達の居る宇宙”に向けて射出する予定だった探査プローブのうち、俺が調整を手伝っていた一機だ。起動状態では危険物扱いになるけど、まだ起動してないから潰れたカエルよりも安全だぞ」
「ええっ？　もうこっちへ来れるだけの技術が出来ちゃったの？」
　ほうっと感嘆の溜息をつきながら言うルイズに才人が自嘲気味に応える。
「予定って言っただろ？　まだ実証出来てねえよ。電磁波、重力波、素粒子や原子単体とか低エネルギー、低ポテンシャルのものを送る実験は何回もやってきたけど、こんだけ大きな質量を送る実験は今回が初めてだしな。それにテューリアンの協力が無かったらここまで早く出来んかったし」
　へええと関心するルイズに今度は才人が溜息混じりで質問する。
「ところでルイズ、その“サモン・サーヴァント”って何なのさ？」
「それはね」
「ルイズ、平民と変な箱を召喚してどうするのよ？」
　ルイズが才人に説明しようとした時に遠巻きに見ている連中の誰かが横槍を入れるが、それに対してルイズは嫌みをたっぷり含ませつつ上品な物言いで応じる。

「ちょっと黙ってて下さいませんこと？　わたくしは今、この人に事情を説明しているのですから」
「ふん、かっこつけたってどうせいつもの失敗なんだろ？」
「さすがはゼロのルイズだ！　期待を裏切らないね」
遠巻きに見ている連中がどっと爆笑する。しかし言うだけで近寄って来ないのは才人の背後にある“変な形の大きな箱”を警戒しているからなのかも知れない。
何なんだこいつらは？　ルイズを馬鹿にする物言いをしやがって何様のつもりなんだ？　とふつふつと怒りが湧き上がって来た才人にルイズが話しかける。
「お兄、説明は後でもいい？　ちょっと先生と交渉してくる」
「お、おう。何だか良く分からんが任せた」
才人が応えると、ルイズは後ろで警戒していた黒ローブの人物の元へと歩いて行く。
「ミスタ・コルベール、お願いがあるのですが」
「何だね？　ミス・ヴァリエール。あの平民とは知り合いみたいだが。それにあの得体の知れない物に危険は無いのかね？」
「はい、知り合いです。それにあれは危険な物では無いそうです」
「そうか、ならば儀式を続けて彼と“コントラクト・サーヴァント”を」
「その事なのですが……彼はわたし、と言うよりヴァリエール家にとって大恩ある方の息子さんなのです。その彼を使い魔にするなど恩を仇で返す様なもの。彼との“契約”は免除していただけないでしょうか」
ルイズは才人が探査プローブの事を「起動状態では危険物」と言った事は敢えて伏せ、懇願をする。しかしミスタ・コルベールと呼ばれた男は首を横に振る。
「それは駄目だ。ミス・ヴァリエール」
「どうしてですか！」
声を荒げるルイズに対しコルベールは静かに諭すように言う。

「決まりだよ。二年生に進級する際、今やっている通り君たちは“使い魔”を“召喚”する」
　コルベールはルイズに、現れた使い魔によって今後の属性を固定して専門課程に進む事、春の使い魔召喚は神聖な儀式故に一度呼び出した使い魔の変更は出来ない事、呼び出した使い魔とは必ず契約を結ばなくてはならない事等、既に授業で話した内容を再び説明した。勿論ルイズはその事を重々承知している。
「それは知っています。でも彼は大事な人なんです！わたしの一存で彼を“使い魔”として契約する事は出来ません！」
　ルイズの「彼は大事な人なんです」発言に周囲は色めき立つが、そんな事はお構いなしにコルベールは彼女の説得を続ける。
「これは伝統なんだ、ミス・ヴァリエール。彼が君の家にとって大恩がある方の息子であろうと呼び出された以上は君の使い魔にならなければいけない。春の使い魔召喚に於けるこの決まり事は全てに優先するものなのだよ。それに君の為にかなり時間を食っているので早くしないと次の授業が始まってしまう。何回も失敗してやっと呼び出せたんだ。さっさと儀式を続けなさい。恩人とは言え平民にそこまで義理立てする事もあるまい」
「そんな！」
　最後には面倒くさそう言うコルベールに、ルイズは更に声を荒げて怒鳴るように言葉をぶつけると厳しい表情で彼を睨み付けながら静かに話し始める。
「ではこの件について学院長のオールド・オスマンとの面会と、実家へ連絡する許可を願います。もし聞き入れていただけないのであれば仕方ありません。進級できないわたしは規定に従って学院を退学します。その場合はヴァリエール家からの援助が打ち切られる事になると思いますが宜しいのですね」
　はっきり言って脅迫以外の何物でも無い。これを聞いてコルベールは焦った。禿げ上がった頭の天辺まで真っ青にして冷や汗を流して焦った。

確かにルイズは魔法の才能が無く失敗ばかりで教師達からは匙を投げられ、同級生達からも馬鹿にされている劣等生である。しかし座学の成績は素晴らしく良く、皆に馬鹿にされても毅然とした態度を貫き貴族の子女の模範として振る舞ってもいる。そんな彼女をこのまま退学処分にしてしまうのは忍びない。彼が言った“恩人とは言え平民云々”も、彼なりに彼女の事を思っての発言だったが、反対にルイズの感情を逆撫でしてしまったようだ。

それにルイズに対する自分の行動が原因で、学院への大口援助者である彼女の実家からの援助が打ち切られてしまった場合に責任問題から学院をクビになるのは必至。そうなっては自身の研究が続けられなくなる。

「待て待て待て待ちたまえミス・ヴァリエール！　早まってはいけない」

「では許可をいただけますか？」

ううむと唸りながら考え込んでいたコルベールは諦めた様に頭を振った。

「分かった。君の要求通り学院長との面会を申請しよう。ご実家への連絡も許可しよう。だから今すぐ儀式を続け」懇願するように言うコルベールの言葉を「それは出来ません」とルイズは途中できっぱりと断ち切る。

「ではミスタ・コルベール、学院長との面会の件よろしくお願いしますね」

微笑むルイズに対してコルベールは「今日の今日では面会は難しいと思うが」と前置きしながらも後で使いの者をルイズの部屋へ向かわせると約束した。

そんなやり取りを見ていた人垣から野次が飛ぶ。

「なんだルイズ、怖じ気づいたのか？」

「そりゃそうよね。“召喚”が出来ても“契約”が上手く行くとは限らないものね」

ルイズは彼女を馬鹿にしながら笑う同級生達を無言で一瞥すると

才人の元へと向かった。その様子を黙って見ていたコルベールは生徒達に声をかける。
「さてと。皆、騒いでいないで教室に戻るぞ」
コルベールは踵を返すと空中に浮いた。そして一度ルイズの方を振り返り「ミス・ヴァリエール、君はこの後の授業に出なくて良いから彼と十分に話し合いなさい」と言うと石造りの城の様な建物へ向かって飛んで行った。
「ルイズ、授業サボれて良かったじゃないか。きっと飛べないお前に先生が気を利かしてくれたんだぜ」
「あいつ“フライ”どころか“レビテーション”さえまともに出来ないからな」
「あの平民と契約が成功しなかったら、とんだお笑い種よね」
同級生達は口々にそう言って笑いながら飛んで行く。そんな彼等をルイズはただ黙って見送る。そして草原にはルイズと才人だけが取り残された。
どちらからともなく地面に座り込む。見つめ合うお互いの間を心地よい風が吹き渡って行き何とも柔らかな雰囲気である。そんな一種のんびりとした雰囲気の中、先に口を開いたのは才人だった。彼は感心したように言う。
「驚いたな、あれが“魔法”ってやつか。昔お前に聞いてたけど何も無しで人が飛んだりするのを実際に見ると凄えな」
「何も無しじゃないわ。精神力を使うわよ」
「精神力ねぇ。俺らの宇宙、いや世界じゃ精神と物質の直接的な相互作用なんて無いからな。で何やらあの禿げたオッサンと揉めてたみたいだけどそれは後回しにして、まずはさっき言ってた“サモン・サーヴァント”とか“召喚”とかの事を教えてくれ」
「お兄、相変わらず緊張感ないわね。まだ小母様に、まったくヌケてるんだからって言われてない？」
「ほっとけ。それよりも説明プリーズ」
むくれた才人に促されルイズは説明を始めた。

「サモン・サーヴァントて言うのは自分の属性に合った使い魔を呼ぶ為の呪文、ううん儀式と言った方が良いかもね」
「えーっとちょっと待て。何か引っかかっているんだけど……あ！　ルイズ、お前さっきから日本語で喋ってんのか？」
「え？　話しているのはハルケギニアで使われている公用語よ」
「俺には完璧な日本語にしか聞こえないんだけど」
「そう言われてみれば、わたしにはお兄が公用語を話してるように聞こえるわ」
「これも魔法ってやつか？」
「うん。たぶんそうだと思う」
魔法ってすげーな、と才人が呟く。そんな様子にルイズはくすりと笑ういながらサモン・サーヴァントの説明を始める。
曰く、本来はハルケギニアの生物を呼び出すもので普通は動物や幻獣が現れる。曰く、呼び出すだけで元に戻す呪文は存在しない。曰く、サモン・サーヴァントを再度行うには呼び出した使い魔が死ななくてはならない。それを黙って聞いてた才人はルイズに確認するように尋ねる。
「ひょっとしてサモン・サーヴァントって“召使いの呼び出し”って訳されてたやつか？」
「あ、うん。それの事」
「そっか、本来は“使役する使い魔の召喚”が正しい意味なんだな。俺はメイドさん呼び出し専用魔法があるなんて物臭（ものぐさ）な連中ばかり居る世界だと思ってたわ」
笑いながらそう言って納得する才人にルイズは「そんなこと思ってたの？」と呆れている。そんなルイズを見ながら才人は浮かんだ疑問を口に出す。
「けどさ、おかしくないか？　だってお前、小さい頃にその呪文を唱えてみたら成功しちゃって、それが嬉しくて家族に伝えようとして走り出した途端に小石に躓（つまづ）いた挙げ句に開いた―“扉”《》ゲートに突っ込んだら俺らの所に来てしまったんだよな。それなのに呼

び出し専用ってのも変な話しだ」
「ちょっとお兄！　イヤな事を思い出させないでよ……そうよね。実際のところ、こちら側から“扉”に入って行く人が居なかっただけなのかも知れないわね」
　それを聞き才人は首を傾げながらも、まあ魔法の世界だし何が有っても不思議じゃないよなと思い次の質問をする。
「サモン・サーヴァントは何となく分かった。んで、さっき禿げの人と話してたコントラクト・サーヴァントとか契約とかって何の事だ？」
「簡単に言っちゃうとメイジと使い魔の間に“絆”を結ぶ儀式。例えばメイジと使い魔で視覚を共有するとか、お互い考えている事が分かるとか、契約した使い魔が主人に服従するようになるとか」
「感覚の共有とかパーセプトロン使ったニューロ・カップリングみたいだな。あれ？　お前さ、“メイジ”を“貴族”って訳してなかったか？　その言い方だと何か魔法使いの事みたいだけど」
「魔法が使える者をメイジって言うの。あの頃はわたしも小さかったから貴族以外のメイジは認めてなかったのよね。メイジと魔法使いは同じと考えて良いわよ」
「なるほどね。呼び出した使い魔を主人の為に働くように義務付けるのがコントラクト・サーヴァント、つまり契約って訳か」
「メイジにとって使い魔は一生のパートナーって言われているけどそれは建前だし。使い魔を召喚しないメイジだっているんだから絶対にやらなきゃいけない儀式って訳でも無いのに何が伝統よ。な、何が神聖な儀式よ。そ、そそ、そんなのこの学院内だけの話しじゃない」
　口を尖らせて怒りに震えながら話すルイズの様子を見ながら、こいつ子供の頃から変わってないな、と思いながら才人はぽりぽりと頬を掻く。
「取り敢えず何やらお前が苦労しているのは分かったから落ち着け。あ！　そうだ」

何かを思いだした才人は言うが早いか器用に探査プローブの上によじ登り始めた。
「ちょっとお兄、何してんのよ！」
「荷物を下ろすんだよ。危ないからちょっと離れてろ」
才人は探査プローブの上に置いてあった一辺が一メートルほどの立方体をしたコンテナを地面へ放り出す。どすん、どすんと三個のコンテナが乱暴に降ろされた。
「お兄、これが落ち着くのにどんな関係があるのよ」
「いいからちょっと待ってろって」
才人は降りてくると、コンテナをひっくり返したり横から眺めて何やら確認すると「まずはこれだな」と言って選んだそれを開けると中から折り畳まれた手押し台車とスーツケースを取り出した。
「あによそれ」
「見りゃわかるだろ。台車とスーツケース」
ルイズの問い掛けに才人は答えながら、中身が空になったコンテナの内側の一部をカチリと捻る。するとコンテナはペタンと簡単に折り畳まれた。
「どうだい“ＵＮＳＡ（国連宇宙軍）謹製三号コンテナ”は。こんなヘナヘナでも組み立てれば四千メートル上空からの落下衝撃にも耐えられる優れものなんだぞ」
「意味わかんないわよ！」
いらいらしているルイズを無視し二つ目を開ける才人。取り出されたのは国連軍の標準歩兵装備と寝袋である。歩兵装備はボクシングのヘッドギアをスマートにした様なヘルメットと体を保護するプロテクターで構成され、簡易型ながらパワーアシスト機能も付いている。身に付けた姿は顔が見えるストームトルーパーを想像すれば良い。但し色は白ではなく濃緑・濃紺・茶色の分割迷彩である。
才人は「覗くなよ？」と言いながらルイズから見えない探査プローブの反対側へ移動するとルイズから「誰が覗いたりするもんですか！」と苛ついた声の返事が聞こえて来るが無視してヘルメットを

除いてそれに着替える。
　戻った才人を待ちかまえていたのは完全に膨れっ面をしたルイズだった。
「あんでわざわざそんなのに着替えてるわけ？　この辺に危険な事は無いわよ」
「いや手持ちの荷物を減らしたくてさ。コンテナ二つとトランク、そのまま台車で運ぶの面倒だし」
「それでその残ったコンテナの中身は何なのよ」
　いぶかしがる目つき、所謂ジト目で見つめるルイズだが才人は涼しい顔だ。
「日本国防軍の非常用高カロリー食三十日分と戦闘糧食二型の牛丼セット二じゅ」
　才人がそこまで言うと唐突に「それ没収！」とルイズが反応した。
「はいいい？　なんで？　Ｗｈｙ？」
「没収って言ったら没収なの！　こっちに居る間のお兄の食事はあたしの方で用意してあげるから心配しなくていいわ。牛丼セットは全部あたしがあずかる！」
「いやだからって没収は無いだろうよ」
「あによ。文句あるの？」
「ルイズ、目が怖い。マジで怖いって」
　睨み付けるルイズに才人はそこまで言ってある事に思い至る。
「あー……思い出した。お前なぜか牛丼がお気に入りだったよな。分かったよ、その代わり俺の飯の手配の件、約束守れよ？」
「ほんと？　ほんとにいいの？　後で返せって言っても返さないからね？」
　喜色満面の笑みではしゃぐルイズ。今にも涎を垂らしそうな勢いである。
「ううっ、夢にまで見た本場の牛丼が……こっちには醤油が無いからどんなに頑張っても再現できなかったのよね」
　その表情はまるで恋い焦がれていた恋人にでも会ったかのように

恍惚としている。まるでマタタビを与えられた猫だ。こいつ湧いちゃってるよ。さっきまで“わたし”とか言って澄ましてたのに“あたし”に変わってるし言葉遣いがぞんざいになって来てるし態度も生意気になって来てるしで、まあ変わってなくて安心と言えば安心だな、と才人は思う。

才人は「それはそうと」と言いながらコンテナを抱きかかえるように張り付いているルイズを引きはがすと蓋を開け中から何やら取りだしルイズに渡す。

「ほれ板チョコ。取り敢えずこれでも食ってろ。それに今からこいつを起動するから最低でも五百メートル以上離れてくれないか？ コンテナは俺が運ぶから」

そう言いながら台車にコンテナを乗せる才人に見向きもせずにルイズはキラキラした目で受け取ったチョコの包装を剥いている。

「五百メートル？　んと大体五百メイルよね。はんふぇふぁふひゃいふぉ（なんで危ないの）？」

「……ったく食うか喋るかどっちかにしろよ。こいつは宇宙空間での運用しか考えられてなくてさ。地上から離陸させたらストレス・フィールドの影響で強い上昇気流が発生するかもしれないんだ。それにストレス・フィールドその物に巻き込まれたらシャレにならんし」

才人はスーツケースから地球でよく使われている型の個人用コンピュータを取り出し、探査プローブのアクセス・ドアを開けてケーブルを繋ぎながら言う。

その様子をルイズが板チョコを頬張りながら興味深そうに見ていると才人は「何やってんだよ。早いとこ離れとけよ」と言って彼女を促すが「まだ大丈夫なんでしょ？　見ててもいいじゃん」とルイズは言う事を聞かない。

才人は溜息を吐きながらも起動準備を進めて行く。その作業中に何かを思いついたらしく別画面を呼び出して何やら操作をする。探査プローブの一部が開き才人はそこから直径六十センチメートル程

の球体を取り出し台車の上に置くとまた別な画面を呼び出して操作した。すると今度は取り出した球体が真ん中から割れ、その中から折り畳まれたパラシュートと共にキャタピラの付いた小さな車両が出てきた。
「なにそれ？」
「惑星に降下させて地表を観測する為の自立型カメラ。今更地表の観測で降下させる必要も無いし。それに別な使い方を思いついたから外した」
ルイズの問いに才人は作業をしながら答えると、彼女は「ふぅん」と分かったような分からないような返事を返す。暫くして起動の準備が整い才人はケーブルを外しアクセス・ドアを閉じた。起動シーケンス開始は余裕を持って二十分後にしてある。これだけあれば台車を押しながらでも十分な安全距離を取る事ができるだろうと考えての事だ。
「ルイズ、出来るだけ離れるぞ」
先程とは違いルイズは素直に才人の言葉に従う、かと思いきや台車の上にあるコンテナの上にちょこんと座った。
「ちょ、お前なにやってんだよ。降りろ」
「だって歩くのめんどくさいんだもん。さっきから立ちっぱなしで疲れちゃったんだもん。ほら、あたしってばさ、か弱い女の子だし」
やっぱり猫被ってやがったな、このワガママっ子が。こんなんでエネルギーパックを使いたくないんだけど時間設定しちまったし仕方ねぇな。と才人はぶつくさ言いながら装備のパワーアシスト機能を入れ、速やかに距離を取る事にした。遠目には少女が座った白い箱を乗せた台車を変な模様の甲冑を着た兵士が押している様に見えたであろうが、そんな彼等を見ている者は居なかった。
台車を押し始めてから十五分ほどして才人は立ち止まり振り返る。距離にして一キロメール程だろうか。そろそろ起動シーケンス開始である。
「ルイズ、降りろ。んでもって伏せろ」

「あんでよ」
「危ないからだ」
「あんで危ないのよ」
「ストレス・フィールドの影響で強い上昇気流が発生するかも知れないってさっき言っただろ」
「こんだけ離れてても？」
「ああ、危ないな。上昇気流が発生すると……」
「発生すると？」
「お前のスカートが捲れ上がる。俺には眼福だけど」
才人がそう言うとルイズは耳まで真っ赤になった。そして無言でコンテナから降りて才人の隣まで来ると可愛い顔を鬼のような形相に変化させて才人の側頭部を殴りつけながら叫んだ。
「お兄のスケベ！　変態！　ばかぁ！」
脳を揺らされた才人は遠くに探査プローブの甲高い起動音を聞きながら“しまった。メット被っておくんだった”と思いながら意識を刈り取られたのである。

異世界の優しい平民　（1）

“ミネルバ事件”として記憶されている平行宇宙に関わる出来事からおよそ一世紀。その事件が切っ掛けとなりテューリアンと地球の勢力範囲には平行宇宙からの干渉を監視する警戒網と呼べる物が構築されていた。

およそ百年の間に理論的な発展もあった。事件発生当時、テューリアンと地球の科学者達は多世界解釈的な立場を採っていた。特に平行世界の過去への遡行に関して、定量的な解析で発散（計算で無限大が発生する事）が生じない事からテューリアンの人工知性体“ヴィザー”もこの立場を支持した。

事件から三十年程が経った頃、ある地球人物理学者が「ビリヤードよろしく平行宇宙を玉突き状態で渡って行くエネルギー（物質もエネルギーである）は最終的に何処に行き付くのか？干渉しあっている平行宇宙間でのエネルギー収支は本当にプラスマイナス・ゼロで可逆的なのか？」という疑問を投げかけたのである。

平行宇宙が存在した。観測での証拠が在るから平行宇宙との干渉は可逆的であろうし現状の理論で破綻が生じていない。何も問題無いじゃないか。目の前の大発見に目が眩んでいた科学者達はそう考えていた。そこへ投げかけられたこの疑問は双方の科学者達から黙殺されるかに見えた。しかし、その疑問を掬い上げて計算により検証したのは他ならぬヴィザーであった。ヴィザーが平行宇宙間のエネルギー収支を考慮して検証した結果、至る所で発散が見受けられる事が判明したのである。この結果にテューリアン科学者達は愕然とする。

テューリアンの理論は、彼等が嘗て太陽系内に存在した惑星ミネルバに居住していた二五〇〇万年前から検証と実証がされており、円環運動するブラックホールによる重力制御や高次空間へのアクセスによるｈ－グリッドと呼ばれる超高速の情報・エネルギー伝送、

宇宙船の瞬間移動等の高度な重力工学へと発展している。いわば彼等が依って立つ技術の根本である理論に綻びが見つかったのだから驚かない方が無理である。

逆に地球人科学者達は色めき立つ。人類発祥の遙か以前より検証・実証されていた完璧な理論が破綻した事によって、自分たちにも新たな発見を見いだす事ができるチャンスと捉えた彼等は考えたアイデアを出し合い様々なアプローチを始めた。

結果だけ言ってしまうと、テューリアン理論と地球の科学者達が捨て去ろうとしていた超ひも理論等の再検討と融合が行われ新しい理論体系へと生まれ変わる。勿論これにはヴィザーも参加し再構成作業の大きな力となったのは言うまでも無い。

この一連の出来事により平行宇宙に関する理解はミネルバ事件の当時とは全く違う物となる。端的に言えば『ブレーン（膜）宇宙論』が進化して復活を果たしたのだ。宇宙は虚数項で表現される高次空間も含め超平面（ブレーンと言われる）状態で表され、複数のそれが『一三次元の共通余剰空間』に存在しているとされた。

ブレーン同士は互いに独立であり、共通余剰空間のある次元軸上で交差をしない限りは相互作用をしない。しかも各々のブレーンは共通余剰空間で独自のポテンシャルを持ち、例えばブレーンAとブレーンBが交差して相互作用を行うには互いのポテンシャルが近い値でなければならない。ポテンシャルの違いによる障壁の大きさは指数関数的に増大するので僅かの差でも相互作用を行う確率が極端に低くなる。

また共通余剰空間での揺らぎによるブレーンの生成が複数同時に行われた場合に、これらは最初から相互作用を行う共鳴状態として存在し、ミネルバ事件で確認された平行宇宙はこれに当たるものであると結論付けられた。共鳴状態にあるブレーン同士でなければ滅多な事で相互作用（エネルギー交換）が発生する事は無い。例えば共鳴状態にあるブレーンAからブレーンBへ人為的操作で物質を送ると、それに見合ったエネルギーがブレーンBからブレーンAへ相

互作用の結果として送られるのである。
　これらの理論的発展と工学的応用によって、より確実に平行世界いや共鳴状態にある他のブレーン宇宙からの、または他のブレーン宇宙への干渉を検出して、対象のブレーン宇宙内の座標軸までを特定する技術が確立し万が一に備えての監視網が整備されて行ったのである。

＊　＊　＊

　平賀才人。二十三歳の理系の大学院生。
　彼女居ない歴五年で童貞卒業済みだが経験人数は一人だけ。ちなみに相手は高校生の時に付き合っていた同級生。大学進学に伴い遠距離恋愛になり、いつの間にか疎遠になって自然消滅と言う在りがちなパターン。
　小学生の頃の通知票には毎度「負けず嫌いで好奇心が強く何にでも興味を示すのは良いのですが、ちょっとヌケているので注意しましょう」と書かれていた。
　母親からは事ある毎に「あんたヌケてんだから勉強くらいは出来るようになりなさい」と言われ続けていた。
　父親からは「ヌケていようが勉強嫌いだろうが、まあ元気が一番だ」と半ば諦めとも取れる事を言われていた。
　ヌケているので物事を深く考えない、後先考えずに行動に移るなど欠点は多々あったが、一本筋は通っていたし社交的な性格だったので友人は多い方だった。勉強そっちのけで日が暮れるまで遊んでばかりいたので成績は低空飛行。そんな小学生時代を送っていた才人が心機一転して勉学に打ち込み大学院まで行く様になったのには理由がある。
　平賀家の家族構成は物理学者で国立大教授の父親と専業主婦の母親、そして二人の間に出来た才人の三人家族。蛇足だが母親は父親の元教え子で父母の年齢差は一七歳。未だに夫婦一緒で風呂に入る

アツアツぶりである。そんな両親のもとで才人はヌケてはいるが健やかに育っていった。
　それが起こったのは才人が小学五年生の冬のある日、珍しく父親が早く帰宅すると言う事で母親が気張って用意した鍋を久しぶりに親子三人で食べている時である。
「才人、あんた肉ばかり食べないで野菜も食べなさい。そんなんじゃいつまで経ってもヌケたままよ」
「はっへ、にふふまひんだもん。ほはんねぇ（だって、ニクうまいんだもん。とまんねぇ）」
「食うか喋るかどっちかにしろ！」
　才人は母親に肉ばかり食べている事を注意された時に口に物を頬張ったまま答えた事で父親にゲンコツを食らわせられる。そのショックで咀嚼（そしゃく）途中でまだ熱い肉を思い切り飲み込んでしまい悶絶する。
「あち！　痛っ！　とうちゃんこそ怒鳴るか殴るかどっちかにしてくれよぉ」
「四の五の言わないで母さんの言うとおり野菜も食え！」
　更にゲンコツ追加で才人はテーブルに突っ伏す。そんな賑やかで心温まる（？）団らんの場に、唐突に“それ”は現れた。その様子は、まずテーブルで彼の正面に座っていた母親、そして上座に座っていた父親によって目撃された。
　才人が立ち直り再び鍋に箸を伸ばした時、両親から彼の背後の景色が奇妙に歪んだ様に見えた。その次の瞬間に音も無く“銀色に光る楕円形の何か”が才人の後ろに出現した。
　両親が驚きの余り目を丸くし手にした茶碗を取り落とすと才人は「なに？」と言うような顔をして両親を見つめる。暫くして両親の視線から自分の背後にある物を見ていると理解した才人は後ろに振り向く。
　彼も両親と同じように驚きで固まった。才人の目にも『銀色に光る楕円形の何か』が見えたからだ。
　きらきらと光るそれは時間にして二十秒ほどすると唐突に消える

と、それが在った場所にはフリル付きの可愛らしいドレスを着た、年齢七歳前後と思われるフランス人形みたいな女の子がタクトの様な物を握りしめ、鳶色の瞳をした目を見開きながら呆然とした表情で立っていたのである。その子の髪は染めたかの様に鮮やかな桃色がかったブロンドだった。そして後になって気付くのだが才人の後ろにあったエバーフレッシュの鉢植えが消失していたのだ。

突然の闖入者に対して平賀家で一番最初に反応したのは才人の母親だった。震えながら外国語と思われる言葉を叫びながら怯える女の子に近付くと、まるで親鳥が雛を掻き抱く様に優しく抱きしめた。女の子はその腕の中でじたばたと抵抗する。そんな女の子に母親が「大丈夫だからね。安心してね」と柔らかな口調で幾度も語りかけていると彼女は急に大人しくなり、才人の母親の胸に縋り付いて「うわぁん」と声を発てと泣き出したのである。その様子はまるで迷子が母親に会えた事で安心して泣いてしまった時に酷似していた。事実、女の子は迷子だった。しかしそのスケールは、時空どころか高次空間と共通余剰空間を超えた壮大なものだったのである。

平賀家で小さな闖入者が騒ぎを起こしている頃、月面のジョルダノ・ブルーノ基地をはじめとした太陽系内に設置されているＵＮＳＡの監視網で大規模な異常が検出された。その異常は遠く離れたテューリアンが統治する各恒星系でも観測される。ｈ－リンクによってリアルタイムに各地から送られて来るデータをヴィザーが解析し即時に結果を地球へと通知すると各国政府、特に日本政府は騒然となった。

大規模なエネルギー或いは纏まった質量のブレーン間移動によるエネルギー交換を検知。場所は地球の地表上で、およその位置は北緯三五度三Ｘ分、東経一三九度二Ｘ分、海抜九十メートル。人口が密集する東京の住宅地である。

衛星軌道上からは発光現象や重力異常等を認められなかったので純エネルギーやブラックホール出現による破滅的な被災は無いと判

断されたが、放射性物質や毒性のある星間ガス等の汚染物質、あるいは悪意や敵意を持った生命体である可能性もあり、日本政府は警報を発すると同時に非常事態を宣言、国防陸軍東部方面軍中央即応集団を緊急出動させ現地へ向かわせた。

更にヴィザーからの詳細な情報が入る。詳細な緯度経度が判明した事で中央即応集団の司令部はそれを各隊に転送し住所を確認する為に住宅地図上に反映させた。すると地図中心のカーソル部分に強調された『平賀』の文字が映し出されたのだった。

日本政府がてんやわんやし始めた頃、平賀家では女の子とのコミュニケーションを試み始めていた。

才人の母は語学にも堪能で、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、オランダ語、ベルギー語、ロシア語、スウェーデン語、フィンランド語、北京語、広東語、朝鮮語、ベトナム語、タガログ語、アラビア語にスワヒリ語と十八ヵ国語が話せたりする。

この時代には自動翻訳・通訳装置が普及した事で特に外国語を学ぼうとする人口は減少していた。蛇足であるが失われてしまった民族本来の“言葉”を取り戻そうと言う活動が世界各国で活発に行われた事もあった。そんな時代に何故に才人の母は他国語を学んだのかと言うと……機械音痴と父の無茶振りによるものであった。

才人の母は親しい友人からも「ホントに理系なの？」と疑われる程の機械音痴である。否、機械音痴というレベルを遙かに超えていた。専門分野の測定器どころか一般に普及している携帯端末に至るまで、彼女が扱うと必ずと言って良いほど“破壊”されてしまう。彼女にその意志が無くても“壊れる”と言うより何故か“破壊”に至ってしまうのだ。

過去に研究室にあった小型粒子加速器が有り得ない壊れ方をした事もあったらしい。しかし不思議な事に家庭用品として在る物ではそんな事が起こらない。一種の才能である。

同じ研究室に居たファンタジー好きな友人は、被害に遭った実験機器の有様を見て「グレムリンでも飼っているんじゃなかろうか？」と零したらしい。

そんな才人の母は、夫の研究室で助手を務めていた頃に海外との調整やら交渉やらを面倒臭がった夫からそれを丸投げされた。翻訳・通訳機が“破壊”されてしまうので使えない彼女は血の滲むような努力により多国語を話せるようになったのである。のほほんとした容姿に似合わず努力の人である、と言うより別な助手に頼むべきであったのでは？　との疑問の声もある。才人がヌケているのは父親からの遺伝で間違いないだろう。

その母親がようやく落ち着いてきた女の子に様々な言語で話しかけてみるのだが全く通じていない。フランス語とオランダ語には僅かに反応したがやはり意味は通じないようである。そんな二人の様子を見ながら才人と父親はココアを作っていた。やはり小さな子供を落ち着かせるには冬場はミルクココアであろう。異論は認める。

「とうちゃん、あの子いったい何なんだ？」

才人の問いに父親は考え込みながらココアの入ったミルクパンをゆっくりとかき回している。

「なあ、とうちゃん。聞いてる？」

「あ、ああ。すまんな。聞いてるぞ」

「あの子どこから来たんだろ」

父親は眉根を寄せた厳しい表情で鍋を見つめながら才人の問いに答える。

「俺の予想が正しいなら、もうすぐ政府の緊急放送がある。ひょっとしたらもう軍が出動して家（うち）に向かっているかもな」

「ええっ！　なんで？」

「母さんには悪いが携帯の通訳機能を使ってあの子の言葉をモニターしてるんだよ」

そう言うと父親は才人から見えない反対側の耳を指さす。そこにはワイヤレスの携帯端末用イヤフォンが収まっている。

「翻訳・通訳機能はネットワークで言語データーベースに繋がっているからテューリアン語から地球上のマイナーな言語まで、既知の物は全てカバーしている。だが、あの子の言葉だけは全て“翻訳不能”として返って来る」
暖まったココアをマグカップに注ぎながら父親は更に続ける。
「それに才人、お前の後ろにあったエバーフレッシュが消えてるのが分かるか？」
その言葉に才人がそこを見ると母親が毎日世話をしている確かにそこに有るはずの観葉植物が跡形もなく消えていた。
「あくまでも俺の推測でしかないが、あの子は地球人じゃない」
父親はココアの入った四つのカップをトレーに乗せると才人にクッキーを持ってくるように言いつけた。棚からクッキーを出して母親と女の子がいるダイニングの一角へと向かいながら才人は父親に聞く。
「じゃあジェヴレン人？」
「ジェヴレニーズなら翻訳不能にならんよ。それに普通は高次空間移動で周囲に洒落にならん重力異常が発生する」
父親はカップをテーブルに置きながら言葉を続ける。
「惑星の大気圏内に高次空間移動するなんて自殺行為だしな。例外なく周囲を巻き込んで吹っ飛ぶ。だがあの女の子も俺たちも無事だ。となると高次空間移動とは考えられない」
父親はいつもの自分の椅子に座ると才人と妻の顔を見てから、突然現れた女の子に視線を移した後、自分のマグカップを見つめる。
「この子は……奇妙な現象の後に俺たちの目の前に現れて、代わりに家にあったエバーフレッシュが消え去った。似たような事はブレーン宇宙間の共鳴状態での相互作用で起こる可能性はあるが……」
父親がそこまで言った時、リビングにあるテレビから政府の緊急放送が流れて来た。

■■■■■

「そんでココアを飲み終わって何とかお互いの名前が理解できた時に防護服を着込んだ軍人さん達が来たんだよな」
長方形の高カロリー食を嚙りながら才人が言う。彼は学院の寮にあるルイズの部屋で遅い夕食を食べていた。太陽は既に落ちて空には二つの月が昇っていた。
それを見た時に才人は「おお！　本当に月が二つだ。しかもでかっ！　潮汐力とか、どうなってんだろ」とロマンの欠片も無い発言をする。予備知識はあるし理系だしで仕方ないとは思うが、もう少し言い方があるのではなかろうか。
一方、ルイズの方は才人から強奪した戦闘糧食二型の牛丼セットに舌鼓を打っていた。好物のクックベリーパイを食べている時以上に蕩けるような顔をしている。
「あの時は、ほんんんっとうにっ！　怖かったわ。小母様のお陰でやっと落ち着いたと思ったら、緑色の変な服を着た人達に囲まれて車に押し込まれて、着いた先ではベッドしか置いてない真っ白な部屋に閉じこめられて」
ルイズは少しだけ眉をしかめ辛そうな顔になり応えるが、器用に箸を使って牛丼を一口頬張るとまた蕩けるような顔に戻った。ちなみにこの牛丼セットの内容はレトルト・パックの飯と具、副菜（白菜とキュウリのお新香）そしてフリーズドライの味噌汁となっている。ルイズは学院の調理場まで足を運んで鍋にお湯を沸かしてもらうと嬉々として飯と具のレトルト・パックをそこに放り込む。そんなルイズの行動に怪訝な顔をする調理人・使用人達を後目（しりめ）に“沸騰して十五分くらい経ったら鍋ごと自室に持って来きて欲しい”と頼んだのあった。そして運ばれて来たそれを付属の耐水耐熱紙で出来た丼に開けている時の恍惚としたルイズを見て、才人は「この牛丼ジャンキーめ」と呆れながらも相づちを打つ。
「そりゃまあ訳も分からずにいきなり隔離施設に放り込まれたら怖がるのは当たり前だよな。でもさ、お前が致死性の病原体を持って

いるかも知れなかったし、逆に俺たちにとって何でもない物が、お前には致命的だったりするかも知れなかったんだぜ？　それに俺も親父とお袋と一緒に隔離されたし」
「わぁってるわよ。ところでお兄、これで温たまがあると最高なんだけど。ねぇ～お兄ぃ～今度作ってよぉ～」
　猫なで声で何を言ってやがりますか。温泉たまごは温度管理がキモなんだぞ。温度計なんか持ってきてねーし。ダメだこいつ。よし、厳しい現実を突きつけてやろうじゃないか、と才人はルイズに語りかける。
「なあルイズ。お前さん毎日牛丼を食うつもりか？」
「ん？」と言うと、きょとんとした顔でルイズは箸をくわえたまま才人を見つめる。ほっぺたにご飯粒を付けたまま子猫のように良く動いていた瞳をこらしてじっと見ながら、こくりと肯いた。“可愛いじゃねーか！　こんにゃろ”と思いながら才人は続ける。
「そうか。さてルイズ、残りの牛丼セットは十九食な訳だが……お前は“まだ十九食もある”と考えている事と思う。だがしかし！　地球製で今後の補充が望めないそれは“あと十九食しかない”のだ！　さあルイズ！　恐れ戦き絶望するが良い！」
　びしっ！　と人差し指を突きつける才人。ルイズは「あっ！」と言い、わなわなと震えながら自分の持つあと一口で完食する牛丼を見つめる。
「七日に、いえ十日に一回……それなら百九十日……七年間……無くても平気だったし……ああっ……でもっ……でもっ！」
　箸を握りしめて紙製丼を見つめ、ぶつぶつ呟きながら内なる葛藤と戦うルイズであった。

■■■■■

　隔離された当初、ルイズは恐怖と不安から泣き叫んでいた。それはそうだ。彼女にしてみれば恐ろしい格好をした者達に囲まれて変

な馬車に押し込められたと思ったら、着いた先では奇妙なマスクを被った全身白ずくめの怪人達に押さえつけられて、杖を取り上げられた上に使用人が着るような薄い生地の上着にズボンを着せられた。そうして真っ白で窓もない部屋に一人ぼっちにされた。

「こわい！　たすけて！　ちいねえさま……かあさま……」

心細さに泣きながら家族の名を呼ぶルイズ。

「……エレねえさま……ひくっ……とうさま……」

何の事情も知らない子供には恐怖以外の何ものでもなかっただろう。この出来事は暫くルイズにトラウマを残したのだが、それはまた別の話である。

しかしルイズは元々は聡明な子である。一週間もすると恐怖心を乗り越え自分の周囲を冷静に観察しはじめる。

食事は果物の味を薄くしたような得体の知れないゼリー状のものだったが不味いと言う程ではない。

白ずくめの怪人達に力ずくで何かされたのは最初の時だけで、今では彼等は着替えを手伝ってくれたり、ベッドのシーツを交換してくれたり、部屋に備え付けられているお風呂に入れてくれたりと、何かと身の回りの世話を焼いてくれる。

最初は使用人の服だと思っていたものは、どうやら寝間着らしい。肌触りがもの凄く良くさらさらしている。それにお風呂に入れられた時に使われる髪や体を洗う時に使われる液状の石鹸と思われる液体はほんのりと花の香りがする。体を拭くタオルの柔らかさはまるで羽毛のようだ。

そうして落ち着いてきたルイズは、自分の世話をしている怪人達の声が女性ばかりである事に、ようやく気付いたのである。

その頃、およそ一週間隔離されていた平賀家一同は未知の病原体等への感染が認められなかったとして解放された。しかしながら突然現れた女児については極秘事項とされ、非常事態発表について一般には「警報で東京として判定されたのは地球側監視網のセンサー

の幾つかが、プログラムのミスで誤作動しており計算結果がずれた為である。実際は銀河系の反対側に発生した小規模なエネルギー移送によるもので、今回の件で監視網の問題点が確認された事は幸いである」つまり誤報であると発表された。
　そんな事もあって彼とその家族は家に帰れない状態である。近所や才人の学校には「父親の仕事の関係で、急に半年ほど家族全員で海外へ行く事になった」と連絡されていた。

「それで所長、あの子についてどこまで分かった？」
　そう言ったのは才人の父親である。
　ここは施設の一室。部屋に居るのは彼ともう一人だけである。
「見た目は我々人類と完全に同じだね。内臓やら骨格やら全く一緒。口腔内粘膜から採取した細胞を調べた結果、アミノ酸がＬ体に糖がＤ体と地球生命と同じだったのは幸いだったよ。スタッフに食事の準備で苦労させなくて済むからね。さて続きだが、染色体の数や形状、遺伝情報がヌクレオチドに結合したＡＴＧＣの塩基で表せる事、細胞内の蛋白質の種類に代謝の仕組みやら諸々全て我々と全く同じ。だがゲノム解析で興味深いものが見つかったよ。まずはミトコンドリアのＤＮＡ型だが、彼女の持つ型は地球人にもジェヴレン人にも存在しない」
“所長”と呼ばれた人物は一気に言うとスクリーンに画像を呼び出す。
「もう一つはここ。遺伝情報で松果体ニューロンのシナプス結合の仕方を決める部分が我々とは根本的に違う。実際の画像で見ると良く分かるよ。画像の左側が彼女の脳、右側が七歳前後の“人類”の女児の脳の三次元スキャン画像だ」
　所長は端末を操作して画像を回転させたり一部を強調表示に切り替えたりしながら説明を続ける。
「ほらここ、松果体の形状と大きさが明らかに違うだろ？　我々に比べて体積比でおよそ三倍、ヨモギの葉の様な形状で左右に明確に

分かれている。内分泌以外にどんな機能を持つのか実に興味深いよ。この二つに着目すると彼女は人類とは近縁だけど別種と仮定できると思う。確実に判断するには脳内活動領域の常時モニターと血液の生化学検査が必要だがね。それで君の方では何か分かったかい？」
「テューリアン側と共同でやっているが、ブレーン宇宙間で共鳴状態が発生した事以外に何も分かっていないよ」
　問われた才人の父親は力無く首を横に振り言葉を続ける。
「あれ程の質量が実体を持ったまま移動したのに重力異常が全く観測されないなんて理論上では有り得ないんだよ。彼女と同じ質量を持つ物質をブレーン間で物質のまま移動させようとした時、通常空間に現れる曲率を計算すると、関東一円が消滅して全地球的に壊滅的な被害を及ぼす大災害になるんだ。それを防ぐにはストレス・フィールドで物質を通常空間から切り離して保護しながら曲率の大きな小さな領域を通過させなきゃならない。しかも計算で求められる許容できる最小の大きさは半径およそ百メートルで我が家なんかすっぽり入ってしまう大きさだ。それにどっちにしても重力異常は発生するんだ。ところがあの子は、理論的に不可能な小さい領域に重力異常も発生させず生身で現れた……まるで魔法だ、お手上げだよ」
　この時に言った最後の言葉が事実を言い当てていた事が判るには、まだ情報が不足していたのである。
　暫く沈黙した後、才人の父親が所長に確認するように言う。
「あの子は、君たち生物学者にとって貴重なサンプルだろう？」
「ああ、確かにそう見る連中は多いね」
「だがな、詰まるところ彼女は親からはぐれた迷子なんだ。迷子は親元へ帰すのが筋だろ」
　才人の父親はそこで言葉を区切り宣言する。
「俺たち“関東工科大学・高次物理学研究所”はテューリアンの研究者達と協力して、生きたままの彼女を必ず親元へ送り届けてみせる」
「日本政府や国連の意向はどうするんだ？　それに世界中の科学者

連中が黙っていないぞ」
「そん時は、糞食らえ！　とでも言ってやるさ。こっちには心優しい巨人たちが味方に付いてるんだ」
所長の問いに悪びれる様子もなく、笑いながら彼はそう言い切ったのである。

異世界の優しい平民　（2）

ルイズが危険な病原体等を保有していないと判明すると、彼女は別な部屋へと移された。それまで彼女が入れられていたのはＢＳＬ－４（バイオセーフティーレベル４。最も厳しいリスクグループを扱うレベルで、日本ではエボラ出血熱等のエマージング・ウイルスはここに含まれる）対応の滅菌陰圧室だったが、今度の部屋は与圧された通常の無菌病室。今のところ、彼女を地球上にある病原体等から守る予防ワクチンを作る目処が立っていないので取り敢えずの処置としてこの部屋があてがわれた。

そして、この部屋には今までと違い外が臨める広い窓があった。部屋に連れて来られたルイズは、窓から陽の光が差し込んでいるのを見て気色ばむ。

“やった！　外が見られる！”

彼女は窓際に駆け寄るり外を見るなり「あっ……」と言ったきり息を呑んだ。

眼前に広がる風景は、見た事も、おとぎ話の中ですら聞いた事が無いものだった。

最初は柵だと思った。陽光を反射してきらきらと光る幾つも柱が立っている様にも思えた。窓の外を鳩ほどの鳥が飛んでいくのが見えたのでそれを目で追う。鳥は柱の立っている方へと飛んで行き……小さな点となって見えなくなった。

ルイズは気付く。あれは何リーグもれた場所に立っている、一つ一つが塔のような建物で今まで自分が見た事も聞いた事も無い大きさだと。そしてそれが何十と言う数で林立しているのだと。

更に視線を下の方に転じる。最初は草が生い茂る野原に見えた。よく見ると草と思った物の間を小さな点が動いている。目を凝らして見るとそれは人であり、草に見えたのは高さのある木々だと気付く。後で知る事になるが、眼下に見えたそこは彼女が収容されてい

る施設に程近い公園だった。
あまりの高さにに目が眩んだ彼女は二歩、三歩と後ずさり窓から離れる。
“ここどこ？　わたし、どうしちゃったんだろ？”
小さなルイズは混乱する。心臓が早鐘を打つ。背中にじっとりと冷たい汗が滲んで来る。目眩が襲ってきて視界が狭く暗くなって行く。自分を連れてきた白服の女性が悲鳴をあげるの遠くに聞きながらルイズの意識は闇に沈んだ。

気が付くとルイズはベッドの上に横たわっていた。いつの間にか眠ってしまったのを誰かが運んでくれたのだろうか？
“……暗い？”
どうやら今は夜のようだ。部屋の明かりは消され窓にはブラインドが下ろされている。
“そうだ、窓の外を見て……”
窓のからの景色を見て気が遠くなった事を思い出す。その窓のブラインドの隙間から微かに光が漏れてきている。
“月が出てるのかしら……”
ルイズはベッドから降りると窓の方へと歩いて行き、恐る恐るブラインドのスラット（はね）の隙間から外を覗こうとして指をかける。くしゃっと言う音と共にスラットが歪んで隙間が広がり、しころ戸の様に硬い物だと思っていたルイズは驚いて手を引っ込める。
何度かブラインドをつんつんと突いてみて危険が無いと判ると、そっと両手でスラットの隙間を広げる。彼女の視界の中で昼間に見た塔の様な建物達が光っていた。それは昼間に見た時の様に陽光を反射しているのでなく自らが光を発している。
よく見るとそれらには等間隔で縦横に筋が入っている。一番近いそれをじっと目を凝らして見ると升目の一つ一つの中で何かが動いている。

それが人であり升目の一つ一つが窓であり光っているのは部屋の明かりである事を理解するのに時間はかからなかった。そして人間と言う比較対象が見えた事で、その建物がトリステインにある王城よりも、ラ・ロシェールで“桟橋”に使われている大木よりも遙かに高い物である事が実感として湧いてきてルイズは呆然となった。

それでも昼間よりは気持ちに余裕がある彼女は見える範囲で景色を見渡してみる。目に入ってきたそれは光の洪水だった。ある所では無数の赤と青白い光の粒がきっちりと分かれて、それぞれが逆方向に流れている。そこを縁取るように動かないオレンジ色の光の点がずっと遠くまで続いている。そんな光の流れが幾つもある。

ある場所では色とりどりの光が明滅していて、まるで宝石箱をひっくり返したようだ。そんな中でも所々に光の点が少ない暗い部分もある。それでも光の海は目が届く限り遠くまで続いていた。初めて見る光景にルイズは一瞬だが自分が星の海に放り出された錯覚に陥る。

「きれい……」

そう呟くとルイズは小さく溜息を吐き、そして無意識に空を見上げた。そこにはハルケギニアで見る大きな双月ではなく、見慣れない小さな白い月が一つ、地上の光に掻き消されそうに寂しくぽつんと光っていた。

“ここ……どこなんだろう……”

二度と家族に会えないかもしれない、そんな予感がして急に寂しさを感じると涙が溢れてきて止まらなくなる。俯(うつむ)きながらベッドに向けてとぼとぼと歩いて行く間にも零れた涙が床を点々と濡らす。ルイズはベッドに入ると枕に顔を押しつけて忍び泣く。そして、いつしか泣き疲れて眠ってしまった。いつの間にか自分の腕に貼られている、ほんの少し血が滲んだ小さな絆創膏に終(ついぞ)気付かずに。

＊　＊　＊

ルイズが居るのと同じ施設の最上階にあるゲストルーム、そこで平賀家の母子は事実上の軟禁生活を送っている。
最初は「勉強しなくてラッキー」などと思っていた才人だが、友達に会う事は疎か連絡さえダメ、外出もさせてもらえない。しかも母親が“付きっきり”で“容赦も手加減も無し”に勉強を教えているので学校で授業を受けるよりもキツい。そんな若干凹み気味の才人の元に、これまた忙しくて最近家族に会えなかった父親が姿を見せた。
「才人、ちょっと来い」
寝ぼけ顔の才人を見るなり開口一番、同意も得ずに引っ張って行く。
「ちょ、とうちゃん。いきなり何すんだよ」
「四の五の言わずきりきり歩け。母さん、ちょっと才人を連れてくから。詳しい事は後で説明する」
「あらあら、いってらっしゃい。才人、何だか知らないけど頑張るのよ」
そうして有無を言わさずに父親が才人を連れて来たのは、彼等が収容されている施設“国立生物医科学・生物工学研究所”の所長室。そこで才人は所長に引き合わされた。
「俺の自慢の馬鹿息子だ。連れて来たぞ」
才人は自分の息子が馬鹿なのを自慢してどうすんだよ、と心の中で突っ込みを入れるが決して口には出さない。出したら最後、問答無用でゲンコツが落下して来るのだ。脳天に対して垂直で落とされるそれは首から背骨を通して尾てい骨にまで衝撃が奔る。これが痛い、とてつもなく痛いので取り敢えず黙っていた。
「いやあ急な話ですまない。なかなか利発そうな息子さんじゃないか。才人君だね？はじめまして、ここの所長をやっている宝条と言う者だよ。よろしく」
「は、はじめまして。とうち、父さんがお世話になってます」
噛みそうになりながらぺこりとお辞儀をする才人に父親が言う。

「取り敢えず詳しい事はこの宝条から聞け。俺は筑波に戻らなきゃならんからな」
「まあまあ平賀君、茶でも飲んで行ったらどうだね？」
「屋上に研究所のＶＴＯＬを待たせてるんで、ゆっくりもしてられないんだわ。お前も暫く家に帰ってないんだろ？たまには休まないと倒れるぞ」
　椅子を勧めながら言う所長に才人の父親は申し訳なさそうな顔をしながら応えながらやれやれと言う表情で彼を見やると、所長が肩をすくめて人の悪い笑みを浮かべながら切り返す。
「あのタフなテューリアン達と一緒に筑波の不夜城に籠城している君に言われたくないね。まぁそのうち落ち着いたら一杯やりに行こうじゃないか」
　筑波にある高次物理学研究所は、それを知る研究者や地元の人々から“不夜城”と呼ばれている。理由は勿論、研究所の明かりが消える事が無いからだ。所長の言葉に才人の父親は、にかっと歯を見せて笑いながら相づちを打つ。
「その時は勿論お前の奢りだよな？　俺んとこは小遣い制で懐が意外と寂しくてね。おっともう時間が無い。それじゃ宝条、こいつとあの子の事は頼んだぞ」
「ああ、分かってるさ。君も無理はするなよ」
　所長が言うと才人の父親は手をひらひらさせながら「それじゃな」と部屋を出て早足で去って行った。
　残こされた才人は所長に促されて応接の椅子に座らせられ、なんとなく居心地の悪さを感じながらも父親と同年齢位であろう所長の方を見る。そう時間を置かずに清楚な美人という感じの秘書が所長と才人の前にお茶を置くと、所長はそれを一口すすり口を開いた。
「才人君、君にお願いがあってね」
　所長が話を始めると才人は緊張した。手は膝の上でぎゅっと握られて口元は真一文字に引き締められている。顎の筋肉が緊張しているので奥歯を噛みしめているのが丸分かりだ。そんな才人の様子を

みて所長は愛想を崩しながら言う。
「ああ、そんなに緊張しなくて良いよ。難しい事じゃないから。簡単に言ってしまうと君の家に現れたあの女の子、たしかルイズちゃんだったね、彼女と一緒に生活して欲しいんだ」
「へ？」
才人は思わず間抜けな声を上げてしまう。
「君のお父さん達はテューリアンと共同で彼女を元の世界へ帰す為の手段を研究し始めたんだが、今は全くの手探り状態なんだ。帰還する手段が見つかるまで彼女はこの地球で暮らさなければならない。これは分かるね？」
所長はそこで言葉を切り才人を見る。才人は理解した事を示すように深く肯く。それをみて所長は満足そうな笑みを浮かべて言葉を続ける。
「今、彼女はバイ菌が居ない病室に入っている。これはね、僕たちにとって何でもない物が彼女にとっては死んでしまう様な病気を引き起こす事も考えられるからだ。それに僕たちには平気な食べ物でも、彼女が食べたら危険なアレルギー症状を起こしてしまうかもしれない。このままだと彼女は美味しい物も食べられずに外にも出られず、帰る事が出来るまでこの施設の病室で過ごさなきゃならない。知り合いも誰も居ない所で閉じこめられたままなんて可哀想だろう？」
見知らぬ場所で、もし自分がそうなったら、そう考えた才人は怖くなった。耐えられるだろうか？　今は閉じこめられているとは言え、母親も一緒だし周りの人に言葉だって通じる。あの子は可哀想なんてもんじゃないだろうと才人は思い再び無言で肯いた。
「彼女が僕たちの世界で“普通に生活”するには、彼女にとって何が危険で何が危険では無いかを調べなきゃならない。けど何も知らないで色々と検査されたら怖いと思うよね？」
才人は考える。うん、怖い。知っていても怖い。知らなかったらもっと怖いだろうな。それも自分より小さな女の子にとっては死ぬ

ほど怖い事になるのかもしれない。そんな才人の考えを読んだのか所長は言葉を続ける。
「そこで才人君、お願いというのは君に“あの子のお手本”になって欲しいんだよ」
“お手本”の語感にイヤな予感がした才人は心に浮かんだ事を尋ねてみた。
「それって僕も同じ検査を受けるってことですか？」
「いやぁ君はなかなか賢いね。そうだよ。それも彼女に安全だと見せる為にね」
「なんで僕なんですか？」
「そりゃ大人よりは子供同士の方が安心するからね」
「注射とかもあるんですよね？」
「ああ、採血したりとか“頻繁に”あるね」
それを聞いて注射が嫌いな才人は怖じ気づいた。どうしようかなと考えていたその時、呼び出し音と共に壁のスクリーンに先程の秘書の姿が映る。
「所長。平賀教授から連絡が入っています。いかがいたしましょう」
「ああ、もう向こうに着いたのか。構わないから繋いでくれ」
所長が秘書に告げるとスクリーンには秘書に替わり才人の父親の姿が映った。
「ちょうど良かった。君の息子さんに話し終わったところだよ」
「いや済まないな。本当は俺から話せば良かったんだが、今日はお偉方が来るから外せなくてなぁ。才人、そう言う事だから頼んだぞ」
「いや、とうちゃん。俺はまだ……」
才人が言い切らないうちに父親の怒鳴り声が響く。
「ばかやろう！　心細い思いをしている小さな女の子を助けてやれないって、お前それでも男か？　言い忘れてたがルイズちゃんは家で面倒見る方向で上と交渉してるからな。彼女はこっちにいる間は俺たちの家族だ。お前も男なら見栄張ってお兄ちゃんらしい事やってみろ、って言うかやれ！」

父親の強権発動、と言うよりも最初から才人に選択の自由は無かったのである。

＊　＊　＊

その日は朝から慌ただしくてルイズは落ち着かなかった。味気ない食事にも窓からの景色にも慣れた。簡単な挨拶と思われる単語も覚えた。最初のうちは誰も魔法を使わない事に違和感を覚えたが、今では特に不思議とも思わなくなっていた。

暫くするとルイズはこの部屋に来た時と同じく、透明な風船の様な物に包まれた状態で別な部屋へと連れて来られた。今度の部屋は前よりも二倍以上は広くベッドが二つ置いてあった。それぞれのベッドの横には小さな机と椅子が置いてありカーテンで間仕切り出来る様になっている。

窓からは今までの塔の様な建物ではなく海が見えた。幾つもの白い筋が海面をゆっくりと走っている様に見える。白い筋の先に四角い何かが見えるけど船なんだろうなとルイズは考える。塔の様な建物の件もありルイズはそれらが自分の想像を超える大きさなのかもしれないと考えていた。

そうしてボンヤリと窓の外を見ていると俄(にわかに)に騒がしくなった。振り返り部屋の入り口にある二重の扉（所謂エアシャワー室である）を見やる。

そこには自分よりも少し年上の男の子が気恥ずかしそうに立っていた。よく見ると見覚えがある。自分がこちらに初めて来た時にその場に居た男の子だ。彼の父親だと思われる人と一緒に甘くて美味しい飲み物を持って来てくれたよね、と思っていると不意に彼が声をかけて来た。

「よう、ルイズ。久しぶり。元気にしてたか？」

男の子が発する言葉で聞き取れたのは彼女の名前の部分だけだった。僅かな時間しか顔を合わせていなかったのに彼は自分の名前を

憶えていてくれた、その事が何故か嬉しかった。彼女は自分の記憶の中から彼の名前を思い出そうとしたが……。
“えーっと。サ、サ……サなんだったっけ？”
才人がルイズの名前を憶えていたのに対し、ルイズはすっかり忘れていたのである。
「なんだよ、憶えてなかったのかよ……でも色々と怖い思いしたんだから仕方ねーか」
彼女の様子から何となく推測した才人はそう言うと自分を指しながらルイズに自分の名前を教え始めた。
「サイト。サ・イ・ト」
「サイロ？」
「サ・イ・ト」
「ファイト？」
「お前わざとやってね？　サイトだよ、サ！　イ！　ト！」
「サイト？」
ルイズがちゃんと言えるとサイトは肯いて人懐こい笑顔を見せる。その笑顔を見て釣られて笑顔になったルイズは何故か不安が消えて行くのを感じたのだった。

才人は、この部屋に入れる様になるまで大変な思いをした。滅菌室に入るのだから当たり前であるが才人自身が徹底的に滅菌されたのである。それは一週間以上に渡り行われた。途中その辛さに何度か泣きそうになったのだが、父親に言われた「彼女はこっちにいる間は俺たちの家族だ」と言う言葉と、ひとりぼっちで放り出された女の子の気持ちを思うと不思議と頑張れたのだ。
そうして色々と口に出せない苦難（？）を乗り越えた才人は晴れてルイズの居る無菌病室へ入る事が出来たのである。そんな彼が再び自分の名前を教えた時にルイズから返された笑顔を見てある想いが心の奥に生まれた。

―何があっても絶対にお前を守ってやるからな―

＊　＊　＊

才人とルイズの同居生活が始まって暫くした頃、ルイズに関して二つの成果が上がった。彼女が気絶した時に採取された少量の血液からｉＰＳ細胞を作り出して培養する事で、それを各種白血球・リンパ球等の免疫系細胞に分化させてワクチンや血清のテストに使える目処が立ったのである。これで実際の投与時のリスクを減らす事が出来る。

もう一つ、宝条所長が言っていた脳内活動領域の常時モニターを行う装置が完成した事だ。それはテューリアンから知覚伝送装置（パーセプトロン）とニューロ・カップリングの技術の一部を提供して貰い機能を極力絞り込んで小型化した物で、センサー部の形状はカチューシャの様にＣ字型をしており若干厚みと幅はあるものの極力軽く出来ていて、子供が常時装着しても負担にならないようにしてある。また、測定されたデータは無線により処理部へ送られる様になっている。比較の為に才人のデータも取得する目的で二人分作られた。

しかしまだ問題は残っている。ルイズに害を為すアレルギー物質の分析である。これはｉＰＳ細胞から分化させた免疫細胞では彼女が持っている免疫情報を受け継いでいない為にテストが出来ない。どうしても皮膚検査や血液検査が必須となる。慎重にスケジュールと手順が検討され、そしていよいよ予定されていた最初の検査を始める日を迎えた。

どんなに科学・技術が進んでも“医学的な検査”には不安が付き纏うようである。子供ならば尚の事。その日の検査は才人にとっても初めて受けるものだ。

一世紀ほど前に“トライマグニスコープ”と呼ばれていたそれはＴＮＭＲＩ（三叉核磁気共鳴画像診断）装置へと進化し、より正確に体内の状態をスキャンする事が出来るようになっている。
過去にはエンジニアが付きっきりで座標決定・解析の操作をしていたが、今では専用ＡＩにより完全に自動化されていて、取得された膨大なデータを処理する事で個々の細胞まで立体化された画像として表示する事が出来る。また時間軸毎の変化を追う事での映像化も可能だ。以前はＸＹＺの三軸同時測定を行うため被検者を密閉された狭い空間に閉じこめる構造だったが、技術的な問題の解決により最新の物は被検者を閉じこめず閉塞感や孤独感を感じさせないオープン型が主流になりつつある。

そんな優れものの装置の寝台に才人は座らせられる。初めての体験なので胸がドキドキしているが、操作コンソールの横にはルイズが不安そうな顔をしながら立っている。普通なら次の被検者は別屋で待機なのだが、彼女に危険は無いと教える為に連れてきているのだ。もちろん検査室は滅菌処置がされており才人とルイズ以外は防塵服にフルフェイスのマスクを着用している。
才人は寝台の上で横になる前にルイズの方を見て笑いながら手を振ってみせる。勿論やせ我慢であるがルイズに怖い思いをさせないという彼なりの決意があった。横になると足首と胴体部そして頭部がバンドで自動的に固定され、ＴＮＭＲＩが低い唸り音を発てて動作し始める。
才人が検査を受ける様子をルイズは黙って見ていた。
寝台に縛り付けられているみたいだけど何をされているのだろうか？　そんな疑問が頭をよぎる。でも才人は笑顔で手を振っていたから危ない事じゃないのかも知れない。そんな事を考えていたら部屋中に低い唸り音が響いて緊張でルイズは体を強張（こわば）らせる。音が響いたのはほんの十秒程度だったが、彼女は才人の事が心配になり近づこうとしたその時、風が吹き出す様な音と共に、才人を寝台に縛

り付けていた物が外れる。
驚いたルイズはその場に立ち止まった。ちょっと怖くて涙目になってしまったがそれでも才人の事が気になって寝台を見ると、彼は既に起きあがっていて彼女に向けていつもの笑顔を見せたのだった。
その姿を見てほっとしたのもつかの間、次はルイズの番だと言う様に、才人は寝台の上に彼女を座らせたのである。

泣きそうになりながらもルイズのＴＮＭＲＩでの検査が終わると、二人は件のカチューシャ状センサーを装着させられ、検査を行う間それは外される事は無かった。これらの行為にどんな意味があるのかルイズは分からなかったが、才人の後に続いて同じ事をしないと何かが終わってしまう、そんな気がしておっかなびっくりしながら検査を受けていた。
検査は順調に進み、ついに最大の難関にして皆が懸念している“採血”の順番が来た。
才人は注射が苦手である。無痛注射針で痛く無いと分かっていても苦手だった。しかも今まで経験したのは腕やお尻に打たれる皮下注射のみであり、採血用の太い針を静脈に刺されるのは初体験だったりする。ちなみに極限まで細くしてある無痛注射針では血球によって穴が詰まってしまうのでこの時代でも採血には使われていない。
防塵服に身を包んだ医師と看護師に促されて才人は腕を出す。ベルトが腕に巻かれ浮き出た静脈を医師が探る。
その様子をルイズはじっと見ていた。医師が看護師から採血ホルダーを受け取り針に被されていたカバーを外すと、ルイズは思わず身を竦める。
その様子を見ていた才人は「ルイズ」と声をかけ、いつもの様にニカっと歯を見せて笑い「平気だよ」と言うと医師を見て無言で肯く。勿論ルイズの前でのやせ我慢だ。医師は「男の子だねぇ」と言って微笑むと才人の静脈に針を刺した。そして採血ホルダーに採血

管を差し込む。減圧されている採血管の中に勢い良く赤黒い静脈血が吸引され満たされて行く。
それを見ていたルイズは「ひっ！」と恐怖に顔を引きつらせた。才人が腕に針を刺されて血を抜かれている。自分もあれをされるのだろうか、と思うと怖くて泣きたくなった。
「ルイズ」
才人が彼女の名前を呼ぶ。見ると才人は平気な顔をしていつもの調子でルイズに笑みを向けている。ルイズは彼の笑顔を見ると何故か安心する自分に気が付いた。これって何だろうとルイズが思い巡らせていると「よし、終わり。よく我慢したな」と才人をからかう様に医師が言い、才人は照れくさそうに俯き（うつむき）頬を掻いている。そんな才人の姿を見ていると何とも言い表せない不思議な感情が湧いて来るルイズだったが、次は自分の番だと思い至ったるとやっぱり涙目になる。
それでも、この一連の儀式めいた事を終えなければならないと感じていたルイズは、ありったけの勇気を振り絞って医師の前に座ると、才人がした様に腕をまくり差し出した。怖くて怖くて、泣き出したいけど才人は笑っていたし、きっと大丈夫だと思い、それでも怖くて目をぎゅっと瞑って横を向いていた。
腕にベルトが巻かれ消毒用アルコール綿が腕をなぞる。そのひんやりとした感触に驚き目を開けると、ルイズのすぐ横に自身の腕を押さえた才人が立っていた。才人を涙目で見上げるルイズ、その彼女に才人は「大丈夫だって。ほんのちょっと、ちくっとするだけだから」と笑顔で声をかける。
言葉の意味は分からないが、何となく安心したルイズはもう一度目を閉じた。ぷにぷにと腕を探る指の感触の後、指先に棘が刺さった時の様な痛みを差し出した腕に感じて声を上げそうになるが歯を食いしばって我慢する。痛かったのは針が刺さった一瞬だけだったが、それでもルイズには酷く長い時間に思えた。
「よーし、ルイズちゃんもよく頑張った」

医師の声にルイズが目を開けると採血は終了していて、看護師が絆創膏を貼っているところだった。看護師はルイズの手を取ると絆創膏の上に置いて「才人君と同じようにしてね」とルイズに言うと才人の方を見た。

ルイズが絆創膏を自分の指で押さえ立ち上がると、才人はルイズに「頑張ったな。偉いぞ」と言いながら空いている手で彼女の頭を撫でた。

その時、ルイズは自分の心の中で何かが溢れ出る様な感じがする事に気付く。それがどんどん膨らんで行くと突然ふわりとした感覚がルイズを包む。その瞬間、何かが大量に彼女の頭の中に流れ込んで来た。しかし“それ”に不快感は無い。一瞬とも永遠とも思える時間でその奔流が収まると、まるでお風呂で上せた様に、ぼうっとしてしまった。

そんな彼女の様子に心配した才人は慌てて話しかける。

「おい！　ルイズ！　大丈夫か？　どうした？」

その言葉を聞いたルイズの双眸が大きく見開かれた。そしてその口から辿々しいく言葉が紡がれる。

「だい……じょうぶ……ことば……わかる」

才人と、そこに居合わせた医師、看護師は驚愕した。

ルイズが紡いだ言葉、それは紛れも無い“日本語”だった。

異世界の優しい平民　（3）

ルイズのアレルギーに関しての調査が完了した。結果は「全て問題無し」だったので彼女の食事は現状の免疫疾患患者向け栄養食から普通の食事へと変更される事が決まった。ちなみにルイズとサイト（と言うよりルイズが主なのだが）の食事については専門チームがその管理に携わる事が決まっていた。

この頃になるとルイズの日本語の理解も大分進んでいて日常会話程度なら難無くこなせるようになっていたが問題もあった。ルイズの場合、聞き取りの場合は言葉を記憶の中にある単語帳と照らし合わせて彼女が元々使っている言語（ハルケギニアの公用語）へと翻訳して意味を理解し、話す場合にはその逆が行われている事が、彼女への聞き取り調査と彼女に装着されている脳内活動領域をモニターする装置（略称：ＢＩＡＭ）が取得したデーターから判明した。所謂“単語丸暗記”による語学の学習方法みたいなものであり文法等についての記憶はコピーされなかったらしい。しかし、そのコピーが行われたプロセスについては依然として謎のままであった。

そしてルイズは“魔法”についての事柄を話していなかった。もし魔法の事を話したら、また色々と検査をうけさせられるんじゃないかと恐れ、口を噤（つぐ）んでいたのである。

このルイズの日本語習得に関して幸いな事が一つ有った。才人の母親である。彼女は才人が学校に戻った時に周りから遅れない様にと、スクリーン越しにだが息子の勉強を見ていたのだ。日本語は曖昧さに寛容な言語であり、ルイズの話す言葉に多少おかしな所があってもコミュニケーションは成り立つ。しかし細（こまや）かな感情の表現や意思を確（しっか）り伝えようとすると、やはりきちんと教わった方が良いに決まっている。その点でマルチリンガルである才人の母親は適任だった。彼女が教える事でルイズの日本語能力は格段に進歩して行ったのである。

蛇足だが、初めてスクリーンに人が映るのを見た時のルイズはの反応だが、何も無い壁に向こう側に人が居る窓が突然現れた、と驚いていた。この時にルイズは才人に「これはどんな“魔法”で動いてるの？」と訊ねそうになったが、検査で怖い思いをしたのを思い出した彼女はそれを口にする事は無かった。

そんなルイズだったが、忽ちスクリーン絡みの操作方法を憶えてしまい、今では自分から才人の母親に繋いでお喋りをしたりフィルタリングされてはいるが一般配信されている番組を楽しんだりしている。子供所以に順応性も高いのだろが、何故か才人と一緒に居る事で安心するらしい。そんなルイズはいつの間にか才人の事を名前ではなく「お兄ちゃん」と呼ぶ様になっていた。

さて、普通の食事になると聞いて喜んだのは誰あろうルイズよりも才人の方だった。ルイズと同居（？）し始めてからこの方、まともな食べ物を口にしていないのだから無理も無い。

また才人に限って“初日の夕飯だけ”は好きな物をリクエストして良いと言われていたので彼は悩んでいた。普段の彼なら大好物の照り焼きバーガーで一択なのだろうが、この時ばかりは違った。この機会を逃すとひょっとしたら退院するまでルイズと一緒の食事メニューとなるかも知れない。そう考えると、そりゃあもう授業で先生に指された時以上に真剣に考えたのである。

まず才人の中に浮かんだのが「米の飯が食いたい！　もちろん味噌汁付き！」と言う思いだった。やはり子供とは言え日本人、慣れない食事が続くと米飯が恋しくなるらしい。何にしようかギリギリまで才人は迷ったが、最終的には候補を三つにまで絞った。後は決断するのみ！と、たかが夕飯如きで人生が決まってしまうかの様に悩む才人を、ルイズは生暖かい目で見ていた。しかしそんな視線に気付けない程、才人の中では切実な問題だったのだ。そしてその決断が予測しえない結果を生む事になるのだが神ならぬ身の彼等（勿論この件に関わった全員である）には知る由もなかったのだ。

ルイズに普通の食事が出される初めての日の朝食は、ビタミン類を調整して食物繊維を加えたオレンジジュースとドライフルーツが入った小麦と大豆を使用したカロリーブロックだった。味はバター風味で仄かに甘くしてあり、しっとりとして食べやすい様になっている。

ルイズは「最初は簡単な物になるよ」と才人や看護師から聞かされていたが、やっぱり少しだけがっかりした。今までの味気の無いゼリー状の食事に比べれば、歯応えがあり味もしっかり付いているので格段にマシなのだが、量が少ないと感じたのだ。食事量について勿論ちゃんとした理由が有るのだが、そんな事は知らないルイズは、ちょっとだけ不機嫌になったのだが、食後に出されたメープルシロップが掛けられたフローズン・ヨーグルトを食べると、たちまちご機嫌になったのだった。

昼食はパンにミートローフ、コーンポタージュ・スープ、野菜サラダと貴族の子女に供される食事としては質素過ぎる物だったが、地球に迷い込んでから今まで、普通の食事を与えられていなかった彼女は濃い目の味付けに餓えていた。それ故にミートローフに掛けられていたデミグラスソースまでパンで拭うようにして全て残さず綺麗に食べたのである。流石は貴族の子女、その食べ方も子供ながら優雅なものだった。

片や一般人の子供代表である才人の食べ方は、まぁ頑張れとしか言い様の無いものだったと付け加えておく。

何だかんだで一日が終わり夕食の時間となる。才人にとっては待ちに待った「久し振りに米の飯が食える」機会が訪れたのだ。食事が運ばれて来て各々に配膳される。才人の前には蓋付きの丼とお椀、小鉢に入った温泉たまご、小皿に盛られた漬物、そして茶碗蒸しが置かれた。

才人はまず、お椀の蓋を開け中を確認する。それは正しく豆腐の

味噌汁であった。ああ！　これだよ、これ！　と久し振りに鼻孔を擽る味噌汁の香りに感動しつつ丼の蓋を開ける。それは芳しい香りの湯気を発てる牛すじ肉の海であった。手間暇をかけて玉葱と共に醤油と味醂そして出汁によって柔らかく煮込まれたそれは正に丼物の王者としての風格を醸し出す一品である。才人は馥郁たる肉の海の中央を退けて飯が見える様にすると、汁により濃い目の琥珀色に輝くステージに温泉たまごを降り立たせた後に、それと肉とを程好く混ぜた。

人それぞれに牛丼のトッピングに拘りがある。ある者は生たまごを溶いて、またある者は黄身のみで、またある者は意地でも紅生姜は乗せないとか、まあ色々とある訳だが、才人は温泉たまご派だった。ちなみに七味唐辛子と言う選択肢はお子様の彼には存在しない。

さあ機は熟した。いざ征かん、牛すじ肉の海原へ！

「いただ……き？」

そこまで言って才人は言葉を切り固まった。理由は強烈な刺すような視線にあった。それは自分にではなく手元の牛丼に向けられている。ふと見るとルイズが身を乗り出さんばかりに才人の持つ牛丼を食い入るように見つめているではないか。

無言で牛丼を見つめるルイズ。時折その愛らしい鼻をひくつかせている様は小動物の様だが、目の輝きはそんな可愛いものではなく獲物を狙う肉食獣のそれに近いものだ。

なんだこいつ、やばい。マジやばい。なんで俺の牛丼をガン見してんだよ。これは俺んだぞ。久しぶりに食う米の飯なんだぞ。だからそんな見るなって。ああっ！　もう！

ルイズの視線に耐えきれず、ついに才人は観念し、丼を彼女の前に差し出した。

「いいか？　一口だけ、一口だけだからな？」

ルイズは念を押す様に言う才人の顔と丼を何回か交互に見ると、花が咲き誇るかのような満面の笑みを湛えて無言で丼を引ったくり、自分の前に置かれた料理には目もくれず手にしたフォークで温泉た

まごが程好く絡んだ牛すじ肉と玉ねぎとご飯を一緒に掬い上げて口へと運んだ。
なにこれ、今まで食べたことない味付けだわ。口にした事の無い味覚に戸惑いながらもルイズは咀嚼する。不思議な味付けに未知の食感。かと言って不快感は無く寧ろ美味しく感じる。お兄ちゃんは一口だけだぞと言っていたけど、ダメだわ止まらないわ、って言うかこんな美味しい物があるなら最初から出してよね。と、心の中で悪態を吐きながら彼女は黙々と牛丼を食べる。
「おいルイズ、一口だけって言ったじゃんか！　返せよ！」
「やだ」
手を伸ばして牛丼を奪還しようと試みる才人を躱しながらルイズは間髪入れずに短い拒否の言葉を返して、守る様に丼を抱え込みながら食べ続ける。
この事態に医師と研究者達は慌てた。彼等はルイズに対して段階的に様々な食物を与えて変調を来さないか、免疫系に変化が起きないか等の経過を観察しようとしていたのだが既に手遅れ、計画は台無しになってしまった。
こうしてルイズは牛丼ジャンキーへの道を一歩踏み出すと同時に才人に対して遠慮と言うものが無くなったのだった。

＊　＊　＊

「では彼等に起こった“現象”について、現状で判明している事をお浚いするとしようか」
国立生物医科学・生物工学研究所の会議室の一つに宝条所長の声が響く。
突然ルイズが日本語を理解し、辿々しいながらも会話が行える様になるという常識では考えられない“現象”を目の当たりにした科学者達は困惑していた。
才人とルイズに装着されていたＢＩＡＭと室内をモニターしてい

たカメラが、その時の様子を克明に捉えていた。

才人がルイズの頭に手を置いた時点で、まずルイズの「ヨモギの葉の様な」と形容された彼女の脳内にある松果体様器官の中心から活性化された領域が葉脈状に広がって行く。それに呼応するかの様に才人の脳の側頭連合野、とりわけ言語野にニューロンの活性化を示す反応が集中する。

その反応の仕方も常軌を逸していた。それまでの才人の言語野の動きをＢＩＡＭは記録しているが、その反応は神経細胞が次々に連鎖反応していく、例えれば雲の中を稲妻が走り回る様な、通常のヒトに見られるパターンを描いていた。しかしルイズの松果体様器官が活動し始めた時に才人の脳内で見られた反応パターンは言語野全体が塗りつぶされる、いわば神経細胞が一斉に活性化したと判断せざるを得ない状態となる。

その状態が十ミリ秒と言う極めて短時間の内に終わると、今度はルイズの脳内、特に海馬で新たな反応が現れ始める。

それは人間が母国語以外の別な言語を学習している時のそれに酷似していた。しかし、聴覚野や視覚野をすっ飛ばしていきなり海馬から側頭連合野へと反応が流れて行くのだ。

しかもその速度が常識から外れていた。ヒトの神経繊維上での信号の伝導速度は速くても秒速一二〇メートル程度であるが、ルイズの脳に見られた反応の伝導速度は秒速一万キロメートルにも達する事が判明した。

それらの反応が何百回と繰り返され、最後にルイズの前頭前野の数カ所に強い反応が現れた後で彼女の松果体様器官に出ていたニューロンの活性化反応は急速に収まって行く。

ルイズが才人の問い掛けに対して日本語で応えたのはその直後である。

まとめを報告した生物学者が最後に「現象面だけ見ても何が何や

ら皆目見当も付きません」と諦めの溜息と共に締めくくった。
　この場には居ないが筑波の高次物理学研究所の面々とテュリオス、通称ジャイスターに居るテューリアン科学者もネットワークを介してリアルタイムで参加している。
「まるで通信でもしているみたいだな」
　沈黙が支配する中、一人の物理学者が言葉を漏らした。それが切っ掛けとなったのか各々が発言を始めて会議室は騒然となる。
「生体の神経系で直接に記憶の交換とか有り得ないだろ！」
「才人君の脳内で腕に関する部位には通常の反応しか出ていないから接触が直接原因ではなさそうだが」
「空間を隔てた生体の脳同士が直接情報交換するなんて」
「ＢＩＡＭを通して情報が流れ込んだとは考えられないか？」
「いや、それは有り得ないだろう。知覚伝送の技術を応用しているとは言え、あれは神経細胞の反応を拾うだけに特化した物だ」
　様々な推測と憶測が飛び交う中、宝条は両手を挙げながら皆に発言を抑えるように告げると、スクリーンの一つに向き直る。
「テューリアンの方々にお聞きしますが、似たような現象を起こす生命体をご存じありませんか？」
　遠くテュリオスからネットワーク越しに参加している巨人達の中の一人が宝条の質問に応える為にスクリーンの中央に進み出た。その表情には慣れた者ならそれと分かる彼等独特の戸惑いが表われていた。
「光を含む電磁波や化学物質を利用して個体間に於いて“記憶そのもの”を伝達する生物は確かに存在します。ですが、それ等は例外なく神経系や皮膚に特殊な送信体と受容体を持っており、伝達された記憶の転写方法も最終的に生化学的な物で行われてます」
　彼はそこで一区切り入れ、少しの間を置いた。
「今回の事例ですが現象面から見ると相関が有るように思えます。ですが双方で起こっている反応が全く違う上に、彼等の間で何が媒介して記憶が転写されているのかも不明です。いえ、記憶の転写と

我々が思いこんでいるだけで全く別なものかも知れません。前例が全く無いので我々も困惑しています」
質問に答えたテューリアン科学者はそう応えると「せめて電磁波だけでも観測が行われていれば、何かしらの手掛かりは掴めたかも知れませんね」と付け加えた。
結局、ルイズと才人の間に起こった謎の現象について「何も分からない事が分かった」と言う事が確認されただけであた。
それを受けて宝条はスクリーンの一つ、筑波に居る物理学者チームへ苦笑を浮かべながら声をかける。
「と、まあ。こちらはこんな状況だよ。ルイズ嬢との意志疎通が出来る様になったのは僥倖だけど、なんとも難しい課題が増えてしまってね。それでそちらの方の進み具合は？」
宝条が言い終わると、筑波チームの面々が映っている中で、面長の顔に太眉で厚い唇、柔和だが強い意志の光を湛えた目を持つ三十代半ばと思われる男性が拡大されてスクリーン上に大写しとなる。
「平賀教授の補佐と今回の件の解析を担当している南武洋一郎（みなたけよういちろう）です。私の方から説明します」
彼がそう言うと、また別なスクリーンに数式やグラフ、図表が表示される。
「我々は現状で得られているデーターを元にして彼女が居たであろうブレーン宇宙を特定する作業を行っています。ブレーン宇宙間の移動、これを便宜的にＰＳ転位と呼びますが、ルイズ嬢の転位には理論面で辻褄が合わない点が多々あります。例えば我々の理論ではＰＳ転位に於いての通常空間への出入口はアインシュタイン－ローゼン・ブリッジとして表現出来るのですが、彼女の転位した時のデーターを解析した結果、理論面からは説明不可能な空間接続となっています」
南武はそこで言葉を区切りスクリーンに別なデーターと図を表示させた。図の一つは二つの平面を両端がラッパ状になった円筒面円が繋ぐ図形が表示されている。もう一つは一枚の奇妙に捻れた細い

リボン状の平面が二つの平面の間を渡っている図形である。
南武は、まず一つ目の図形を指して説明を始めた。
「アインシュタイン―ローゼン・ブリッジ、所謂(いわゆる)ワームホールによるブレーン宇宙間の接続は略図として表すと、この様になります。この図では高次空間と共通余剰空間は省略してありますが、敢えて言えばこのZ軸が共通余剰空間の一つの次元に該当します。もう一つがルイズ嬢が転位した時のデーターを解析した結果を略式で表現したものです。実際には高次空間と共通余剰空間で複雑なパターンを示しているのですが視覚化が不可能な為この様な図となっています」
南武は確認するかの様に再び言葉を区切ると、生物学者のチームの誰もが黙って首是した。それを見て彼は説明を続ける。
「アインシュタイン―ローゼン・ブリッジの通常空間に於ける写像は中心に向かうに従って空間の曲率が変化する球体として表せます。この時空の曲率が大きくなり事象の地平面を形成した場合には自転しないブラックホールと等価になるのは古典理論でも論じられていて、勿論その出現と消滅には重力異常を伴います。一方、ルイズ嬢の方ですが……謎だらけです。データーには通常空間との接続で明確な不連続面、つまり微分不可能な領域が形成されています。更に接続面が球面では無く平面となっています。我々が使う高次空間移動で円環運動するブラックホールにより同じ様な接続面が形成されますが、その場合でも辺縁部は微分可能な連続した超曲面から成り、その生成・消失に於いては惑星系に影響を及ぼす程の強い重力波を発生させます。これ故に宇宙船の高次空間移動は星系への影響を少なくする為に、主星から一光日以上離れた場所で行う事になっている訳です」
南武はそこで一息吐き手元のボトルから水を一口飲むと、彼の生真面目な性格を現すかの様な口調で淡々と話し始める。
「まだ他にも彼女の転位に関して現状の理論と合わない部分が多々あります。しかし其れ等の理論面での考察と解決は取り敢えず先送

りにして、彼女が存在していたブレーン宇宙と、そこでの時空位置の特定をしなくてはなりません。そしてブレーン宇宙についての解析とそこでの時空位置の特定の作業は終わりました」
　南武がそう言った途端、どよめきの声が上がるが、それを遮る様に彼は声を大にして続ける。
「だからと言ってルイズ嬢を直ぐに送り返せる訳ではありません。解決すべき問題が何点もありますし技術的課題も、それこそ山ほど出て来るでしょう」
「それについては俺の方から話そう」
　南武の説明を引き継ぐ形で筑波チームのリーダー、才人の父親である平賀教授が話し始める。
「彼女が居た座標を特定出来たとしても、ブレーン宇宙間でのＰＳ転位の各々の端点は相対座標でしか表せない上に、彼女の居た惑星の自転・公転、恒星系の銀河内での公転や律動に銀河の移動に空間の膨張と、ざっと上げただけでも此れだけのパラメータが逐次変化している訳だ。つまり彼女側の始点が分かったからと言って転位させたら「そこは真空の宇宙空間でした」と確実になるだろう。彼女を無事に家に送り届けるには幾つかの手順を践まなければならない」
　平賀教授は更に続ける。
「まずはルイズ嬢が居たブレーンへ物質をＰＳ転位させる為に必要なエネルギーを十トン程度の質量で計算すると、アッタンにあるジェヴレン・サブシステムで出せる最大出力の七十倍以上にも及ぶ。後で話すが最終的には最低でも百トン以上の物を送り込む必要が有ると考えている。その為に新たな専用エネルギープラントの建設が必須だが、幸いにもテューリアン側で建設を担当してくれる事で話が付いた。こいつの建設にかかる期間は地球時間で凡そ五年以内との事だ。このエネルギープラントの建設開始と同時に、ＰＳ転位用の変調システムの実験と実用化開発を開始する必要があるが、現時点では開発期間がどれ程になるのか不明だが、何としてもエネルギープラントの完成に合わせて完成させたいと思う」

平賀教授はそこまで言うと南武へと視線で合図を送る。彼はそれを受けてスクリーンに映る画面を切り替えた。
「それでは変調システム完成後のミッション概略について説明します。まず送り先ブレーンでの初期実験宙域は今回特定された座標から二十万光年以上離れたところに設定し、万が一にも目的地の恒星系と其れが属する銀河に対して出来るだけ影響が無い様にします。この初期実験宙域に低エネルギーの物を転位させる事でこちら側へのフィードバックが正常に検出が出来るかの確認を行います。ここまでをフェーズ1とします。この確認の後、ミッションはフェーズ2へ移行します。フェーズ2では質量千キログラム未満の共通余剰空間通信技術試験体を複数送り込み、ブレーン間での通信リンク技術の確立、及び空間膨張率と目的銀河の移動ベクトルの測定を行います。不確定要素は有りますが、変調機の完成後から遅くともフェーズ1と2の完了は二年と見積もっています」
「最短でも足掛け七年のプロジェクトか」
「いいえ、それで終わりではありません。このミッションは一人の迷子を無事に親元まで届ける事で完了するのです」
誰かがふと漏らした言葉を受けて、南武は人の良さそうな笑顔になり言い放つと、また大真面目な顔に戻り話を続ける。
「ブレーン間通信リンクが確立された後、ミッションはフェーズ3へと移行します。ここでの目的は目標星系の探査と惑星の特定です。フェーズ2で得られた空間膨張と銀河移動のベクトルを元に開始端点座標の補正を行います。そうして得られた時空座標を中心に半径一光年の球面に三〜五機の無人観測機を送り込み恒星系が存在するかを確認します。この無人観測機ですが、自立航行能力を持たせておき存在が確認出来た恒星系まで航行させて詳細な惑星系探査を行わせます。ここでルイズ嬢からの聞き取りで彼女が居た場所では目視で大きな月が二つ見えていたと言う事が判明していますので、比較的大きな衛星を二つ持つ惑星が見つかれば目的地の確定と言う事になります。順調に行けば一年強で完了し、次のフェーズ4へ移行

します」
　南武は一旦区切り、今一度手元の水で口を潤すと話を続ける。
「フェーズ４は本ミッションの最終フェーズとなります。目標惑星上でルイズ嬢の実家を特定し連れて行く必要がある事から、惑星上での有人探査・調査が必要になると考えられます。また、ブレーン間を接続するアインシュタイン－ローゼン・ブリッジは理論上は可逆性を持ち得ません。故に探査・調査に携わる人員の帰還用のエネルギープラントと転位用変調システムの建設が必須となります。惑星上での調査方法等の仔細については、実際に現地の状況を確認出来てからになるでしょう。更にこのフェーズに関しては惑星への上陸と調査隊の安全確保の為にＵＮＳＡ（国連宇宙軍）の協力を得る必要があると考えます。以上が本ミッションの概要です」
　一通りの説明が終わる誰もが溜息を吐いた。この宇宙とは別のブレーン宇宙に行き、そこに在る惑星に上陸し帰還する。足掛け十年以上に渡り遂行されるミッションである。科学的・技術的な発見や進歩が見込める壮大な計画であるが、その主たる目的は“迷子になった一人の少女を親元に帰す”事なのだ。
「君達、地球人（テラン）が、こんなにも御人好しだとは思ってもいなかったよ」
　参加しているテューリアンの一人が言うと宝条が何を当たり前の事を言っているんだとばかりに笑いながらやり返す。
「永いこと一底抜けに御人好しな隣人達（テューリアンにガニメアン）と一緒に居るからね。我々だって少しは見倣うさ」
　その言葉で場が和むと「ミッション名を決めなきゃな」と誰かが呟いた。それに対して平賀教授が得意気な笑みを浮かべながら応えた。
「それはもう考えてある。プレイアデス・オペレーションなんてのは、どうだろうか？」

異世界の優しい平民　（3）（後書き）

※プレイアデス（プレアデスと書かれるのが一般的）について
元ネタである「プロテウス」に語感が近いと言う事で。ギリシャ神話の女神の名前ですが古代ギリシャ語の『出航』を語源とする説があります。
語感的にはプロメテウス（先見の明を持つ者、熟慮する者）にしようかなとも思ったのですが、こちらは意味的に苦しいので止めました。

異世界の優しい平民　（4）

夜も更けて日付も変わろうかと言う時間になってもトリステイン魔法学院、その女子寮に在るルイズの部屋の灯りはまだ消えていない。懐かしさも手伝って才人とルイズが思い出話しに華を咲かせていたからだ。

しかし毎日規則正しい健康的な生活を送ってきたルイズはそろそろ限界が近付いている様で目蓋の下がり具合が怪しくなって来ている。それに気付いた才人はルイズを促した。

「おい、ルイズ。お前そろそろオネムの時間じゃないのか？」

「んー……眠いかも。うん、寝る。着替えなきゃ」

ルイズはふにゃふにゃと目を擦り箪笥の引き出しを開けて寝間着を取り出した。マントを脱いでクローゼットに仕舞うと才人に向き直る。因みにルイズが取り出した寝間着はパジャマにそっくりな物で、彼女は部屋着としても使えるそれを気に入っていた。帰還の際に持って来た物が自身の成長でサイズが合わなくなるとそれを元に型紙を起こして貰い、時々の成長に合わせて型紙を修正させてオーダーメイドで作らせているのだ。ルイズとしては地球製の綿織物の肌触りが好きだったのだが、ハルケギニアには同等の物が存在しないので仕方なくシルクを使っていた。

「お兄、悪いんだけどちょっと部屋から出てって貰える？」

「何だよ、別に良いじゃんか。昔は「ボタンが～」とか言って半ベソかきながら俺に着替えさせてたくせに」

才人がニヤニヤしながらからかうとルイズは耳まで真っ赤にして怒鳴りつけた。

「な、ななな何バカ言ってんのよ！　お兄が良くても、あたしがダメなの！　文句言わないでさっさと出る！」

「お～怖い怖い。んじゃ俺は廊下でこのごつい装備から着替えるとしますか」

才人が肩を竦めて笑い、プロテクターの左手部分を外しながら廊下へと出て行こうとするとルイズが追い討ちをかける。
「あたしが良いって言うまで絶体に入って来ないでね！　覗いたら食料全部没収で朝ごはん抜きだかんね！」
ムキになるルイズに対して才人は半ば呆れた様に笑いながら「はいはい」と言い、背中を向けて左手を挙げ「それじゃ着替えたら呼んでくれ」と言い残すと廊下へと出て行った。その挙げた左手の甲にはハルケギニアで言う処の“使い魔のルーン”が刻まれていた。
ルイズは才人が出て行ったドアが閉じるのを確認すると顔を伏せて「お兄、ごめんね……」と消え入る様に小さな声で呟くのだった。

＊　＊　＊

時間は学院の寮にあるルイズの個室に才人が荷物を運び終えたところまで遡る。
「あー終わった。ちょっと疲れちゃったわね。って事でお兄、おやつにチョコレートちょうだいな」
「運んだの俺だし。お前は俺の前をウロウロしていただけじゃん。それにさっき食ったばかりだろ。チョコは食い過ぎると鼻血出るんだぞ」
「だってその荷物ってお兄の食料だし自分で運ぶのは当たり前じゃない？　ちゃんと部屋には案内してあげたじゃない。だからご褒美にチョコレートっ、チョッコレェ～イ～トッ！」
手拍子をしながらチョコを要求するルイズに「お前はお子様か……。それに牛丼はお前の所有物になってるんだけどな」と才人がツッコミを入れる。
全くこんだけ高さあるのにエレベータの一つも無いってどんなだよ、と文句を垂れながらも、階段を昇る時に純白のパンツに包まれたルイズの可愛らしいお尻を見放題だった才人の機嫌は悪く無い。否、寧ろ上機嫌である。その光景は彼の脳内にしっかりと焼き付け

られているのだ。そしてそれをルイズに気取られなかったのは流石ムッツリ紳士と言うべきか。実際は、下手な事を言ったり態度に出したりすると、先程の様に鉄拳制裁を受けるかも知れない、と言う恐怖に因って平静を装れたのかも知れない。挙動不審になる寸での所で才人は踏み留まれたのだ。

「俺も少し疲れたから何か飲みながらでも食うか。こっちだとやっぱり紅茶みたいな物になるのか？」

そんな遣り取りをしているとルイズの部屋に妙齢の女性が訪ねて来る。若葉色の髪をアップに纏め眼鏡を掛けたその女性は学院長秘書のロングビルと名乗った。

彼女は歩兵装備を着けた才人を怪訝な表情で一瞥すると、ルイズに学院長からの用件を伝える。それはルイズの要求に応じて学院長直々に面会を行うと言うものだった。

「では今から半時程後までにいらして下さいませ」

ミス・ロングビルはそう言って一礼すると学院長室へと戻って行く。

その後ろ姿を見送った才人が信じられない物を見たと言う様な呆けた顔でルイズに問う。

「なあルイズ、ちょっと聞いて良いか？」

「あによ」

美人を見て才人が鼻の下を伸ばしてると思ったルイズは、何故か自分が不機嫌になっている事に気付いて、慌ててそれを誤魔化す様に短く応えた。そんな彼女の態度に気付かずに才人は質問を口にする。

「あの人の髪の毛って染めてんだよな」

「違うわ。地毛よ」

「マジか？」

「マジよ。他にも真っ青とか真っ赤とか紫とか居るし」

「マジでか？」

「マジでよ」

ルイズの言葉に才人は驚きで目を丸くして言った。
「お前の髪色の事だけでも議論百出だったって聞いてたけど……。こりゃ生物学者連中が知ったら発狂するな」
「宝条先生は大喜びするかもね」
溜息を吐きながら言う才人を見て、彼が注目したのがミス・ロングビルの髪の毛だった事に何故か安心したルイズは楽しそうに応えると彼を促す。
「それじゃさっさと学院長との面会を済ませちゃいましょか」
「俺、このままの格好で良いのかね？」と才人は自分が装着している歩兵装備を指して言うと、ルイズは「たぶん大丈夫。貴族達はお兄の事を平民風情としか見ないから、余程汚い格好をしてない限り着てる物に一々文句を付けたりしないと思うわ」と不機嫌そうに眉根を寄せて言葉を返し、才人を連れて学院長室へと向かおうとした。
すると才人は「んじゃもう少しマシな配色にすっか」と言うと左腕の部分にあるカバーを開けて何やら操作をすると分割迷彩が忽ちのうちに真っ白の冬季迷彩になる。
「どうだ？　これに剣でも差せば、お姫様を守る騎士っぽく見えたりしてな」と笑いながら言う才人に対して一瞬、驚きの顔をしたルイズは「と、とととんちんかんな事いってんじゃないわよ。そ、それにトリステインじゃメイジでないと騎士になんかなれないんだから」と返すや、ぷぃと顔を背ける。そんな彼女が何故か耳まで真っ赤になっていた事に朴念仁の才人が気付く事は無かった。

その頃、学院長室では学院長のオールド・オスマンとルイズを引率していた教師、ミスタ・コルベールが話しをしていた。
「全く、小娘の我儘なんぞ捨て置けば良いのに要らん手間を取らせおって。とは言え公爵家の不興を買って寄付金が打ち切られるのも痛いしのう」
白髪に長い白髭と如何にも老賢者と言う風貌に似合わぬ面倒臭そうな言い様でオスマン翁は口を開くと鼻毛を一本毟り取った。それ

を見ながらコルベールは内心、毎日ヒマそうにしているくせにと毒づくが面(おもて)には出さず詫びを言いはじめた。
「申し訳ありません。私がもう少し強く言えば……」
頭を下げて詫びの言葉を続けようとするコルベールをオスマン翁は片手で制する。
「お主の性格では、そう強く言えんじゃろう。それにしても公爵家に恩を売った平民なんぞ、終(つい)ぞ聞いた事が無いのう。本当にその青年はメイジでは無かったのかね？」
「はい。彼は奇妙な馬車程の大箱と共に召喚されまして。その時にですが危険が無いか“ディテクト・マジック”で調べた時には何も感じられませんでしたので彼は確実に平民です」
コルベールがそこまで言った時、秘書のミス・ロングビルがルイズ達の来訪を告げた。
「来たか。ミス・ロングビル、通しなさい」
ロングビルはオスマン翁の言葉に「はい」と短く応えると学院長室の扉を開けた。
「失礼します」と言う声と共にルイズが学院長室へ入って来る。その後を追って部屋に入ろうとした才人はロングビルに止められてしまった。
「お呼びしたのはミス・ヴァリエールだけです。呼ばれていない、まして平民を入れる事は出来ません」
「えー？　俺も当事者なんですけどね」
そんなロングビルと才人の遣り取りを見てオスマン翁は命じた。
「構わんから通しなさい。彼には聞きたい事もあるしのう。それとミス・ロングビル、済まんが暫く席を外して貰えんかな」
ロングビルは少しだけ不満そうに「分かりました」と言うと学院長室を後にした。それを見届けオスマン翁はコルベールに“ロック”と“サイレント”の魔法をかけさせる。コルベールが振るう杖から光の粒子が舞う様を見ていた才人は「すげえ……」とだけ言って絶句した。

「さて、ミス・ヴァリエール。確か“コントラクト・サーヴァント”の件じゃったの。免除しても良いんじゃが、その場合お主は相当に不名誉な扱いを受ける事になるぞ。それでも良いのかのう？」
オスマン翁は品定めでもするかの様な厳しい目つきでルイズを見つめながら言うと机の引き出しから水煙管（みずぎせる）を取り出して吹かし始めた。暫くの間を置いてルイズが話し始めた。
「構いません。相手の身分の貴賤を問わず恩義に報いる事が出来ずして貴族たり得ないと思っていますし、私の両親も支持してくれるものと確信しています。私が召喚してしまったミスタ・ヒラガの縁者の方々からヴァリエール家が受けた恩は返しきれるものではありません」
ルイズはそう言って真っ直ぐにオスマン翁を見返す。暫しの沈黙がありコルベールが口を挟む。
「しかしだねミス・ヴァリエール。“コントラクト・サーヴァント”を行って属性を固定しないと君はこの先の殆どの授業を受けられない事になる。そうなると卒業は疎か進級さえ危ぶまれるんだよ」
「ではミスタ・コルベールにお尋ねしますが“人間”を召喚した私の属性は何なのですか？　風ですか？　火ですか？　水ですか？　土ですか？　どうか無知な私にお教え願えませんでしょうか」
「そ、それは……」
ルイズの問いにコルベールは口を噤（つぐ）むしか無かった。
「ふぉっふぉっふぉ。こりゃ参ったのう。確かに人間が召喚されるなんぞ前例の無い事じゃからな。とは言えミス・ヴァリエール、これは学院創立以来続く決まり事なんじゃよ。ここで例外を作ってしまうとのう……後々に面倒事が起きるのでな」
ルイズとオスマン翁の視線が火花を散らさんばかりに交差し、二人の間にぴりぴりとした険悪な空気が流れる。その時、場の空気をぶち壊す才人の間の抜けた声が響いた。
「あのー、質問良いですか？」
ここまで空気を読んで黙っていた才人だが、どうしても聞きたい

事があったので思わず言葉を発してしまったのだ。それに自分が原因で何やらルイズが不味い立場に追いやられるのも面白く無い。緊張感の無い有り様で突っ立って手を挙げた才人を三人は注視する。
「簡単に言うと俺を使い魔にする、しないで揉めている訳ですよね？」
才人の言葉を聞いてオスマン翁は何やら愉快そうに才人を見ている。ルイズは何言ってんの？　と言いたげな面持ちだ。
「それと新しい使い魔を召喚する為には契約の有無に関係無しで、前に召喚したものが死亡していなければならない。これで合ってますよね？」
「うむ、概ねその通りじゃな」
オスマン翁は肯定の言葉で応えると、才人は顎に手を当てて暫く考えると慎重に言葉を選んで更に質問をする。
「ええと、常識的な事を聞くようで恐縮なんですが、死ぬって事は心停止、いえ心臓が止まってしまうって事ですよね？」
コルベールが「何を当たり前の事を言ってるんだね？」と才人を胡散臭げに見ながら答える。それを聞いて才人は頷くとルイズにとっては信じられない事を言いだした。
「そうですか。それなら俺、ルイズの使い魔って奴をやりますよ」
「ちょっと！　お兄！　何言ってんのよ！」
慌てるルイズに才人は近付いて小声で耳打ちをする。
「なぁルイズ。俺達の所じゃ普通に心臓止めて手術をやってるの、お前は知ってるよな？　心臓移植手術なんて一時的に心臓が無い状態だし」
才人がそこまで言うとルイズは「あっ！」と小さくて声を上げた。才人は小声で更に続ける。
「別に胸を切って開けなくても心臓を止めたり動かしたりは自由自在だしさ。人口心肺を付けてりゃ一時的に心停止させても確実に蘇生できるし。宝条先生なんか大喜びでやってくれると思うぞ？」
「でも、お兄。それで“契約”が解除され……」

ルイズは戸惑いながら反論しようとしたが才人の言葉がそれを遮る。今度はルイズの耳元から離れオスマン達にも聞こえる様に普通の声量だ。

「俺が帰れる様になるまで最低でも五〜六年はかかるだろうし。まぁ正直なとこ、それまでお前に世話になりっぱなしってのも癪だからさ、使い魔やってやるよ」

それに小さい頃に“お前を守ってやる”と誓っちまったしな、と才人は心の中で呟いた。

「話しは纏まった様じゃのう。ではミス・ヴァリエール、契約の儀式はここで行うかね？　儂等が証人なれるしのう」

「ええっ？　こ、ここここ、ここでですか？」

それまでの態度が一変してルイズは顔を真っ赤にしながら言葉もしどろもどろになった。

「お前は鶏(にわとり)か。ってルイズ、その契約って何をどうするんだ？」

そんな才人の問い掛けも聞こえないのかルイズは「そうよね。契約だもの無しと同じよね。でっ、でもお兄と契約だなんて考えてもいなかったし」と赤い顔で何やらブツブツと呟いている。そんなテンパッているルイズを余所にオスマン翁は笑顔で才人に尋ねた。

「ところでお主、先程気になる事を口にしたのう。“帰れる”と言ったが何処に帰るつもりなんじゃね？　それとミス・ヴァリエールとかなり親しい間柄の様じゃが……良かったらその辺の経緯(いきさつ)を教えてくれんかの？」

そう言うオスマン翁の鋭い光を宿した目は全く笑っていなかった。その視線を受けて才人は内心「しまった！」と思った。

「あー、まあその、何と言うか」

どう誤魔化そうかと才人が言葉を濁していると、いつの間にか現実に戻って来たルイズが毅然と言い放つ。

「その件につきましてはヴァリエール家の私事ですから、お答えする必要は無いと存じます。どうしてもと仰るのでしたら当家の当主に直接お尋ね下さい」

「ほっほっほっ。こりゃ手厳しいのう。まあ良いわ。コントラクト・サーヴァントが出来れば晴れてお主は進級じゃ。その青年も承諾した事だし、さっさとここで済ませてしまいなさい」
好々爺然とした雰囲気になったオスマン翁がそう促すと、ルイズは再び真っ赤になった。そんなルイズを見て才人が不思議そうに「お前なに赤くなってんだ？」と問うとルイズは赤い顔を更に紅潮させて才人を怒鳴りつけた。
「う、うっさいわね！　お兄、いいからそこに座って目を瞑っててくれる？」
ルイズの剣幕に押されて才人は目を閉じる。するとルイズがその愛らしいソプラノの声で何やら呪文のような言葉を紡ぎ始めた。
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」
その詠唱が終わると才人は両頬に小さく柔らかい手が添えられるのを感じた。と同時に「これは儀式だから数には数えない。数には数えない」と言うルイズの呟きも聞こえて来る。なんぞ？　と才人が考えていると唐突にそれはやって来た。

―むにゅっ―

唇に柔らかい物が押しつけられる感覚。非童貞の才人はそれが何であるか理解した。と同時に驚きで目を開けると、そこには目を閉じて紅潮させたルイズの顔があった。
え？　なにこれ？　なんでルイズが俺にキスしてんの？　いや嬉しいんだけどなんか申し訳ないような。ってなんぞこれ。
才人が混乱して目を白黒させていると、ルイズは唇を離してオスマンとコルベールへと向き直り、俯きながら「終わりました」と告げる。
「ちょっとルイズいきなり何を……あがっ！　痛っ！」

文句を言おうとした才人は、まるで焼けた火箸でも突き立てられたかの様な痛みが左手の甲に奔(はし)るのを感じ、思わず右手で左手首を掴み蹌(うずくま)った。その様子を見てルイズは慌てて才人の側に座り込み彼の顔をのぞき込んだ。

「お兄！　大丈夫？」

「サモン・サーヴァントは何回も失敗したがコントラクト・サーヴァントは一回で成功させたね。ふむ、使い魔のルーンが刻まれているな。痛みはすぐ治(おさ)まるから、その篭手を外しなさい。ルーンの確認をしなくては」

心配そうに才人に寄り添うルイズ。それとは反対にコルベールは何の感情も表さずに才人に命じる。

「すぐ治まるって……ったく痛いなら最初に言ってくれよ」

額に脂汗を浮かべて悪態を吐きながらも才人は左手のプロテクターを外して、コルベールに見える様にと、その手を差し出した。

「ほう、これはまた珍しいルーンだな」

そう言うとコルベールは懐からメモ用の羊皮紙を取り出し、才人の左手の甲に浮かんだルーンのスケッチを始めた。

「ミス・ヴァリエール、これでお主も晴れて進級じゃな。儂はこれから予定があるのでな、お主等は自室に戻るが良いじゃろ」

そうオスマン翁が締めくくり面会は終了となった。

部屋に戻る途中、ルイズはずっと沈んだ面持ちだった。

「どうした、ルイズ？　進級出来たんだし良かったじゃねーか」

才人の問いかけにも応えず、ルイズは俯き加減で肩を落として歩いている。よく見ると悔しそうに唇を噛み、目にはうっすらと涙さえ浮かべている。

「なんだよ。嬉しくないのかよ」

才人の再三の問いに、彼女はやっと口を開く。

「嬉しくなんか無い」

「なんでだよ」

「だって……だって！　お兄の世界の人達は、あたしの事を何とかこっちに帰そうとして一生懸命してくれたのに……こっちの貴族達は、お兄の事なんか考えなくて、あたしにお兄を使い魔にしろって言ったり……」
「なんだよ、そんな事を気にしてんのか」
そう言って才人は笑い飛ばす。
「俺の場合、時間は掛かるだろうけど迎えが来るのは確実だしな。お前が気に病む事はねえよ」
そう言うと才人はルイズの頭に手を乗せて優しく撫でた。
「それに痛かったとは言え、お前のファーストキッス貰っちまったしな。その分の責任は取らねえとな」
その言葉に「はっ」としたルイズは、わなわなと肩を振るわせる。
「……ルイズ？」
その様子に嫌な予感がした才人は距離を取ろうとしたが手遅れだった。もの凄く良い笑みを浮かべながらルイズは彼の肩をガシっと掴んで振り向かせた。
「アレは無し。儀式だから回数には、数、え、な、い、の！」
そう言うとルイズは右アッパーを才人に叩き込みながら「お兄のバカぁ！」と叫んだのだ。
才人はこの日二回目の鉄拳制裁をルイズから喰らった。但し二回とも自身の失言による自業自得であったので同情の余地は皆無であろう。南無。

プレイアデス・オペレーション　（1）

筑波にある高次物理学研究所。そこでは昼夜を問わず地球人とテューリアンの共同チームにより別ブレーン宇宙への転位方法が精力的に研究されている。

チームは平賀教授がリーダーとして取り纏めているが、実質的には南武（みなたけ）准教授を中心に研究が進展していると言っても過言ではない。

南武の非凡な才能を見出だしたのは平賀教授である。南武が合衆国留学中の博士課程で発表した論文を偶々目にした平賀教授は「南武（コイツ）は高次（うち）研で貰う！」と言うが早いか、スカウトする為に即日で合衆国まで出掛けたのだ。その後、南武は合衆国で博士号を取得すると平賀の招きを受けて高次物理学研究所へと入ったのである。

南武を中心とする彼等はＰＳ転位に関しての理論面での裏付けを確固たる物にする事を現在の第一目標としていた。これを確実にしておかないと、いざ実験を行おうとした時に不測の事態が起きないとも限らない。それ故に机上での作業（実際はパーセプトロンを使い仮想現実内でシミュレーション等を行っているのだが）とは言え手を抜く訳には行かないのだ。勿論これ等の検証にはテューリアン科学者とヴィザーも参加している。地球人（テラン）とテューリアン、そして人工知性によるチームは驚異的な働きを見せ、半年以内には最初の実験装置の開発に取り掛かれるであろうと見込まれている。

筑波チームが着々と研究を進めている間、ルイズは晴れて滅菌室から出られる事になった。彼女の細菌やウイルスに対する耐性について結論がやっと出揃って薬品の準備が整ったからだ。

それら薬品類は結局、小児に対して普通に行われている予防接種の物と何ら変わりが無かった。これは彼女が生活していた環境の微生物類が地球のそれと大差無い事を意味している。しかしこれはこれで別ブレーンの宇宙ではあるが「環境の違う他惑星での並行進化」

と言う新たな命題を生物学者達に投げ掛けたのだった。
さて、予防接種の注射に泣きべそをかきながらも病室から解放されたルイズは平賀母子と一緒に国立生物医科学・生物工学研究所のゲストルームで暫く生活する事になった。
彼女が故郷へ帰還するには最低でも六年から七年は掛かると思われる現状では、いつまでも研究所に閉じこめておく訳にもいかない。そこで平賀教授の提案（ごり押しとも言う）により帰還準備が整うまで彼女は平賀家で生活する事になっている。
今回、彼等を留め置く理由だが、ルイズの予防接種後の経過観察、及び彼女をいきなり平賀家に連れて行くよりも研究所に居るうちに地球と言うか日本の常識を教えておけば、研究所を出てからの生活もスムーズに行くだろうとの配慮からだ。
彼等の滞在するゲストルームはキッチン等の設備や家具類一式も備わっており、どちらかと言えば長期滞在する外部研究者用の宿泊施設としての意味合いが強いものである。
こちらに迷い込んで以来、ルイズは平賀家のダイニングと病室以外の部屋を見た事が無かった。貴族の娘として豪華な家具調度品に囲まれた生活を送っていた彼女にとって無駄な装飾を排して、機能性を重視したデザインの室内は質素且つ殺風景で奇妙に見えた。しかしこの生活空間には彼女にとって初めて経験する事ばかりである事に直ぐに気付かされるのだ。
ルイズが今居るのは地球と呼ばれる場所の日本と言う国。地球では科学技術と言うものが発達していて、身の回りにある様々な物がそれで作られたり動いたりしている、と言う事をルイズは才人と彼の母親から教えて貰っていた。
夜に点く灯りや、人や風景をまるでそこに在るかの様に映し出すスクリーンと呼ばれる不思議な窓は電気とかオプト・エレクトロニクスとかで動いたり作られたりしているらしい。この様な説明は才人に聞くよりも、彼の母親に聞いた方が分かり易かったので結果的にルイズの才人に対する評価はダダ下がりとなっていく。そして彼

女の中で才人は最終的に“優しいけどヌケてるお兄ちゃん”と言う実に微妙な位置付けが成されて行くのだった。

閑話休題(それはさておき)。

目についた調度品で、まずルイズが驚いたのは調理台、所謂システム・キッチンだった。才人の母親は料理上手である。才人がルイズと病室に押し込まれている間は流石に面倒だったのか研究所の食堂で食べていたのだが、才人が戻ってからは職員に頼んで食材を届けて貰い、才人の、と言うよりはルイズの為に腕を奮っていた。

そんな彼女の料理をする様子を見てルイズは驚いた。火が使われていないのだ。それなのに水を張った鍋は沸き立ち、フライパンは食材を入れるとジュウジュウと音を発てる。ルイズは内緒で屋敷の厨房を覗き見た時に、竈(かまど)の炎と格闘する御抱え料理人の姿をがあった事を思い出す。科学技術って凄いな。これも電気の力なのかな？

とルイズは思ったが、良く分からないので調理を続ける才人の母親に尋ねた。

「おばさま、火が無いのにどうしてお料理ができるの？」

それを受けて、平賀夫人は“さてどうしたものかしらねぇ”と考えた。誘導加熱やマイクロ波加熱は二十世紀からある枯れた技術だし、今の時代に生まれ育った子供なら詳細については無理だとしても説明を受ければ、なんとなく理解出来る類いの事なのだ。

しかしルイズは文化や習慣が全く違うであろう別な世界から迷い込んだ子供である。彼女が居た世界の文化文明についての詳細は不明だが、彼女からの聞き取りや彼女が身に着けていたドレスの縫製や生地の織り、靴の作り等から地球の十七世紀から十八世紀頃に相当するのではないかと推測されていた。

一通りの調理を終え、あとはゆっくり煮込めば良いだけになっていのので、平賀夫人はしゃがみ込んで目線をルイズに合わせて、逆にルイズに質問する。

「ルイズちゃん、どうしてか知りたい？」
微笑みながら問いかける平賀夫人の顔をルイズはじっと見つめると「はい」と言って大きく肯(うなず)いた。
「そっか。でもルイズちゃんは、こっちのお勉強してないから教えてあげても分からないと思うのよね」
平賀夫人が態(わざ)と意地の悪い事を言うと、その言葉にルイズは肩を落としてしょんぼりと下を向く。そんなルイズを微笑ましく思いながら“学習意欲はあるみたいだし、これなら上手く行きそうね”と考えた平賀夫人は優しく彼女に提案する。
「ルイズちゃん。小母(おば)ちゃんがこっちのお勉強を教えてあげよっか？」
それを聞いたルイズは表情を明るくして「おばさま、ありがとう！」と元気良く返事をするのだった。

＊　＊　＊

ルイズが新しい環境に移ると同時に筑波と東京の合同チームが動き始めていた。彼等は才人達が滞在しているゲストルームの上階と下階にある部屋と言う部屋に考えられ得る限りの測定器・観測装置を持ち込んだのだ。
それによって一時的にではあるが、別な建物に追い出された研究者達から抗議の声が上がったが宝条所長がそれを黙殺したのは言うまでも無い。
ルイズに対しての観察・分析は二十四時間体制で行われる。但し音声や映像についてはプライバシーに配慮して平賀夫人の了承が無い限りモニターされる事は無い。彼等が滞在するゲストルームのそこかしこには目立たない様に改良型の非接触ＢＩＡＭセンサーを始めとした各種センサーが設置され、階下階上の部屋には電磁場や重力場の様な古典的な場の検出機は言うに及ばず、高次放射検出機に高次空間／通常空間歪曲率分析装置、果ては共通余剰空間次元軸振

動モード共鳴検知装置（通称：ＣＳ２ＤＡＶ）と言うＰＳ転移の監視に使われている大層な名前の物まで持ち込まれ各部屋を所狭しと占拠しているのだ。

これ等は地球の通信網（アースネット）経由でオムニヴァース・ネットワークに接続され、ヴィザーが統括的に監視、管理を行う。そして集められて処理されたデーターの分析、解釈は地球人とテューリアンの混成チームが行う事になっている。

この混成チームに参加するテューリアン研究者のうち何名かは、パーセプトロンを使えば事足りるのにわざわざ定期便で地球にやって来ている。それだけ彼等も関心を抱いていると言う事の現れでもある。

因みにこれ等の機器の搬入は大規模な物にならざるを得ず、一般に「画期的な生化学システムについてのテューリアンとの共同研究」の為と苦しい言い訳が発表されている。

＊　＊　＊

「どう、ルイズちゃん。分かる？」

ルイズに勉強を教えるついでに才人の進み具合を観ていた平賀夫人が声を掛ける。いや、本来は才人に勉強を教えるついでにルイズだろうとは思うのだが細かいところは気にしないでおこう。

平賀夫人の言葉にルイズは悲しそうに首を横に振る。ちなみに今ルイズが教えて貰っているの算数の足し算と引き算である。勿論ルイズにはアラビア数字を教えてあるし、彼女はそれを理解していて数えたり数を書く事も出来る。

しかし何故か足し算と引き算のやり方教えても微妙に齟齬（そご）が生じるらしく、上手く理解してくれないのだ。これには平賀夫人も苦笑するしかなかったが、ふと何かを思い付いてわざとらしく話を才人に振る。

「あら、困ったわね……。そうだ、才人。あんたルイズちゃんに教

えてみなさいよ。誰かに教えるって言うのは、ちゃんと分かっているかどうか確かめる事にもなるんだし」
「かあちゃん……いくら俺の成績が悪いからってさぁ、足し算と引き算くらいはできるよ？」
「あら、だったら尚更、あんたがルイズちゃんに教えても問題は無しよね？」
「ええっ？　なんでそうなるんだよ！」
母の作戦勝ちらしい。僅かな抵抗の機会もなく才人はルイズに算数を教える事になってしまった。ここで平賀夫人が才人に話を振ったのは、彼女なりの思惑（おもわく）があったからである。ひょっとしたら才人とルイズの間に起こった“例の現象”が再現出来る可能性があると考えたからだ。ルイズと接する機会の多い、いや四六時中彼女と接している唯一の大人である彼女は、ルイズが憶える事柄について或る傾向が有るのに気付いていた。専業主婦になり現役から引いたとは言え、やはり彼女も科学者である。
平賀夫人は「おやつの用意してくるね」と言い残し子供部屋から出て居間へと向かうと、ここを常時モニターをしている人工知性体に呼びかける。
「ヴィザー。ひょっとしたらルイズちゃんと才人に起こったアレが再現されるかも知れないからモニター室の人達への連絡お願いね」
「承知してますよ。ミズ・ヒラガ。待機している全員に既に伝えてあります」
そう応えるヴィザーはどこか楽しげであった。
「流石ねぇ。今からあの子達のおやつを用意しなきゃならないから、後で結果だけでも教えてね」
平賀夫人は母親の顔に戻ってそう言うとキッチンへと向かった。
平賀夫人が子供部屋へ戻ったのは、才人がルイズに繰り下がりのある引き算を教え終わったタイミングだった。才人は彼の母親がおやつのプリンと清涼飲料水を持って部屋に入って来ると、彼女に対

して何とも不思議そうな顔で問いかける。
「かあちゃん、ちゃんとルイズに教えてた？」
「あんたに教えた時より丁寧に教えてたわよ。どうかしたの？」
首を傾げながら才人の母親は質問を返すと、才人は更に不思議そうな顔をする。そんな才人に彼女は「なによ。どうしたの？」と更なる問いかけをすると才人に代わってルイズが嬉しそうに答える。
「おばさま、あたしね、お兄ちゃんに教えてもらったら分かるようになったの」
「あらルイズちゃん凄いわね。才人、あんた結構やるじゃない」
「いやそれがさ、ルイズってば一発でやり方を憶えちまったんだよ」
母親の冷やかしに才人は戸惑いを隠さずに何か納得が行かない表情で応えた。それに何か有ると感じた才人の母親は「何が有ったの？」ともう一度問いかける。
「普通はさ、何回か練習しないと憶えないじゃん。それがルイズはさ……」
才人がそこで言葉を区切り母親が持って来た飲み物で口を湿らす。二人のやり取りを黙って見ていたルイズは、才人が飲み物に口を付けたの見て「食べていいの？」と訴えるような目をしながら才人の母親を見る。
それに気付いた平賀夫人は微笑みながら「召し上がれ」と言うと、ルイズはにこにこしながら行儀良く「いただきます」と言ってプリンを食べ始めた。そんなルイズの様子を横目で見ながら才人は言葉を続ける。
「俺が教えようとして頭の中で考えてから話し始めるたらさ、いきなり、わかった！　とか言って問題を解いちゃったんだよ。引き算も、繰り上がりも繰り下がりも同じ感じ」
それを聞いて才人の母親は“例の現象”が起こった事を確信し、彼に提案した。
「才人。あんたルイズちゃんに掛け算と割り算も教えてみない？」
「えー？　大丈夫かな……」

母親と不安気に話す才人を余所にルイズは美味しそうにプリンを食べていた。彼女は自分の分を既に平らげており今は二つ目に取り掛かっている。勿論それは才人の分なのだが。
この後プリンが原因で才人とルイズの間に一悶着あったのだが兄妹喧嘩みたいな低レベルの言い合いなので割愛しよう。結果は勿論、才人の負けである。この女児、彼に対して全く容赦無しである。

＊　＊　＊

「事前に知らされていても、実際に目の当たりにすると驚くしかないな……」
モニター室に詰めていた科学者の一人が息を飲み、そして呟く。彼等は常識では理解出来ない現象を目の当たりにしていたのだ。
最初の変化は予想通り、ルイズの脳内にある松果体様器官から始まった。その様子はＢＩＡＭによって詳細にモニターされている。
そして今回は様々な計測装置類でデーターを記録しているのだ。その中の一つに今までに知られていないピーク・パターンが現れ、ヴィザーは自己の判断で各機器のサンプリング周期と感度を限界値まで上げると、現在このチームの指揮を執っている人物に報告をする。
「イルムシャー先生。不明なパターンがＣＳ２ＤＡＶに現れました。詳細を得る為にサンプリング周期と感度を限界値まで設定。他の計測器についても同様に設定しました」
「ああ、ヴィザー。有り難う」
短く刈り込んだ白髪にきちんと手入れされた顎髭の人物、呆然としていたヴィルヘルム・イルムシャー博士はヴィザーの呼び掛けに混乱から脱け出した。彼は欧州からの出向組である。今回のルイズの件について、地球側は日本がプロジェクトを主導しているが、ルイズの事を“彼女が帰還するまで一般から秘匿する”のを条件に世界中からの科学者や技術者の派遣を受け入れている。イルムシャー

もその一人であり欧州に於ける脳科学の第一人者として送り込まれて来ていた。その彼をして呆然とさせる『現象』が目の前で起こっている。
「一応は資料や映像を見て予習して来たつもりなんだがね。いやはや、実際に目の当たりにしてもまだ信じられない。エィドレフ、貴方はどうかね？」
　イルムシャーが彼の横に座る一人のテューリアンに問い掛けると、彼は地球人の頷きを真似て「私もです」と同意を表す。エィドレフは物理学の面でイルムシャーをサポートする事を担っている、このチームのサブ・リーダー的な立場に居る。現実空間での地球人とテューリアン間の同時通訳は、片耳に着けたイヤーセットを介してヴィザーが行っているので意思の疎通に困る事は無い。
「私らも知り得なかった事象ですよ。ヴィザーが視覚化してくれた一次データーを見ると水面下で何かが移動して水面に波が起っている、そんな感じにも見えますね。データーの詳細な解析が楽しみですよ。それにしても……」
　彼はそこで言葉を切りテューリアン独特な困惑の表情を見せながら続ける。
「共通余剰空間の四つの次元軸で超立方振動を起こすなんて、それなりのエネルギーが投入されているはずなんですが、それが何処から来ているのか皆目見当も付きませんね」
　それを聞きイルムシャーは渋い顔をする。
「それが調査対象達の間に起きている記憶の転写と思われる事に、どう言った関連性があるかだね。現象面での相関が有るのだから何らかのメカニズムで成されてはいるのだろうが……」
「イルムシャー先生、研究はまだ始まったばかりですよ。まったく地球人はせっかちですね」
　考え込み始めたイルムシャーにエィドレフが笑いながら言うと、彼は照れ隠しに咳払いを一つして誤魔化すし、独り言の様に呟いた。
「真実とは、経験という試練に耐える物のことである、か……」

「含蓄のある言葉ですね。先生ご自身の？」
エィドレフの問いにイルムシャーは微笑みながら答える。
「私の座右の銘でね。二十世紀に活躍した私ら地球人の物理学者、アルベルト・アインシュタインの言葉だよ。しかしまぁ、今ここで起きている事は差詰め、我々の経験は、真実と言う試練に耐え得る物なのか？　だねぇ……」
イルムシャーの言葉を聞いた他の地球人研究者達は黙って頷いたが、エィドレフは不思議そうに彼に尋ねたのだ。
「おや？　先生は地球人にしては珍しく弱気な方ですね」
「いや、あまりにも常識から懸け離れた現象に思考停止直前なだけだよ。そのうち現実として受け止められれば、自然と好奇心の方が勝って来るもんだ」
そう言ってイルムシャーは乾いた唇を潤す様に舌なめずりをした。この時、彼の眼を見る者が居たならば獲物を狙う餓えた野獣のそれと同じだと感じただろう。それ程までに彼は、この未知なる現象に対して貪欲になっていたのである。

＊　＊　＊

それからのルイズは真綿が水を吸うような勢いで知識を吸収して行った。途中に何回かルイズの知能指数テストが行われたのだが、その値は同年代と思われる女児を少し上回る程度で、結果として異常とは言えない物だった。
この驚異的な学習速度と理解力は才人の脳からの転写によるものだろうと、各種計測データーとの相関から仮定されている。しかし開始から一ヶ月、イルムシャー達のチームは未だ深い霧の中を手探りで歩く状態が続いていた。
手掛かりになりそうなのが共通余剰空間での超立方振動なのだが、これを引き起こしているエネルギー的な要因が不明なままなのだ。このエネルギーが何処から来るのかに目を瞑れば、引き起こされて

いる超立方振動が才人とルイズの脳内変化に合わせて振動モードを変化させると言う明確な相関関係を示しており、何(いず)れこれが突破口になるだろうと考えられていた。しかし現状では、才人とルイズの間に在るであろう『繋がり』を説明する為には何もかもが決定的に足りないのだ。

また、才人からルイズへ記憶転写が行われる時の知識の傾向として、特に数理物理的な事に限定される訳では無く、ルイズ自身が概念として理解し難いと感じたものであるらしい事が判明してきた。

無意識にせよ何にせよ、そこにはルイズの意思が介在している事になる。意思や意識と言うものは極端な話し、脳内の神経細胞により形成されたネットワークが織り成す電気化学反応によるもので、そのエネルギーはとても小さく、共通余剰空間で超立方振動を起こす事など不可能なのだ。

「と、まあ行き詰まってましてね」

所長室に呼び出されたイルムシャーは宝条にこれまでの経緯を説明していた。それを受けて宝条は米神(こめかみ)に人差し指を当て、イルムシャーの隣に居る巨人に問いかける。

「エィドレフ君の物理学チームも、かね？」

「ええ、全く五里霧中の状態です。ＢＩＡＭとＣＳ２ＤＡＶのデータ以外に相関が見られる物が全くありません。それに超立方振動のエネルギー源も不明なままです。筑波チームと共同で一応の仮説は立てているのですが、対象がコンパクト化された次元軸なので観測が不可能なんです」

エィドレフに宝条が「観測が不可能とは？」と問いただす。

「ああ、失礼しました。共通余剰次元は一三次元で表現出来るのですが、そのうちの四つはコンパクト化、喩(たと)えて言うなら地球人が使うプランク長でしたか？　それ以下に折り畳まれているのです。それを観測しようにもブレーン宇宙共通の“最小の時間単位”以下の領域なので、どんなに頑張っても認識そのものが不可能なのですよ」

エィドレフの説明に宝条が「古典的な量子力学にある不確定性って奴かな？」と問い直すと「多少違いますが、概ねそう言う理解でよろしいかと思います」と答えが返って来た。
「その仮説が正しいとしても、調査対象の間に起こっている事の解明には程遠いのだがね。出来れば対象の脳に直接インターフェースが出来れば何か掴めると思うのだが」
イルムシャーがそう言うと再び宝条は米神に人差し指を当てて暫く考え込むと徐に口を開いた。
「手詰まりねぇ。まあ、このプロジェクトの目的そのものがルイズ嬢の安全を保障した上で無事に帰還させる事であり、今回ここでやってるのはオマケみたいな物だしね。これ以上どうしようも無いのなら後はシミュレーションで何とかするべきかな。十分なデータも取れた事だし」
その言葉にイルムシャーが不満を顕にして宝条に噛み付いた。
「そんな！　世紀の大発見になりそうな、こんなにも貴重なサンプルを私から取り上げると言うのかね？　何故に君達は“あれ”に肩入れしてる？　“あれ”は別な宇宙からの闖入者で国籍も何も無いし、況しては我々と同じ人類ですら無いんだろ？　それに一般には秘密にされてる。ならばＢＩＡＭとかＣＳ２ＤＡＶを使ったまどろっこしい事なんか止めて、脳内に直接センサーを埋め込んだり、あの松果体様器官の組織標本を採取したって……ひっ！」
そこまで言ってイルムシャーは息を飲んだ。いや正しくは恐怖を感じたのだ。自らのエゴを剥き出しにして息巻く彼を見て、目の前に居る宝条は黙ったままだが明らかに怒気を放っている。隣に居るエィドレフはテューリアンが滅多に現さない目を大きく見開く怒りの表情を見せていた。
「ヴィルヘルム・イルムシャー博士。それが貴方の本音、いや貴方を派遣した欧州科学機構の意向ですかな？」
宝条は静かに、しかし怒りを込めてイルムシャーに質問した。気圧されたイルムシャーは狼狽えながら「宝条所長、わ、私は純粋に

研究者として……」と弁明を始めたが、彼を無視する様に宝条は虚空に向かって声を掛けた。
「ヴィザー、今の会話記録は私の承認無しでは消去不可としてくれ。それと欧州科学機構のハマーショルド理事長の呼び出しを」
「了解しました。しかしハマーショルド理事長の住むストックホルムは夜中ですが宜しいのですか？」
　時差を考慮したヴィザーの言葉に宝条は吐き捨てる様に言う。
「こんな不心得者を寄越したんだ。叩き起こしてもバチは当たんだろう。最初に言うべきだったがイルムシャー博士、貴方は私の権限により本日を以て解任とした。それに伴い研究所からは強制退去となる。話しはこれで終り。退室してさっさと荷物を纏めたまえ」
「不心得者だと？　私を侮辱するつもりか！　き、規約違反を起こした訳でも無いのに、こんな横暴な処分、わ、私は認めんぞ！」
　顔を真っ赤にして熱(いき)り立つイルムシャーに対して、宝条はうんざりとした表情で冷ややかに告げる。
「ふん。その件ならば全く問題無い。ヴィザー、この不心得者が外部と遣り取りをしていた通信記録の表示と通信内容の再生準備をしてくれ」
　その言葉にイルムシャーの顔からは忽(たちまち)ち血の気が引いて行く。そして、まるで信じられない物を見るような目をして宝条に顔を向けている。
「そうそう。貴方が連絡を取っていた相手、確か貴方の本国では有名な記者だかフリーのライターだったかな。先だって彼の身の安全を守る為にＵＮＩＡ（国連情報局）が身柄を確保したらしい」
　宝条はイルムシャーを一瞥すると背を向け窓の外に視線を移すと止(とど)めの一言を放った。
「それと、もう一つの解任理由を言っておこう。なんでも“禁止薬物を使った人体実験紛(まが)いを繰り返していた”とかで貴方の本国で貴方に対しての逮捕状が出たと、今朝方こちらの警察から連絡が入ってね。そろそろお迎えが来るんじゃないかな？」

それを聞いたイルムシャーは目を剥くと糸が切れた操り人形の様に崩れ落ちる。それを無視して窓の外を見下ろす宝条の瞳には、赤色灯を光らせながら研究所の構内に入って来る警察車両が映っていた。

プレイアデス・オペレーション　（2）

ルイズが地球に迷い込んでから半年が過ぎた。彼女は東京にある平賀家で普通に暮らしている。平賀家では彼女について聞かれると「両親が他恒星系の要調査惑星に赴く事になり、知人である自分達が預かっている」と説明していた。

その前にルイズの髪色に関係して一悶着あったのだが、それによってルイズの口から魔法について語られる事となったのだから結果オーライという処だろうか。

地球人の髪色は基本的には黒髪・栗毛・金髪・赤毛に分類されているが、これは髪の毛内での黒～茶褐色の真性メラニンと赤褐色～黄色の亜メラニンの量によって決定される。

ところが、ルイズの髪の毛からは赤の色素しか検出されなかった。それも紅花から抽出される赤色に非常に酷似していたのだ。調べるとそれを発現させる遺伝子はすぐに見つかったが地球人類には有り得ない物だった。

その赤の色素による“ピンクがかった髪色”が問題となる。これが十代半ばくらいであれば「ファッションで染めている」で誤魔化す事も出来ただろうが、六～七歳の子が染めているのは余りにも不自然に思える。

そこで平賀夫人はルイズの髪をその鳶色の瞳に合わせ、ブラウンに染めようとしたのだがルイズからの猛烈な抵抗に遇う。

憧れであるすぐ上の優しい姉が持つそれと同じ色をした自分の髪色は、ルイズにとっては誇るべき物だ。そして今となっては自分と故郷を繋ぐ唯一の証でもあった。杖は地球に迷い込んだその日に、いつの間にか取り上げられてしまい手元に無い。そしてルイズは幼いながらも故郷に二度と帰れないかも知れないと思っていた。

頑（かたく）なに拒むルイズの様子に何かを感じた平賀夫人は、説得するよりも理由を聞いてみようと目線をルイズの高さに落とし彼女に優し

く語りかける。
「ねえ、ルイズちゃん。どうして髪を染めるのが嫌なの？」
うつ向き加減のルイズの顔はよく見ると唇を噛み眉尻が下がり目にはうっすらと涙が溜まっており、今にも泣き出しそうな顔をしている。
「帰れないから……」
ルイズは小さく呟き、それこそ今にも涙腺が決壊しそうな表情で平賀夫人を見る。
「もう帰れないから！　だから母（かあ）さまと、ちい姉（ねえ）さまと同じ髪でいたいの！」
平賀夫人は苦笑しながら「ホント肝心の事を教えてないとか困った人ね」と、どこかヌケている夫の顔を思い出し、そしてルイズを優しく抱き締め、あやす様に背中を叩く。
「ルイズちゃん、大丈夫よ。今すぐは無理だけど、必ずルイズちゃんをご家族の所に帰してあげるから」
抱き締められて平賀夫人の胸に顔を埋めながらルイズは「ほんと？」と問い返す。平賀夫人に抱き締められると“まるで、ちい姉さまに抱かれれるみたい”に何故か落ち着くのをルイズは不思議に思う。
「本当よ。その為に家のお父さん達が色々調べたり実験したり頑張っているの。だからね、ルイズちゃんは帰れないなんて思わなくていいの」
「おじさま達が魔法を使って帰してくれるの？」
ルイズは自分が来た時の事を思い出し無意識に“魔法”と言ってしまったが、平賀夫人は「そうね。魔法が使えれば、すぐにでもルイズちゃんをご両親の所へ送れるかもしれないわね」と気にするでもなく応える。
「そうなの？」
そう言って期待を込めて見上げるルイズの目には少し迷いが見える。そんな彼女を微笑みながら平賀夫人は見つめ返し頭を撫でた。

「でも、そんな便利な魔法なんて小母ちゃん達は知らないの。だからお父さん達に頑張って貰うしかないのよね」
平賀夫人はルイズは元の世界に居る家族との繋がりを失いたく無いという気持ちに気が付いた。ならば彼女がこちらに来た時に身に付けていた物を持たせれば、と思い至る。
「そう言えばルイズちゃんが持ってた指揮棒（タクト）みたいなの、返してもらってなかったわね。小母ちゃんが取り返して来てあげようか」
平賀夫人の言葉にルイズは少し悲しそうな顔をして首を横に振る。
「いいの。どうせ、わたし魔法が使えないから“杖”はもう要らない」
何気なく言ったルイズの言葉に平賀夫人は違和感を感じて眉根を寄せた。今この子が言った事は解釈を変えると、魔法を使うにはあのタクトみたいな物が必要って事じゃないかしら。まさかと思うけど彼女が居た世界では、あのタクトで魔法を使っている？　そんなお伽話みたいな……。でも彼女が家に出現した時の様子や観測データー、才人からの記憶転写について何も合理的な説明が出来ていないし、これは何かあるかも。そう思い至った平賀夫人はルイズに質問する事にした。
「ねえルイズちゃん、あなたの居た所では魔法を使う人が居たの？
もしかしたらその事が、あなたを帰すのに凄く大事な事になると小母ちゃんは思うな。だからこっちに来る前に“あちら”で何が起こったのか教えて欲しいの。ルイズちゃん、何をしたら家に来ちゃったのかな？」
「……あのね、おばさま。わたし、魔法の練習してたの」
平賀夫人に促されてルイズが語った内容は、地球人とテューリアンを驚愕させるのに十分だった。

＊　＊　＊

「どうにも参ったな」

平賀教授が溜息混じりに呟くいた。彼の手元にはヴィザー経由で妻から届いた私信のプリントアウトがある。内容が内容だけにそれは一枚しか出力されていない。また、ヴィザーには送信者と受信者以外の閲覧不可を命じられた。筑波の研究所にある平賀教授の研究室、そこに南武（みなたけ）とエィドレフ、そしてわざわざ東京から足を運んで来ていた宝条が在室していた。

「俄（にわか）には信じられませんね」

先程プリントアウトを読み終えた南武が目頭を摘（つま）むように押さえながら困惑気味に話す。

「我々の理論と技術では再現不可能なＰＳ転位ブリッジをルイズ嬢自身が魔法で作り出したなんて与太話にも程がありますよ」

それを受けてテューリアンのエィドレフが東京で起きた事を再確認する様に話し始める。

「確かに信じ難い話ですが、ルイズ嬢と平賀教授の息子さんに起きた記憶の転写現象では共通余剰空間での超立方振動が起きています。しかも観測されたデーターから高次空間と通常空間に一切のエネルギー反応が無い事が確認されていますしね。あれだけの超立方振動を起こすには少なくとも地球の月一個分の質量を変換したエネルギーを必要とする事も算出されていますし、例え荒唐無稽な事に思えても、それが現実に起こっていると認めるしか無いでしょう」

暫し沈黙が支配する重苦しい室内の空気を、宝条がいつもの軽い調子で打ち払った。

「魔法ねぇ……。この歳になって、まさかお伽噺の世界に足を突っ込むとは思いもしなかったよ。しかも大昔にジェヴレン人達が我々に使った似非（えせ）奇跡と違って本物って事かね」

平賀夫人が送って来た内容、それはルイズがこちらに転位する切っ掛けについてだった。そこにはルイズから彼女が聞き取った内容と、何故ルイズがそれを話さなかったが書かれていた。それを読んでいた宝条は苦笑しながら言う。

「それにしても魔法の事を話したら、また怖い検査を受けさせらる

のが嫌だったとは。彼女にトラウマを作ってしまった医科工研は反省しないといけないな」
　それまで黙っていた平賀が目の前のコーヒーを一口飲むと全員を見渡してから話し始める。
「さて、ルイズ嬢が現れてから我々の目の前で信じられない様な事が立て続けに起こっている訳だが、解決のヒントになりそうな事が家内からの報告に書いてある。家内がルイズ嬢に物を浮かす魔法を唱えて貰ったのだが、それはルイズ嬢曰く“成功すると対象物は浮き上がり、失敗すると何も起こらないか爆発する”と言う代物らしい。まあ、実際には何も起こらなかったみたいだがな。何回か唱えた後、ルイズ嬢は、まるで全力で駆け足をした様に疲れてぐったりしてしまった、とある。ルイズ嬢はそれを心の力が無くなったから、と説明している。これが意味するのは何なのだろう？」
　南武が力無く「心の力……。精神力とか根性とか思い浮かんで来ますね」と応える。
「彼女にとって魔法を唱えると言う事は体力を消費する行為って事なのかねぇ。脳で激しくエネルギーを消費するってだけじゃ説明し難いね。それにしても君の奥方は無茶をするね。ルイズ嬢の言う通り、失敗して爆発していたら今頃は大騒ぎだな」
　宝条が簡単な見解を述べ終えたところでエィドレフが口を開いた。
「心の力、ですか。神経細胞の相互作用で生み出される我々の思考や精神と言った実体の無い物がエネルギー源になり得るのでしょうか？」
　彼等の言を聞き、平賀が「与太話と思って聞いてくれ」と前置きして話し始める。
「ルイズ嬢の言う心の力とは比喩的表現では無いと考えた方がスッキリするんじゃないかね。オカルトめいた事だが人間、いや生き物の心とか精神とか言われる物は、実は観測が出来ないだけで物理的な実体が存在し、それらは互いに相互作用する物だと考えるとルイズ嬢と家のバカ息子の間に起こった事に説明が付けられる。そして

彼女の転位した現象だって、あちらの宇宙では、それが物質どころか時空構造にまで作用を及ぼすと思えば納得も出来る」
「教授！」
南武は立ち上がり平賀を怒りを込めて目で睨み付ける。そんな彼に平賀は宥(なだ)める様に言葉をかけた。
「まぁ落ち着け。仮説ですらない与太話だと言っただろう。だがな、お前もルイズ嬢が転位した時のデーター解析をやって分かっているだろう？　俺はあれを直接この目で見ている。正直、あれは俺達が知っている通常の物理現象では無い何かって事だ。この際、呼び方なんてものは魔法だろうが何だろうが関係無い。俺達は兎に角データーを集め、解析して仮説を立てて実験をして立証するだけだ。その結果として俺達の常識が壊れても、それは新しい発見なんだし喜ばしい事じゃないか」
そこまで言うと、彼は椅子の背もたれに寄りかかり天井を見上げながら「それにはルイズ嬢の協力が必要不可欠なんだよな」と誰に言うとも無しに言葉を吐いた。
「平賀先生、少し疑問があるのですが」
未だ天井を仰ぐ平賀にエィドレフは疑問に思っていた事を尋ねる。
「その魔法と言う現象を解明しようとする理由を教えて頂けませんか？　ＰＳ転移の研究だけでも手一杯の今、更に研究対象を増やす事はルイズ嬢の帰還を先延ばしにしてしまうと思うのですが」
平賀はふぅっと息を吐くと「勘だよ」と短く言う。
「勘、ですか？」
南武が怪訝な表情で問うと、平賀は上体を元に戻して姿勢を正した。
「ああ、憶測で話すのは学者としては褒められたもんじゃないが、勘だ。もし本当にルイズ嬢の魔法とやらが実在し、その発動を俺達が手助け出来るとしたら、彼女がこちらに転移した時と同様な現象を起こせかも知れないと考えられないか？　それに必要なエネルギーだが、仮に記憶転写で見積もられた月一個分の質量に相当するの

ならｈ－グリッドから供給して貰う事も可能だ。専用エネルギープラントの完成を待つ事無く、彼女を親元に帰す事が出来るかも知れない……ん？　どうした南武。何か言いたそうだな」
南武の胡乱（うろん）な視線に気付いた平賀は話を彼に振った。
「確かに実現出来ればエネルギーの問題は片付きます。しかし時空位置特定が問題として残りますよ。それに解析では、あのパターンは相当に不安定で、正直なところ再現性があるのかも疑わしいと考えてます」
南武がの指摘に平賀は「そんな事は十分承知してる」と応える。
「まずはルイズ嬢の言う魔法ってヤツを調べてからじゃないと何とも言えない。暫くは今まで通りのＰＳ転移研究とルイズ嬢の言う魔法とやらの調査、これの二本立てで行く。特に魔法の件は南武とエィドレフ君、あと数名の限られた人員でやって貰えないか？　今は表沙汰にしたく無いからな。残りの人選は君らに任せる」
「分かりました。ですがＰＳ転移を優先で宜しいですね？」
そう南武が釘を刺すと平賀は、ああ、と頷いて応える。
「それで構わんよ。家内の話から、魔法とやらを使うとルイズ嬢の消耗が激しいみたいだからな。月に二回か週に一回か、その程度しか付き合わせられないだろう。ああ、それと宝条、お前に頼みたい事があるんだ」
「おいおい。この状況で医学生物学チームに出来る事なんてあるのかい？」
苦笑混じりに言う宝条に平賀は真面目な表情を保ったまま告げる。
「ルイズ嬢のバイタルとメンタルのケアを頼みたい。家内の話だと、あの子は素直で真面目なせいか思い詰める事が時々あるらしくてな。受けるストレスを極力少なくしてやりたいんだよ」
宝条は米神に人差し指を当てた。考えながら話そうとする時にする彼の癖だ。
「バイタルの方は専門だから良いとして、メンタルは専門外だからな……。ちょっと知り合いに打診してみるけど、直接接するのは君

の奥方にお願いした方が問題は少ないんじゃないかな？　ルイズ嬢も彼女に懐いているみたいだし、専門家から奥方にレクチャーして貰えれば下手なカウンセラーに任せるより良いと思うのだが」

「決まりだな、それで行こう。では皆それぞれで詳細を詰めておいてくれ。俺は今から家に戻って家内とルイズ嬢を説得して来る」

そう言う平賀の表情は何故か嬉しそうだった。

プレイアデス・オペレーション　（3）

眩しい残暑の日射しの中、閑静な住宅地の歩道を水色のワンピースに大きな白い帽子の少女が駈けて行く。少女は腰まで伸びたブラウンの髪を靡(なび)かせながら振り返ると後ろから付いて来る少年に向かって叫んだ。

「お兄ちゃん、早くはやくー！」

目立たない様に髪を染めたルイズだ。

「ルイズ！　そんなに急いで転んで膝痛くしても知らないぞ」

「いいもん！　そしたら、お兄ちゃんにおんぶしてもらう！」

そう言って屈託無くころころと笑いながら走りだしたルイズに「おい待てよ！」と声を掛けながら、まったく変わりすぎだよ、と内心苦笑しながらも才人は彼女の後を追う。

蝉の鳴き声が響く住宅街に賑やかな笑い声を振り撒きながら、まるで兄妹のような二人の子供は地下鉄の駅へと消えて行った。

ルイズが週に一回のペースで筑波に通う様になってから二ヶ月近くが過ぎていた。才人の母親から「必ず故郷に帰してあげる」と聞いてから、ルイズは自然と笑顔が出る様になっきた。自身を抑圧していた物が無くなった為なのだろうか、それまでの不自然な固さが無くなり、ルイズ本来のものであろう子供らしい振舞いが徐々に表に出る様になっている。因みに「返そうか？」と言われたルイズの“杖”は、実験で使用する以外は筑波の研究所で厳重に保管される事になっていた。ルイズ自身が「無くしたら大変だから」と研究所で預かっていて欲しいとお願いしたからだ。

「ねえ、お兄ちゃん。あっちに着いたらアイス買って。いいでしょ？」

地下鉄車両の中、ルイズは隣に座っている才人におねだりをする。地下の真っ暗な中を走る地下鉄に初めて乗らされた時、思わず泣き出しそうだった彼女も今では慣れたものだ。

「ダメ。お前、かき氷とアイス食べ過ぎてお腹こわしたばかりじゃん」
才人にダメ出しをされて、むぅっと頬を膨らませるルイズ。そんなルイズに才人はいつもの切札を出す。
「着いたらすぐにお昼だし……。そうだな、蝦蟇(がま)屋の牛丼、食べなくてもイイなら買ってやるぞ？」
それを聞いたルイズは目を大きく見開き、即座に“とんでもない”と言う風に、ふるふると首を小刻みに横に振る。彼女にとっては、そこで食事が出来なければ研究所に行く意味が無い。
所謂お食事処である蝦蟇屋。それは実験初日の昼時に「お前は犬か！」と才人に突っ込まれつつ、文字通りルイズが鼻で探し出した日本全国何処にでもある様な定食屋である。
研究所の近所にあり六十歳を過ぎた位の夫婦が切り盛りしている小さな店で、盆暮れ正月以外は基本的に年中無休、出前も受けてくれる上に飽きの来ない家庭的な味が好評で研究所でも贔屓(ひいき)にしている者が少なくない。
ルイズの魔法を観測する為の実験は、毎回土曜日の午後と日曜日の午前に一泊を挿(はさ)んで行われる。しかしルイズにとって筑波で行われる実験など今となっては、ぶっちゃけどうでも良い事になっている。彼女にとって今や大好物である蝦蟇屋の“お子さま牛丼セット”を二日連続で食べられる事の方が重要になっている。
ちなみにこの“お子さま牛丼セット”だが、ルイズの事を気に入った蝦蟇屋の女将(おかみ)さんが、ルイズの為だけにと旦那さんに作らせた特別メニューだったりする。その内容は、量をお子さま向けにした牛丼、温泉たまご、季節の漬物、味噌汁、茶碗蒸し、そして何故か枝豆が付く。この枝豆をルイズが両手を使いながら、はむはむと一心不乱に食べる様子は小動物の様で大変に可愛らしい。これをメニューに加えたのは絶体に女将さんの策略である。
この蝦蟇屋発見のお陰で、最初の予定は月に二回の筑波通いが、ルイズからの強い希望によって毎週行う様に変更になったのだが、

これが真相だと才人だけが知るのみだ。彼女を故郷に帰す為の研究・実験への協力なのに牛丼目当てとは如何(いかが)なものかとも思うが、既に牛丼ジャンキーの片鱗を見せ始めているお子さまルイズにそんな事は関係無い。しかし才人が今言った様に、牛丼を餌にして言う事を聞かせる事も可能だったりもする。

「次は新上野。新上野。ＪＲ東北線、高崎線、上越線、常磐線、筑波線にお乗り換えのお客様は……」

独特の節回しで車内アナウンスが目的の駅に到着する事を告げる。ドアが開きホームに下りた二人は乗り換えの連絡通路を通り抜けてコンコースへと向う。駅の構内は週末と言うこともあり郊外へ向うのだろうか、家族連れが多く見受けられ、平日よりは疎(まば)らだが、それでも余所見をしていたらぶつかる程度の人混みの中、才人は確(しっか)りと自分の手をルイズに握らせて筑波行きのホームへと向った。

それにしても才人は兎も角、ルイズを護衛も無しに街中に出しても大丈夫なのだろうかとも思うが、実は彼女が外出する際には、要人警護の訓練を受けた内閣調査室所属の腕利き達が、目立たない様に付かず離れず交代で護衛に就いているから心配には及ばない。

そんな大人達の事情を知らない小さなナイトとお姫様は筑波行きの列車が出るホームに到着した。列車はまだ入線しておらず、時計を見ると発車まで時間がある。空調があるとは云え半解放のホームはそれなりに暑くルイズは少しへバり気味。そんな彼女を見て、才人はホームにある飲み物の自動販売機の前に立つと、ルイズに「どれにする？」と聞く。聞かれたルイズは表示されているサンプルを見ながら、どれにしようか少し悩んでいる様子。

この自動販売機をルイズが初めて見た時の驚き方は面白かったな、と才人は思い出し笑いを浮かべる。ルイズからしてみれば大きな箱に描かれた商品の絵に触れると、選んだ商品がいきなり箱の中から出て来るのだから驚かない訳がない。そんな事を考えているうちにルイズは選び終わったのか「これ」と言って商品を指差すと、才人

はカードを自販機に翳(かざ)す。するとルイズから要求の声が上がった。
「あたし押す！　お兄ちゃん持ち上げてよ」
「下の方にボタンあるんだし、そこ押せば良いじゃん」
「上のを押すの！」
才人は小学六年生に似つかわしくない諦めの溜息を吐くと、後ろからルイズを抱き上げて商品表示の部分に彼女の手が届く様にする。端から見れば我が儘を言う妹に付き合っている優しいお兄ちゃんだ。実際、ルイズは無意識に才人に甘えているし、才人は才人で、そんなルイズを不快に思う事は無い。
“こいつが帰るとき、俺どんな顔してるんだろな……”
二人並んでホームのベンチに座って飲み物を飲みながら、ぼんやりと予感めいた物を感じたのか、才人はそんな事を考えていた。

新上野からＪＬＲ（日本リニア鉄道株式会社）筑波線で学園都市駅までは一五分程で到着する。そこから研究所まではバスに乗れば五分程で着くのだが、彼等はいつも徒歩で行く事にしていた。大きな公園を抜けるこのルートは子供の足で二十分程かかる。だがルイズはいつもこの公園を通る事を望んだ。何でも「懐かしい感じがする」と言う事で、ここは彼女が気に入っている場所の一つであり、日曜日の実験を終えて昼食を終えた後は、何をするでも無くここで時間を潰してから帰るのである。
そんなルイズお気に入りの場所を（主にルイズが）走ったり、時に立ち止まったりしながら通り抜けると“関東工科大学・高次物理学研究所”の正門が見えてくる。だが彼等は、そちらへは向かわずに蝉の鳴き声を聞きながら脇道に逸れ、昼食の為に件の蝦蟇屋へ向かう道へと歩いて行く。
「いらっしゃーい！　あらルイズちゃんと才人君じゃない。そろそろかなって思ってたわ」
蝦蟇屋の暖簾(のれん)をくぐると、女将さんの人懐こい笑顔が出迎える。

まだお昼にはほんの少し早く、また土曜日と云う事もあり店内に客は居ない。匂いに釣られてルイズが初めてこの店を見つけた時、入口に置いてある笠間焼きの大きな蝦蟇を見て真っ青になって驚き、脱兎の如く逃げ出したのは今でも話にネタになっている。
「こんにちは。おばさん、あたしいつものね」
「はいはい、ルイズちゃんのは分かってるからね。才人君は？」
まるで孫が遊びに来た事を喜ぶかのようにニコニコしながら女将さんは注文を聞きながら二人の前に冷えた麦茶を置く。
「こんちは。俺は味噌焼き定、半ライスでお願いします」
「はいよ。あんたー、お子さま牛セットと味噌焼き定半で一丁ね」
女将さんの声に旦那さんが厨房から出て来て「おう、ルイズちゃん来たのか。気合い入れて美味いの作るからな」と笑顔で挨拶すると、調理の為にすぐに戻って行く。
この夫婦には二人の息子が居り、合わせて五人の孫が居るのだが、女将さん曰く「それが全員男の子でね。一人くらいは身内にルイズちゃんみたいに可愛らしい女の子が欲しかったわ」との事。そんな事もあり、この二人はルイズの来店を心待ちにしていたりするのだ。
「ほんとルイズちゃんはお人形さんみたいに可愛いねぇ。家の孫で同い年位のが居るから、お嫁さんに来るかい？」
そう女将さんに聞かれたルイズは、才人と女将さんの顔を交互に見る。
「お兄ちゃんが一緒じゃなきゃヤダ」
「おやおや、家の孫は会わないうちから振られちゃったか。会っても才人君が居るから無理だろうけど」
ルイズの一言に女将さんは笑いながら応え、才人に「がんばんなさいよ」と冷やかしを言うと旦那さんを手伝う為に厨房へと入って行った。

＊　＊　＊

今まで行った観測の結果、ルイズが初歩の魔法だと言う“レビテーション”を唱えそれを行使すると、才人からの記憶転写でも現れた共通余剰空間での超立方振動が発生する事が認められた。但し魔法を行使する対象物に対してルイズが言う様な浮遊、若しくは爆発が起こる事は無かったし、通常空間と高次空間（ｉ－スペース）での変化を計測器類が捉える事も全く無い。また、魔法を行使する事でルイズの脳内に疲労が蓄積して行くのをＢＩＡＭによるモニターが明らかにした。

しかしこれまでの観測で、ルイズが“杖”を振るう度に彼女が精神的に消耗する以外、何も新しい事が見いだせない状況だった。また、南武とエィドレフが選抜したグループが中心となって行っている超立方振動の発生に関する理論の構築の進行も芳しくない。

そんな状況の中、最近ナヴコムから派遣されて来た若手の研究者から「こちらに来る切っ掛けとなった事をルイズ嬢にやって貰ったらどうだろう」と提案が上がった。

「目的はプレーン宇宙同士を繋げる事なんだから、関係の無い事象について観測しても無駄でしょう」

彼は会議の重苦しい雰囲気を解消しようとして軽い気持ちで言ったのだが、確かに言われてみればその通りだと皆が納得してしまい、次回からはそれで行こうと言う事で、提案をした（言い出しっぺの）若手研究者、アイザック・Ａ・クラークが実験観測のリーダーに祭り上げられる事になった。

「我らがお姫様はまだ来ないのかね」

「まだ昼時だからな。大方いつもの蝦蟇屋で飯でも食ってんだろ」

クラークが観測の準備をしながら誰に言うでもなく呟くと、向かい側で作業をしていた友永慎一（ともながしんいち）が笑いながら言う。

「蝦蟇屋？」

準備の手を休める事なくクラークが友永に問い返す。勿論、それに答える友永も手は止まっていない。

「ああ、君は日が浅いから知らないか。近所にあるジャパニーズ・スタイルの食堂で、彼女らはいつもそこで昼食を済ませてから来るんだ。そうだな、チェックを終わらせたらそこで食事にするかい？
たまには外で食べるのも良いんじゃないかな」
「こちらに来てから毎日、研究所と宿舎の往復だからな……。だが時間が足りなさそうだから、今日は所内で済ますよ」
二人は黙々と作業を続け、終わる頃には時計は一時を告げようとしていた。
「まいったな。ゆっくり食事してる暇は無いぞ？」
「仕方無い、今日もファーストフードで我慢するか」
クラーク達は諦めの表情で言うと足早に所内の売店へと向う。
「それにしても君、本流のＰＳ転位研究を蹴って、どうしてこちらを専任する事にしたんだい？」
道すがら友永はふと思った事を口にした。それを聞いてクラークは片眉を上げながら「そりゃ面白そうだからだよ」と答える。
「考えてもみたまえ。既存の理論に当て嵌められない未知の現象が目の前で起こってるんだ、黙って指をくわえてるなんて出来る訳ない。君だってそのクチだろ？」
「それは無い、と言えば嘘になるけど、やっぱり我等がお姫様を早いとこ親御さんに会わせてあげたいじゃないか。現行理論の枠内だと彼女を送って行くには最短でも七年もかかる。知らない場所でそれだけ長い間、心細い思いをさせるのも可哀想だろ？」
「違いない。早いとこ僕らで帰還手段を見つけられると良いな」
そう言うと彼等は笑いながら所内の売店へと向かって行った。

＊　＊　＊

食事を済ませた才人とルイズは蝦蟇屋を出ると、研究所の正門まで戻らずに通用門へと向かった。蝦蟇屋は研究所の裏手の方にあり、また観測が行われる実験棟が通用門から近い位置にある事から彼等

はいつも其所(そこ)から入るのだ。勿論、通用門には守衛が居り、彼等は各々のＩＤカードを提示して、それを首から下げて中に入って行く。
通用門から暫く歩くと目的地の実験棟だ。エントランスから奥に入るには指紋、指静脈、虹彩と三種類の生体認証を行い、全てがＩＤカードと研究所のセキュリティ・センターに登録されている情報と一致しなければならない。また建物内ではＩＤカードの携行が義務付けられており不携行で歩き回ると忽ち(たちま)警報が鳴り響き保安要員がすっ飛んで来る事になる。
才人とルイズはセキュリティ・チェックをパスするとヴィザーのサポートが受けられるイヤーセットを装着する。テューリアンも含め、多国籍の人々が働くこの研究所ではヴィザーが提供する自動翻訳は必須なのだ。
廊下を歩き目的の実験室の前に来るとＩＤカードに反応してドアが自動で開くと、部屋に入った二人は「こんにちは」と挨拶をする。その声に気付いたクラークが所狭しと並んだ機器の間から顔を出す。
「お、いらっしゃい。二人とも毎度ご苦労さま。今回からは、えーと何だっけ……。“サモン・サーヴァント”か。それを実演して貰う事になるからね。宜しくお願いするね」
クラークの言葉にルイズは「はい。こちらこそ、よろしくお願いします」と応えて、ぺこりとお辞儀をする。
そんなルイズを見てクラークは笑いながら「もう少し準備に時間が掛かるから、控室で待っててもらえるかな」と言い、作業に戻ろうとしたが、ふと思い出した様に二人に告げた。
「冷蔵庫にエクレアがあるから食べていて良いよ。飲み物はセルフサービスね」
「クラークさん、ありがとう」
にこにこしながルイズはお礼を言うが、才人は彼女に釘を刺す。
「ルイズ、今食べちゃうと三時の休憩のオヤツは無しだな」
「えーっ、なんで？」
「さっき蝦蟇屋で、オバサンからサービスでプリン貰って食べたば

かりだろ。食い過ぎでお腹壊しても知らないぞ」
　ルイズは、うーっと唸りながら冷たい物の食べ過ぎでお腹を壊した時の事を思い出し、待っている間のエクレアは我慢する事にした。

＊　＊　＊

『我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力をつかさどるペンタゴン。我のさだめにしたがいし、“使い魔”を召喚せよ』
　ルイズがハルケギニアの言葉で呪文を紡ぎ“杖”を振るう。暫くすると研究者達から「おお！」とか「これは……」等の感嘆とも驚愕ともつかない声が上がった。
「振動のパターンが今までと違うな」
　モニターを眺めて誰に言うでも無く呟いた友永にクラークが話しかける。
「そればかりじゃ無い。ｉ－スペースで観測可能な虚数項の部分に曲率変化が出ている。待てよ……！　ヴィザー、ルイズ嬢が転位した時のデーターを表示してくれ」
　クラークの依頼にヴィザーが短く「はい」と応えるとモニターには以前に解析されたデーターが表示される。
「今、観測されたデーターに同じ処理を加えて貰えるかな？　ｉ－スペースについては虚数項のξ軸限定で一致点の抽出も頼む」
　ヴィザーにより処理され、視覚化されたデーターを見てクラークくは目を見開いて何度も見直している。その様子に友永はクラークが何か見つけたなと感じた友永が「どうした？」と声を掛けた。
「ユリーカ（みつけた）！　一次元、しかも虚数項だけだが、以前の転位データーと完全に一致する項が含まれている。ヴィザー、端点情報についても比較と確認してくれ」
　クラークの興奮した声が実験室に響き渡る。この日を境に彼等若手中心のチームは目覚ましい成果を挙げて行く事になる。

まず彼等は正確な端点情報を得る為に更なるデーターの取得を行なった。ルイズが転位した時空位置から相対的なズレはどれ程あるのか、短時間での変化が現れるのか、共鳴状態は維持されているのか等々、様々な情報が得られる事を期待しての測定だった。その日は都合六回、翌日にも六回の測定が行われた。勿論、ルイズのご機嫌を取る為に土曜日の夜と日曜日の昼に蝦蟇屋から出前を取ったのは言うまでもない。

その後、データー取りは毎週行われた。解析を行い正確な結果を出すにはサンプル数は多ければ多い程良い。クラーク率いるチームはその精度を上げるべく着々とデーターの蓄積を行っていった。その結果、彼等は遂に共通余剰空間での超立方振動と、それによるｉ－スペース及び通常空間に発生する歪みについて定量的に説明可能な方程式を見出(みい)だす事に成功する。超立方振動を起こすエネルギー源については全く未知のままであったが、発生している振動に対してなら既存の技術で干渉出来る可能性が見えて来たのだ。

更に、ルイズが本来居るべき宇宙と、こちらの宇宙は特殊な共鳴状態を保っており、彼女が存在した局所的な時空間と地球近傍（とは言っても差し渡し五十光年程の空間であるが）の時空間が重なり合う様になっている為に、彼方(あちら)と此方(こちら)で時間軸が殆ど一致する状態になっている事が分かって来た。

この事が彼方側(あちらがわ)で発生する端点の軌跡の特定を容易にした。結果、端点は惑星と思われる天体の軌道と自転周期に同期している事が判明。これについては研究者達は発狂せんばかりに驚いた。エネルギー源も謎な上に端点の位置が現行技術ですら不可能な自転を含めての複雑な軌道に同期して惑星上へのピンポン誘導が高度な誘導装置も無しに成されているのだから驚くなと言う方が無理だ。後年にクラークは高次空間物理学の書籍を幾つか出すのだが、その中で「魔法とは何とも出鱈目で悩ましくも素敵な物だ」と語る事になるのだが、それはまた別のお話。

こうして若手を中心としたチームが成果を出して行くにつれて研究の主流はそちらにシフトして行く事になり、より多くのリソースが割かれる様になって行った。そしてルイズが地球に迷い込んでから一年半が過ぎた頃、彼等の研究は共通余剰空間で起こる超立方振動に対して、小規模だが振動モードに干渉可能な実験装置の完成として実を結ぶ事になる。

＊　＊　＊

最初の出会いから一年半、才人は中学生に、ルイズは地球換算で八歳か九歳程になっていた。

「ねぇ、お兄。今日、うまく行くよね？」

いつもの週末と同じく筑波の研究所に向う途中、ルイズは少しばかり不安げな表情で才人に言う。今日は初めて超立方振動に対する干渉装置の実働実験が、ルイズの魔法行使中に行われるのだ。研究者達が正しければ、この干渉装置によって僅か数マイクロメートルと微小ながらルイズが転位した時に発生した『特異なプレーン宇宙間ブリッジ』が再現される事になるのだ。

「大丈夫さ。研究者の人達とお前の魔法を信じろよ」

「でも……」

才人の励ましにルイズの返事は歯切れが悪い。この一年、実験に協力して来た彼女だが、一度も目に見える形で魔法が発動していない為に、自分自身で実感が湧いていないのだ。

「心配すんな。今度のが上手くいかなくても、お前を送って行く為の別な方法も父ちゃん達が研究してんだからさ、いつも通り気楽にしてろよ」

才人にそう言われ、いつもの様に頭をポンポンと軽く掌で叩かれたルイズは不思議と気持ちが落ち着くのだった。

蝦蟇屋で昼食を済ませると二人は研究所へ向かう。いつもの通り

セキュリティチェックを行い、いつのも通り実験室に入る。しかし今日の実験はいつもと違うのだ。緊張しながらルイズが入室すると、クラーク達は既に準備を完了させていた。実験を始める前にルイズには接触型ＢＩＡＭが装着される。彼女の体調等のバイタルモニターと、表層意識やニューロンの活動等のメンタルモニターを行い、もし異常が見られた場合には即座に装置を停止する為だ。勿論、システム全体の監視とコントロールはヴィザーが担当する。

「よし、ルイズちゃん。自分のタイミングで始めてくれ」

クラークが告げるとルイズは深く頷き、杖を構えると詠唱に入った。

『我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力をつかさどるペンタゴン。我のさだめにしたがいし、“使い魔”を召喚せよ』

ルイズは杖を振るい目を閉じる。実験室には機器の出す低い音のみが響いている。

「超立方振動確認。パラメータは既定値通り、干渉装置動作開始しています。被験者、装置共に異常無し」

ヴィザーの声がルイズを除く関係者のイヤーセットに響く。

「モード安定確認、フェーズＡ開始。干渉装置出力上昇中。パラメータ、フィードバックともに正常値の範囲内。被験者バイタル、メンタルともに正常」

研究者達が見つめるモニターの表示は刻一刻と変化を続ける。その向こうではルイズが杖を振った姿勢のまま、じっと目を閉じて精神を集中している。

「出力、定格値に到達。ｉ－スペース、通常空間に重力異常認めず。被験者バイタル安定、フェーズＢ開始します」

ヴィザーの報告に友永が「いよいよだ。始まるぞ」と声を押し殺し呟く。

「超立方振動、モード変化します。ｈ－リンクからのエネルギー供給異常無し。時空間端点確認。両端点位置座標は誤差範囲内。端点

でのｉ－スペース、通常空間の曲率増大中、計測値は全て予測範囲内。重力波発生認められず。被験者のバイタル、メンタルともに安定、続行します」
全員が固唾を呑んで見守る中、各々のイヤーセットにヴィザーの声だけが淡々と響く。
「超立方振動のモード安定、フィードバックは正常、曲率なおも増大中。端点間ブリッジ接近――接続。端点領域の大きさは予測値通り五マイクロメートル未満、微弱な光子の放出を検出」
研究者達の口から「おお」とか「ああ」と言う感嘆の声が漏れた。
「被験者の転位時ブリッジとのパターン相似を確認、停止フェーズに移行します。振動モード変更――ブリッジ消失します。超立方振動は初期値へ収束――確認。被験者のバイタル、メンタルともに安定、異常無し。ｈ－リンクからのエネルギー供給のシャットダウン・プロシージャ開始……干渉装置停止」
ヴィザーが正常終了を告げると実験室は興奮に包まれた。その中心でリーダーであるクラークは皆に背中を叩かれ揉みくちゃにされていた。そんなクラークに友永は「やったな」と声をかける。
「ああ、一年でこれだけの成果が出せたなんて奇跡だよ。彼女の頑張りが有っての事だ」
クラークそう応えると友永は固く握手をしながらルイズの方を見る。そこには満面の笑みを浮かべ彼女に駆け寄る才人の姿があった。
「ルイズ！　成功だってさ！　お前、帰れるんだよ！」
才人の陽気な声を聞きながらルイズは思った。
“帰れるんだ……。お兄も喜んでる……。でも、なんか寂しい。寂しい……？　どうして？　帰れるのに。みんなあんなに喜んでいるのに、どうして？”
ルイズは自身の感情に戸惑い、どうして良いか分からなくなった。そして自分でも気付かずに涙を零していた。

＊　＊　＊

王都トリスタニアから馬車で凡そ二日ほどの所に、トリステイン貴族の名門、ヴァリエール公爵の居城は建っている。重厚な造りのその城は、二年前に公爵家の三女であるルイズ・フランソワーズが魔法の練習中に庭先から忽然と消えてしまってから現在に至るまで、悲痛で重苦しい空気に包まれたままだった。

ルイズが消えた瞬間を目撃した者は居なかったが、直前に通りかかった使用人が、顔を袖で拭いながら魔法の練習をしている三女の姿を目撃している。そして五分程後に用事を済ませたその使用人が通りかかった時には彼女の姿は既に無く、代わりに見たこともない子供の背丈程もある植物の鉢植えが置かれていたのだった。

営利誘拐か、はたまた幻獣によって攫われたのか。平時でさえ厳重な警備が敷かれているヴァリエール城でその様な事を企てる事など不可能であり、ルイズの身に一体何が起こったのか全く不明だった。

ルイズが居たと思われる場所に置いてあった植物を学者に調べさせた処、ハルケギニアに存在しない全くの未知の植物だった。また優秀な土メイジが植物が植えられている植木鉢を調べたところ、こちらも未知の物質で出来ている事が分かった。

しかし、それが分かったところでルイズが戻って来る訳では無い。どこの物とも知れない植物と可愛い末娘が入れ替わってしまった事にヴァリエール公爵は怒り心頭に発し、植物を叩き切って燃やそうとしたが、それを止めたのは次女のカトレアだった。

カトレアは幼い頃から身体が弱く部屋で伏せっている方が多かったが、勘のようなものが鋭く、人や獣、物事の本質を言い当てる事が多々あった。その次女が言う。

「この植物を通してルイズは“まだ”繋がっています。これを失えばヴァリエール家からルイズは永遠に失われてしまうかも知れません」

公爵は苦虫を噛み潰した様な表情で植物を見つめ「忌々しいが……カトレアがそう言うならば、そうなんだろうな」と肩を落とした。そして、その植物はルイズの部屋に置かれ、カトレアが世話をする様になったのだ。

あれから二年、屋敷ではルイズの話をする事はタブーとなっていた。一部の口さがない宮廷貴族等はヴァリエール家の元使用人から聞いた「公爵家では魔法の才能が無いルイズを疎ましく思い何処かに追放した」だの「実はルイズは不義の子で、その事実を隠す為に密かに始末された」等の噂話を王宮で真しやかに流していた。その噂話は公爵の心を抉り、彼はすっかり老け込んでしまい王宮へ出仕する事も無くなってしまった。その妻である公爵夫人はルイズに敢えて厳しく接していた事を悔やみ、日々始祖ブリミルへの懺悔と祈りの日々を送っている。

「ルイズ、貴女はいつ帰って来るのかしらね……」

植物に水をやりながらカトレアが呟いたその時、彼女は何かの気配を感じ辺りを見渡した途端に、ことん、何かが床に落ちる音がした。カトレアが咄嗟に音がした方を見ると、その床に拳大（こぶし）の、クリスタルの様な輝きを放つ正二十面体をした何かが落ちていた。

＊　＊　＊

地球の公転面から垂直に三光日の空間に人類の手により作られたその建造物は浮かんでいる。直径五十メートル、長さ三百メートルのパイプを繋げて形作られた八角形の中心を、直径八十メートル、長さ五百メートルの筒状の構造が貫いており、八角形の部分と中心構造物の中央が二十四本のスポークで繋がれている。本来は中心構造物を軸に五分間に一回の速度で回転しているのだが現在は停止した状態だ。

それは凡そ八十年前に作られた“技術試験用宇宙島（コロニー）ヤヌス”。役

目を終えたそれは地球軌道のラグランジェ点、Ｌ１に在って解体を待つばかりだった。そのヤヌスに半年前、最後の仕事が与えられる事になり、ヴィザーがｉ－スペースを通して発生させた重力場によって一ヶ月をかけて曳航された末に現在の軌道に投入されたのだ。
　軌道投入後、ヤヌスにはｈ－グリッドからのエネルギー供給を受けるジェネレータの追加、八角形をした元居住ブロックへの改良型超立方振動干渉装置の設置、中央構造部への重力制御装置の設置等の大改造が施された。
　よく見ると正八面体の物体が二十個、ヤヌスを中心にして正二十面体の頂点に位置する様に配置されている。正八面体はヤヌスに設置されている干渉装置を補助するブースターの役割を持つと同時に、装置稼働時に発生するかも知れない異常な空間曲率をキャンセルする機構が組み込まれている。もし、ルイズが転位して来た時と同じブリッジが発生せず、重力異常を伴う様な事態が発生した場合に、危険な重力場をキャンセルし安全を確保する為の保険である。
　そのヤヌスにＵＮＳＡの標準シャトルが一機接近して行く。シャトルはヤヌスから千キロメートルの位置に停泊している直径千二百メートル程の球形をした小型宇宙船、地球での識別名“ヴァーユ号”から発進した物で、そこには筑波で研究を続けていたクラークを中心とする研究者達と技術者達が乗り込んでいた。勿論、平賀家一同とルイズも来ているが今はヴァーユ号で待機中であり、準備が整い次第シャトルでヤヌスへと向かう事になっている。
「ついにこの時が来たな」
　友永がクラークに話しかけた。感慨深げにクラークは言葉を発した。
「ああ、こんなに早く準備出来るとは思ってもいなかったよ」
「アッタンに放置されていたカドリフレクサーが役に立つとはね。なんとも愉快な事じゃないか」
　カドリフレクサー、それは嘗（かつ）て、ジェヴレン人が地球人を太陽系に封じ込めると言うお題目で、テューリアンの技術協力によって作

られたｉ－スペースを含めた空間で、通過不可能な障壁を発生させる装置の事だ。
　実際に封じ込める目標は巨人たちだったのだが、ジェヴレン人達の知らない所で密かに接触した巨人たちと地球人によって彼等の野望は挫かれ、使われる事無くジェヴレン星系にあるアッタンに放置されていたのだった。
　このカドリフレクサーの変調機構が超立方振動干渉装置へ転用可能である事が分かったのがヤヌスの軌道投入と殆ど同時期だった。
　そのお陰で本来なら一年以上かかるはずだった大型の干渉装置の開発が大幅に短縮され、半年未満と言う短い期間でヤヌスに設置する事が可能になったのだ。
　シャトルのエアロック・ドアがドッキング・ポートに接続されるとクラーク達はハッチを通り重力区画にある指令室へと向う。その途中で友永が口を開く。
「明日から、いよいよ本番か」
「なに、ブリーフィングで言った通りに手順を踏んで行けば間違いは起こらんよ」
　クラークの言葉に、友永が確認する様に分厚いチェックリストを捲る。
「まずはミクロサイズでのブリッジ発生確認か、これは地上で何度もやったヤツだな。問題は次か……」
「マクロサイズのブリッジ発生は今回が初めてだからね。ルイズ嬢にかかる負担も未知数だし時間をかけて慎重にやるさ」
　クラークは決意を込めてそう言うと指令室へと歩を進めた。

プレイアデス・オペレーション　（3）（後書き）

※ヤヌスが出てきましたが「未来の二つの顔」のアレとは別物です。
ちなみにヴィザーが居るからスパルタカスは出しようがありません。

プレイアデス・オペレーション　（4）

ヤヌスにある二十四本のスポークが集まっているハブと呼ばれる区画には、本来なら八角形をしたリングの回転をキャンセルし、中央構造物を相対的にだが一定方向へ向けておく機構が組み込まれていた。

しかし改装によってヤヌス全体に重力制御がされる様になり、それに伴ってハブ区画に有ったキャンセル機構は撤去され、その空いたスペースには管制・指令を行うブースと実験ステージが設置された。

直径四十メートル、天井までの高さ十メートルのその空間の中央には、床から五十センチメートル程高くなった直径二十五メートルの円形舞台が設置されている。その舞台に向かう様に壁際に半径二メートルの半球状をした透明なキャノピーが設置されている。

実験中、ルイズはこのキャノピー越しに円形舞台をターゲットに杖を振るう事になっている。マクロサイズのブリッジを発生させる事で不測の事態が起こってもルイズの安全を確保する為だ。もし危険な兆候が見受けられた場合は即座に遮蔽用のシャッターが降りる様になっている。

その実験ステージをぐるりと取り囲む様に、高さ三メートル程の所、壁から迫り出した大きな窓が並んでいる。そこは実験施設としてのヤヌスの中枢、管制・制御を行う指令ブースで、ブース内には複数のコンソール群が並んでいる。実験に際して機器の管制・制御はヴィザーが行う様になっているが、万が一に備えて独立したサブ・システムも用意されており、場合によっては手動による緊急停止等のコントロールを行える。

そして現在、各部署では実験への最終調整が着々と進められていた。最初このプロジェクトはクラークと友永、それと数名の院生で始められた非公式のものであったが、今では地球人とテューリアン

を合わせて百人を超える研究者、技術者が従事する規模となっている。
　各部署から上がって来る報告を確認しながら「全く、こんな大事になるなんてな」と友永が感慨深げに呟く。今やクラークと友永の二人は、このチームを纏めるプロジェクト・リーダーとなっていた。勿論、平賀や南武、エィドレフ等の本流の研究を行っている者達からの助言や協力は貰ってはいるが、彼等はオブザーバーとしての立場を崩していない。
「あの時は、こんな大規模な事になるなんて予想も出来なかったな。しかし、これだけの設備を揃えたところで結局は使い捨てか」
　チェックをしながらボヤく友永にクラークが応える。
「仕方無いだろう。現状の技術で出来るのは超立方振動に干渉してブリッジを接続するのと、こちらがわの端点位置コントロールだけ。本質的にはルイズ嬢が持っている未知の能力、『魔法』が頼りなんだから」
「だからと言って、このまま終わるのも悔しいな。ルイズ嬢のパターンは重力場を発生しないから応用が可能なら星系内へのエントリーポートの発生が可能になるだろ？」
「そればかりか惑星表面上での瞬間移動が可能になるかもね。だが、まずはどうやれば超立方振動を励起できるのかを解明しないと。まあ、今はそこまで考えても埒がない。やるべき事をやるまでさ」
　そう言いながら彼等は作業に没頭して行った。

　今回のマクロサイズ・ブリッジ発生確認後に、次のステップとして、自立航行が可能な小型の宇宙船にルイズと複数の乗員を乗せて送り込む事が計画されている。向こう側の端点が惑星上にあると思われるので、そう大きな船体は送り込めない。それ故に乗員も限られた数になる。
　ルイズを送り届けた後だが、大質量の移動による共鳴状態が維持され、暫く時間軸が一致する事が予想される。宇宙船の乗員はこち

らで転位装置が完成するまでの間を別な宇宙で同じ時間だけ待たされる事になってしまう。
この問題の解決策としては、宇宙船を星系の最外縁部で光速近くまで加速して飛行させ、相対論的効果によって船内時間の進み方を星系に対して大きく遅れさせる事が検討されている。
転位施設建設まで十年かかろうと、宇宙船の速度を調整すれば乗員は船内時間で一週間も待たずに帰還出来る事になる。これにより小型宇宙船で過ごす乗員のメンタル面や食料等についての問題は解消する。
だが、それはあくまで船内時間で一週間であり、その間に地球では十年の時間が経ってしまう。故に妻帯者や恋人が居る者にとっては辛い事となるであろう事から、ＵＮＳＡでは独身者で、しがらみの少ない者を中心に人選を行なっていた。

ヤヌスに設置された機器では、発生可能なマクロサイズ・ブリッジの大きさが最大で二メートル程度と計算から見込まれている。向こう側の端点が惑星上、または惑星の自転に同期した場所に開いている事は判明しているが、そこがどんな場所かが判っていない。その場所を確認する為に、小型の探査体の類を送り込んで向こう側の様子に探査する事になっている。
ルイズの能力により作られる宇宙間ブリッジは、マイクロ波を使った反射実験によって端点間での双方向のエネルギー移送が可能な事が判明している。探査体からの信号はブリッジが発生している間は問題無く受信出来るだろう。ちなみに反射実験時で観測された反射波が返って来る時間から、向こう側の端点の三乃至四メートル付近に何かしらの遮蔽物がある事が予想されている。
用意された探査体は十五センチメートル大の正二十面体をしており、その半分の十の面に広角カメラが埋め込まれており、ほぼ全方位の光学撮影を可能としている。表面は透明な耐熱・耐圧プレートで覆われているが、大気圧や組成、温度等の測定が行われる場合に

は、それぞれのセンサーが埋め込まれている面のプレートが剥離する様になっている。
探査体の稼働時間は連続で百二十時間、接続が切れている間は自動で内蔵ストレージに記録するので、破壊されない限りは向こう側を五日間に渡って観測出来る。
その探査体を担当技術者とチェックしながらクラークは友永に「君はこれが終わったらどうするんだい？」と問うと、友永はチェックリストからは目を離さずに「はっきり決めている訳じゃないけど平賀教授のチームに戻ろうかと思ってる」と素っ気なく言い「君こそどうするんだい？」とクラークに問い返す。それに対し彼は答える。
「ＵＮＳＡから離れて、今回の超立方振動の研究を続けようと考えていてね。どうだい、この話に乗ってみる気は？　テューリアン側の協力は既に取り付けてあるんだけどさ」
それを聞き驚く友永を見ると、クラークは満足そうに、にやりと笑った。

ヤヌスでの準備が進む中、ルイズはヴァーユ号の自分に宛われた部屋で待機していた。あと一時間程でヤヌスへ向かう事になっている。ルイズが何気なく触った彼女の髪は、染料が落とされて本来の艶やかなピンクがかったブロンドへと戻されている。
「キレイだったなぁ……」
ルイズはシャトルで地球から飛び立ってヴァーユ号へ乗り込んだ時の事を思い出していた。
彼女が乗ったシャトルは三角形のリフティング・ボディの両端に、斜め上に伸びるウイングレットが付いた滑空による降下も可能なタイプだった。通常、殆どのシャトルは軌道上にある重力制御衛星によって飛行制御が行われる為、シャトルが自力で飛行するのは余程の事が起こらない限りは皆無と言って良い。テューリアンの重力工学を学んだ人類は、星の重力に縛られる事無く自由な軌道を選んで

宇宙空間を飛行する事が出来る様になっているのだ。
　重力制御衛星の管理下での飛行は静かで、不快な振動や騒音とは無縁だ。宇宙港から離陸して高度が上がるに従い、窓から見える空は所謂空色から濃紺へと移って行く。窓から見える空に星が見え始めると急速に漆黒へと変わって行き、輝く星々が見える様になる。この時、シャトルの速度はとっくに音速を超えており、見ると地平線はいつの間にか弧を描き薄い膜のような大気層がそれに沿って蒼く輝いていた。
　ルイズは地球外からの景観を平賀家で才人と一緒に何度も映像で見ていた。しかし実際にシャトルに乗って若干の加速を感じながら自身の肉眼でそれを見るのでは印象は全く違う物になる。丁度ルイズの気分が高揚したところで、偶々彼女が座る席の窓が地球側を向く様に、シャトルが軌道変更を行う予備動作の機体ローテーションを開始する。
「うわぁ……」
　紺碧の海を背景に白い雲が散りばめられている様にルイズは思わず感嘆の声を漏らす。この時、シャトルは地表から百五十キロメートルを超えて更に上昇を続けていた。軌道変更を終えたシャトルの窓から地表は見えなくなり、重力制御衛星はシャトルを秒速五キロメートルまで一気に加速させ、地上から千二百キロメートルで地球自転に同期しながら待機している宇宙船『ヴァーユ号』まで減速込みで僅か四分強で到着させた。
　ヴァーユ号の制御圏に入るとシャトルの制御はヴァーユ号に移され、ランデブーからドッキングと一連の操縦が行われる。その時、ルイズが座る席の窓から地球が見えた。
　青い海を背景に流れ渦巻く雲が白のマーブル模様を作り、所々に陸地の緑と茶色が確認出来る。ヴァーユ号からはインド亜大陸を中心とした地球の半球が見えていた。
　漆黒の宇宙空間に浮かぶ地球を見てルイズは、まるで宝石みたいだと思う。

“ハルケギニアも、こんな風に宝石みたいに見えるのかな……”
漆黒の闇に浮かぶ地球の景色は想いと共に彼女の心に強烈に焼き付いた。
「ルイズ、そろそろヤヌスへ出る時間だぞ」
不意に掛けられた声にルイズは、はっとして部屋の入り口を見ると、そこには才人の姿があった。宇宙からの景色を思い出している間に時間が過ぎていた様である。
「支度は出来てるのか？」と言う才人の問いに「うん」と応えると、彼女は才人と一緒にシャトルの格納庫へと向かう。その間、不安なのかルイズは才人の手をしっかり握っていた。

＊　＊　＊

実験はスケジュール通り問題無く進んで行った。数日をかけて段階を踏んで行われたマクロサイズ・ブリッジの拡大は、ルイズに負担を強いる事も無く大きさ十センチメートルを超え、いよいよ探査体を送り込める段階を迎えていた。
ルイズの詠唱が終わると、ステージ中央、高さ一メートル程の位置に銀色に輝く長径二十センチメートル、短径十五センチメートルの楕円形をした端点が現れる。端点が銀色に輝くのは光子が放出されている事によるのだが、なぜ光子放出が起こるのか原因は分かっていない。
端点が出現するとヴィザーから全て異常無しと報告が上がり、ルイズの精神疲労も僅かである事が確認される。これまでの実験でルイズが明確に「閉じろ」と思わない限り超立方振動は持続する事が判明している。干渉装置からエネルギーを供給し続ければルイズに精神疲労を起こさせずにブリッジを維持出来るのだ。ただ、ルイズ自身がブリッジを通過した場合については、ブリッジの維持がどうなるか分かっていない。
「端点拡張と端点間安定状態を確認。これより探査体を投入します」

ヴィザーの声とともにマニュピレーターに吸着された探査体が銀色に輝く端点へと運ばれて行く。
「探査体とのリンクは問題無し。映像もクリアと。ヴィザー、投入後は異常が無い限り手順通りに三秒間でシャットダウンを」
ヴィザーから「分かっていますよ」との返事と同時に、マニュピレーターは探査体を輝く端点に接近させて行く。皆がモニターを凝視する中、探査体は銀色に輝く端点に触れた瞬間、吸い込まれる様に消えて行く。
その一拍後――。
「おいこれはベッドじゃないか？」
映像を見ていた誰かの一言から指令ブースは騒然となる。
「クローゼットらしい物が見えたぞ！」
「人だ！　人が居る！」
喧噪に包まれた指令ブースにヴィザーの冷静な声が響く。
「リンク正常、映像取得正常。停止フェーズに移行。ブリッジ消失します」
「ヴィザー、通過時間は？」
クラークの問いに「千八百七十二ミリ秒です」とヴィザーが答えるとクラークは満足げに肯き「データーの記録は実質一秒か。映像解析を優先させてくれ」と頼む。
「クラーク、ちょっと良いかな？」
傍らでモニターを見つめていた友永が声をかけた。その問いかけにクラークも気付いていた様で友永が予期していた答えが返ってくる。
「ああ、僕も気付いたよ。どうする？　この後すぐ、彼女に確認して貰おうか？」
「それが良いだろう。君はヴィザーへの映像解析の指示を頼む」
友永はそう言うと、実験ステージを挟んで向かい側のキャノピー内に居るルイズに、インカムを通して話しかけた。
「ルイズちゃん、ご苦労様。疲れてないかい？」

ＢＩＡＭを使ったメンタル・チェックで精神的な疲労が無い事は分かっているが、友永は彼なりの気遣いを見せる。
「はい、だいじょうぶです。映像、撮れたんですか？」
ルイズは友永の居る指令ブースを見上げ笑顔で答える、と同時にキャノピー内に才人が入って来る。友永は窓越しにルイズを見ながら再び話しかけた。
「ああ、ばっちりだよ。それで気になる事が有ってね。すぐにでもルイズちゃんに確認して貰いたいんだ。三十分くらい待たせてしまうけど、このままブリーフィング・ルームに向かって貰えるかな？」
友永の声はイヤーセットを通すまでもなく、キャノピー内に流れていたので才人にも聞こえていた。才人が何事かをルイズに言う様子が見える。
「あの、お兄も行きたいって言ってるけど一緒に行って良いですか？」
「ああ、平賀教授達にも同席して貰うから彼だけ仲間外れって訳には行かないだろう。才人君にはイヤーセットを付けて来る様に伝えておいて。それじゃまた後で」
そう言って窓越しに手を振った友永の前にあるモニターには、ルイズと同じピンクがかったブロンドの長い髪を持つ人物の後ろ姿が映っていた。その映像に目を向けると友永は「もしこれが彼女の関係者なら、一年も待たせなくて済むかもな」と一人呟く。その横ではクラークがヴィザーと一緒に映像の抽出と構成を行なっていた。

何が映っていたのかが気になるルイズは落ち着き無くブリーフィング・ルームでそわそわしながら待っていた。そんなルイズを、やれやれと言う目で追いながら「ルイズ、少しは落ち着けよ」と才人が言う。
「だって、だって。友永さん言った気になる事って何なのかなーって。気になるし」

「だからって動物園の熊みたいにうろうろうろうろと。なんか飲み物持って来てやるから、それ飲んで落ち着け」
「あ、じゃあココアとねー、バタークッキー」
「ブリーフィング・ルームは飲食禁止だよ」
不意にヴィザーの声が響いたので二人は飛び上がらんばかりに驚く。
「ヴィザー、脅かさないでくれよ……」
恨みがましい目で才人は虚空を見つめた。
「準備が出来たからもうすぐ皆が来るよ。お手洗いを済ませておくなら今のうちだね」
ヴィザーに対して余計なお世話だよ、と才人はぶつくさ言っているが、ルイズはヴィザーの忠告に素直に従って化粧室へと走って行った。

ルイズがお手洗いを済ませて戻って来ると、ブリーフィング・ルームに既に主だった人達が揃っていた。うわ、気まずいなぁと思いながら、皆の視線を集めながら彼女はこそこそと移動して才人の横へと着席する。それを待って友永が話を始めた。
「揃いましたね。ここに居る皆さんは既に事情をご存知なので、前置き無しで結果をお知らせします。まず探査体からの映像ですが、およそ一秒間の記録が確認出来ました」
友永はここで一旦言葉を区切り各々の反応を確認するが、特に質問も出ない様なので先を続けた。
「説明するより処理した映像を見て頂いた方が早いでしょう。これが記録された向こう側の端点付近の様子です」
それを見たルイズは「あ……」と声を上げると目を見開き、無意識に両手で口元を押さえた。スクリーンには天蓋付きの豪華なベッドが映し出されている。
見覚えのある造り、見覚えのある装飾に布地の模様、間違い無い。あれは自分のベッドだ。

ルイズの様子に心配した才人が「どうした？　大丈夫か？」と彼女に声をかけるが言葉が出ない。
「ここに映っているのは、かなり豪華なベッドと思われます。壁や天井が見える事から、端点が開いた場所は、どうやらどこかの室内であると考えられます」
友永の説明が続いているが、彼の声はルイズには聞こえていない。才人が心配そうに見ているが、それすらも気付かない様子で彼女は食い入る様にスクリーンを見つめている。
スクリーンの映像がゆっくりと横に移動して行くと人の後ろ姿が現れた。腰まである長い髪はルイズと同じピンクがかったブロンド。そして、その人物の向こうに緑色の植物が見え隠れしている。それを見た平賀夫妻が「おい、あれ……」「……家にあったエバーフレッシュじゃないかしら？」と囁きあっている。
「映像はこの人物が振り向き横顔が見えた所で終わっています。ヴィザー、ここから五倍スローで再生、最後で静止、人物の顔にズームしてくれ」
友永の指示通りに映像が再生されて行くと、それを見つめるルイズの目が潤み始め、その人物の横顔がスクリーンに映ると彼女の眼から涙が溢れ出す。
「ちい姉さま……ちい姉さまだわ！」
ルイズは自分がよく知る、大好きなその人の事を大声で叫んでいた。

＊　＊　＊

自身の虚弱な身体の事も気にせずに、カトレアは父母の居室に向かって息せき切って走っていた。その手にはルイズの部屋に落ちていた、いや落ちて来たと謎の正二十面体が抱えられている。それはヤヌスから送り込まれた探査体であり、接続が切れた今でも映像を記録し続けている。

「お父様！　お母様！」
扉を開けて転がり込む様に入室すると、そこには彼女の両親が揃っていた。
「どうしました、カトレア。大声など出して、はしたない」
カトレアと同じピンク・ブロンドの髪をした女性、彼女の母親でありヴァリエール公爵夫人であるカリーヌ・デジレが彼女を窘めるが、その声は精彩を欠いている。
「……お、かあさま……申し訳……ありません、でも……」
息を切らせたカトレアは息を整える間もなく話そうとする為に、その言葉は途切れ途切れになってしまう。少しずつ息を整えながらカトレアは自分が抱えている物を目の前に差し出しながら言葉を続けた。
「ル、イズの……ルイズの部屋に……この、ような物、が……突然、現れまし、て」
差し出された物を受け取りながらヴァリエール公爵はカトレアにヒーリングの魔法をかけてやる。
「カトレア、お前は身体が弱い。無理をしないでおくれ。しかし……これは一体？」
見慣れない物を手に収めて、しげしげと眺めながら公爵はカトレアに尋ねた。
「これがルイズの部屋に突然現れたと言ったね。それは本当なのかね？」
「……はい。ルイズの部屋で、あの植物の手入れをしておりましたら、コトンと言う音が聞こえました。その音がした辺りを見ましたら、それが床の上に落ちておりました」
カトレアの話を聞いたヴァリエール公爵は「ふむ……」と首を捻ると探査体に対してディテクト・マジックを唱える。
「あなた、何かお分かりになりまして？」
カリーヌが尋ねるが公爵は難しい顔をしたまま黙っている。
「あなた……？」

「……何かのマジック・アイテムかと思ったのだがな。魔力が全く感じられん」
カリーヌの「土メイジを呼びつけましょうか？」との提案に公爵は首を横に振る。
「いや、この件は私ら以外に知らせない様にしておこう……。そうだ、エレオノールを急ぎ呼び戻すぞ。あの子は優秀な土メイジだからな」
二人にそう言って「これはお前が持っていなさい」と探査体をカリーヌに預けると公爵は長女へ手紙を書く為に執務室へと向かった。

アカデミーに勤める長女のエレオノールが帰って来たのは、公爵が手配した竜籠と共に手紙を送ってから三日後だった。公爵令嬢とは言え宮仕えの身である。駆け出し研究員の彼女が上司から休暇の許可を得る為にはそれだけ時間が必要だった。
「お嬢様、お帰りなさいませ」
竜籠から降りるエレオノールを、ヴァリエール家の執事、ジェロームが恭しく頭を垂れて出迎えた。
「皆様、翡翠の間でお待ちになられております」
エレオノールは「そう」と言って鷹揚に頷くと屋敷へと歩を進める。
「ほんと、お父様ったら用件も書かずに、ただ“急ぎ帰って来い”だなんて、一体全体何なのかしら。お陰であの上司から嫌味を言われるし、同僚は“またお見合い？”とか言うし、なんなのよ、もう！」
怒りのオーラを撒き散らしながらエレオノールは翡翠の間に到着すると、扉を開ける前に深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。父親だけなら別に問題無いのだが、執事が『皆様』と言ったからには母親のカリーヌも同席しているに違いない。流石のエレオノールもカリーヌだけには頭が上がらない。

淑女然とする為に気を落ち着けてドアをノックすると、中から「入れ」と入室を促すヴァリエール公爵の声がした。
ドアを開けると、そこには彼女の両親と妹が待っていた。
「お父様、お母様、エレオノール只今戻りました」
エレオノールは帰着の報告をしてドアを閉めると父親に挨拶の接吻をした。その時「急に呼び出して済まないね」と父親から労われた彼女は少し驚く。
そんなエレオノールを席に着かせると、公爵は妻に「サイレントを」と遮音の魔法を促し、この場に居る者以外に話が聞かれない様にした。
「お父様、一体何があったのですか？」
怪訝な顔で質問するエレオノールに、公爵はテーブルの上に置いてあった箱から正二十面体をした見慣れない物を取り出し娘に渡す。
「これは？」と聞く長女に公爵は「お前に手紙を出した日にルイズの部屋に落ちていた物だよ。土メイジに調べさせようにも、事を家族以外の者に知られるのは拙いと思ってエレオノール、お前を呼んだのだ。先だってディテクト・マジックで確認したが魔力は感じられなかったから、マジック・アイテムの類ではなさそうだ」と説明する。
公爵から差し出されたそれをエレオノールは恐る恐る受け取ると、土メイジ独特の感覚を使って調べ始める。目を閉じて手に持った物体に意識を集中して構造を探って行くと、うっすらと額に汗が滲んで来る。全員が息を詰める中、暫くして彼女は薄く目を開けると「信じられない……」と、やっとの事で口を開いた。
「この中には精緻なカラクリが組み込まれています。一つ一つが麦粒よりも小さな部品が複雑に組み合わされて……こんな物、見た事も聞いた事もありません。それに使われている金属も表面を覆うガラスの様な物も、私が知らない物質で出来ています」

＊　＊　＊

最初の映像が確認されてからマクロサイズ・ブリッジを拡大する実験は控えられていた。代わりに一日に数回、探査体が使用する三十ギガ・ヘルツの電波が通過出来る二センチメールのマクロサイズ・ブリッジを発生させて、ストレージ内にある映像情報を収集する事が優先されていた。探査体の活動限界である百二十時間をフルに使い、可能な限り向こう側の情報を得る為だ。

初日にルイズの父母が確認された後、探査体は箱の様な物に入れられてしまったらしく映像情報が入らなくなってしまった。ちなみに父母と姉のはっきりした映像を見たルイズが泣いてしまったのは言うまでも無い。

探査体から映像情報が入らなくなったからと言って、研究者と技術者達は手を拱いていた訳では無い。箱に入れられていても探査体との通信は出来る。ならば映像以外の方法で向こう側の様子を得られる物は無いかと模索した結果、探査体に内蔵した大気圧センサーで音声情報が得られる可能性がある事が分った。その後すぐ予備機を使っての確認が行われた結果、信号処理を行う事で音声記録が出来る事になったので、それを追加プログラムとして探査体へアップロードしたのが投入から三日後の事だった。

「父さま、母さま……」

懐かしい家族の姿と声を聞いたルイズは泣いていた。彼等の音声はヴィザーにより各言語に同時翻訳されていたがルイズにはそのまま聞かされていた。

ハルケギニア言語との翻訳ライブラリの作成はルイズの協力により作られていたが、今回の件で不明な表現や単語が多く出て来た事もあり、今後の懸案事項となった。

「エレ姉さま……ちい姉さまぁ……」

夢じゃない。迷い込んでから二年間、片時も忘れた事が無かった自分の家族がそこに居る。魔法が上手くいかなくて、いつも厳しい

課題をやらされていたルイズは、カトレア以外の家族から疎まれていると思っていた。しかし、探査体の前で吐露された家族の後悔と懺悔の言葉を聞いて、自分は愛されていたのだと気付く。
――会いたい――すぐには無理でも無事を伝えたい。ルイズはそれを思わず声に出していた。
「ルイズ、今なんて言ったんだ？」
ハルケギニアの言葉で語られたそれは誰も理解できなかったが、敏感に何かを感じ取った才人はルイズに聞き直したのだ。
「え？　あたし声に出してた？」
「ああ、多分お前んとこの言葉だと思うけど。お前の様子から見て、元気ですとか、会いたいとか言ったんじゃないか？」
ルイズは驚きの表情で才人を見ながら「お兄、何でわかるのよ？」と言うと、才人は「妹分の気持ちくらい分からんと兄貴面できないからな」と、ニカっと笑いながら答えると「それにしてもお前の部屋、推定で百平方メールとか広すぎだろ」と付け加えた。
そんな二人を隣で見ていたクラークは、はたと気付く。今すぐにでもルイズの無事を彼女の家族に伝えられるじゃないかと。それどころか向こう側とコミュニケーションが可能になるかも知れない。そう考えると彼は即座に行動に移す。
「ヴィザー、友永と私らのチームを呼びだしてくれ。場所はブリーフィング・ルーム。それと平賀教授達オブザーバー組にも連絡を頼む。用件はルイズ嬢の家族に関する事で」
才人とルイズは、いきなりヴィザーに指示を出し始めたクラークに驚いて、きょとんとした顔をして固まっていた。

「今回、探査体を送り込む事で向こう側の端点がルイズ嬢の実家、それも彼女の使っていた個室に出現している事が判明しました。また、彼女の発生させる宇宙間ブリッジは、そこに投入された物質を問題無く転位させる事が可能な事も確認できました。更なる実験と

調査は必要ですが、向こう側の端点がルイズ嬢にとって全くリスクの無い場所に出現しており転位そのものにも問題が無いのなら、普段着のまま彼女を送り出す事が出来ます。先だって計画されている様な小型宇宙船を送り込む必要が有りませんから、乗員を別宇宙に置き去りにするリスクを負う事も無く、我々としても好都合な状況です」

クラークは言葉を一旦切って、ブリーフィング・ルームに集まった面々を見渡す。

「ルイズ嬢だけを送るなら、基本的にヤヌスに設置されている設備だけで間に合う事は実験前から分かっています。但し、現状設備では定格出力でギリギリの線ですので、万全を期するなら干渉装置終段にある変調器出力の二十パーセント増加と、二次エネルギー貯留器の容量を倍に増やして余裕を持たせる事が求められます。その改修を行う前に現状設備で理論値通りであるかを確認する為の運転実験を行いたいのですが、向こう側の端点が住居内に発生する事からルイズ嬢のご家族に事前に注意喚起のメッセージを送る必要が有ると考えます」

クラークがそこまで言うと平賀教授が「とどのつまりは『増強するので予算くれ』と『ビデオレター送ろう』だな？」と呆れた様子で問うと、クラークは悪びれもせず「はい、その通りです」と良い笑顔で答える。まったく問題児を寄越しやがって、と平賀教授はクラークを送り込んで来たＵＮＳＡに籍を置く知人に内心悪態を吐く。そして溜息一つ。

「プロジェクト最優先の目的はルイズ嬢を無事に帰還させる事だからな。小型宇宙船と乗員の訓練が不用になると言うなら、その浮いた分をＵＮＳＡから出してもらおうじゃないか。ヴィザー、ＵＮＳＡのチャールズ・ウィロビー少佐に次の伝言を頼む。“グリニッジ標準時で明日の十四時、ニューロ・カップラでヴィザーに繋がっていろ。優秀な人材を寄越してくれたお礼を言うついでに尻の毛まで抜いてやるからな、覚悟しとけ”以上だ」

平賀教授とウィロビー少佐のニューロ・カップリングを使った、本人達曰く『友好的で穏やかな』会談が終わってから四日後、ＵＮＳＡの宇宙船によってクラーク達が注文した物が届けられた。
「結局は民生品を使う事になったな」と技術者の一人がコンテナを開けて中身を確認する。
「下手に特注で制作したら納期がかかるだろ？　今回の目的なら、これで十分」
彼等がコンテナから取り出した物は個人向けコンピューターとアウトドアでよく使われる太陽光発電ユニット、そして小型大容量キャパシタと呼ばれる蓄電装置だ。
発電ユニットは折り畳み式で広げると五メートル四方の大きさになる。地球の中緯度地方であれば最大五百ワット時の発電が可能。キャパシタは厚さ十センチメートルで四十センチメートルの正方形をしており、小型ながら二百キロワット時の容量を持つ。ヤヌスに滞在する技術者達は発注したその日に取り扱い説明書を入手し、分かり易く簡潔に再編集した。それをルイズが知識面で才人の助けを得ながら、手書きでハルケギニア語へと翻訳した。
「問題はコンピューターと言うか映像再生と記録の説明か……っと、付属品はよし」
雑談を交えながら彼等は員数を確認して行く。
「その件は問題無しだな。ルイズ嬢に向こうの言葉で実演して貰って録画しとけば良いだろう」
「初動の操作だけイラスト付きで書いておけば良い訳か。基本、アイコンでの操作だしな……って、発電ユニットとキャパシタも、わざわざ取説を書き起こさないで、映像での操作説明で良かったんじゃないのか？」
そう言われ、取り扱い説明書の作業に携わった技術者の手が、ぴたっと止まる。

「あ……。ま、まあ、良いんじゃないか？　バッテリー切れたらコンピューター使えなくなるからさ、印刷媒体で用意しておけば安心だろうし。それより我等のボスがお待ちかねだろうし、さっさと荷物のチェックを終わらせよう」
　彼は誤魔化すように言うと相方に作業を促すのだった。

　その頃、ルイズは家族への無事を知らせるビデオ・レターを撮り終え、ヴァーユ号に戻っていた。いつもなら食堂に行って食事をしている時間なのだが、ルイズは今日の事で色々と考えてしまい、時間が過ぎるのを忘れていた。
　明日、こっちの人達がブリッジと呼んでいる【扉】を開いて荷物を送る事になっている。今の自分の気持ちが上手く家族に伝わるだろうか、自分がハルケギニアに帰る為に行われる実験についての事が正確に伝わるだろうか、家族から返事が来なかったらどうしよう等々、不安が心の中に浮かんで来る。でも――。
「考えててもしかたないわよねー」
　ふと、そう呟くと、何となく気持ちが楽になった気がした。あれ、最近あたしって考え方がお兄に似てきてない？　ええー、何かヤだな。このまま帰ると母さまに叱られそう。うん、そうよ。ちゃんとしたレディでなきゃダメなのよ。今からでもお作法を思い出して練習しとかなくちゃ。まずは――。
「ルイズー！　今日の晩飯のメニューに牛丼があるってよ。早くしないと無くなるぞ？」
　食堂に行く途中でルイズがまだ部屋に居る事に気付いた才人によってかけられた、間抜けな声による『牛丼』『無くなる』と言うキーワードによってルイズの細やかな決意は微塵も残さず吹き飛んだ。
「いやーっ！　お兄、なんでもっと早く教えてくれなかったのよ！」
　ルイズは淑女にあるまじき大声で才人に文句を言うと、脱兎の如く部屋を飛び出して食堂へバタバタと駆けて行くのであった。

＊　＊　＊

ルイズのビデオ・レターが収まったコンピューターその他一式二セット分とルイズが自ら書いた手紙の転位が無事に終わってから三日が過ぎた。毎日五回、通信に使用する波長より大きめのブリッジを短時間だけ接続させて確認が行われていたが、コンピューターが起動された様子は無く、最初に送り込んだ探査体のエネルギーも切れてしまっているので、向こうの様子を窺い知る事が出来ない。

ヤヌスの改修スケジュールの都合もあり、今日一回目のブリッジ接続で送ったコンピューターの起動が確認出来なければ、予備の探査体を送り込んで向こう側の端点がルイズの部屋に固定して出現している事を確認する手順になっている。

そして端点位置固定の確認が取れれば、翌日には当初予定されていた通りに、干渉装置の定格運転によるブリッジ接続が行われる。その時に出来る端点の大きさは概ね二メートルと予測され、装置の安定性確認も兼ねて一分間出現される事になっている。ルイズの家族が彼女のメッセージを受け取っていなかった場合、それを知らずに誰かがルイズの部屋に居た場合、非常に危険な状態になるかも知れない。

この三日間、全く応答が無かった事でルイズは不安になっていた。もし、家族が自分の手紙を見ても信じていなかったら……。それでも彼女は待つしか無かった。

「【我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力をつかさどるペンタゴン。我のさだめにしたがいし、“使い魔”を召喚せよ】」

いつも通り呪文を唱える。家族からのメッセージが届く事を信じて精神を集中する。そしていつも通り宇宙間を結ぶブリッジが接続される。

「端点間ブリッジの接続を確認。コンピューターの起動済みビーコンを検出。リモート操作により映像データーを確認、取得を開始し

ます。取得完了まで十五秒、振動モードを維持します。ルイズ、落ち着いて。完了まで頑張ってください」
ルイズはヴィザーの報告に心が乱れそうになっていた。それをＢＩＡＭで感知したヴィザーが彼女に声をかけたのだ。それを聞いてルイズは集中を取り戻す。
「完了まであと五秒、三、二、一。停止フェーズに移行。振動モード変更――ブリッジ消失。ルイズ、よく頑張ったね。映像は君のご家族からのメッセージだよ」
それを聞いたルイズは――信じてくれた！　信じてくれたんだ！
ああ、父さま、母さま、ありがとう――知らず知らず、鳶色の瞳から涙が溢れていた。

その後すぐに映像の再生が行われる。スクリーンにブロンドの髪をバックに流し、モノクルを嵌めた髭の男性が映ると、見ている全員がどよめいた。
「父さま……」
思わずルイズは呟く。以前より窶(やつ)れて老け込んでしまっているが紛れも無く自分の父親だ。
父は視線を少し横に移すと「もう良いのか？」と視線の先に居るであろう人物に声をかけた。
「はい、お父様。もう記録は始まっておりますわ」
聞き覚えのある声が画面の外から聞こえた。エレ姉さまが撮ってるんだ、と一番上の姉が真面目な顔でカメラを構えているのを想像してルイズは思わず頬が緩む。
「ルイズ、返事が遅れてしまったね。すまない。元気なお前の姿が見られて皆喜んでいる。わたしも嬉しかったよ」
音声はヴィザーにより翻訳されているが、精度を上げる作業は後回しにされている。きちんと伝わっているかは後でルイズに聞けば良いからだ。
「お前の手紙と、この不思議な道具を受け取った時、最初は信じら

れなかった。幻獣か亜人か、何か得体の知れない物の罠かとも疑い、開封する前にエレオノールに色々と調べさせたり、お前の筆跡を確認したりで時間がかかってしまった。ルイズ、無事で良かった。本当に良かった……」

声を詰まらせる父に、画面の外から「あなた……」と、また別な声がかけられた。今のは母さまだわ、でも――こんな、母のどこか辛そうな声色は以前には聞いた事が無かった気がする。父親はその声に、うむ、と答えて姿勢を正す。

「我が娘ルイズを保護して下さった異郷の方々も、娘と一緒に見ておられると思う。貴殿方には幾ら感謝しても足りず、それを表す贈り物を私共から貴殿方に送る手段を持たない事を非常に心苦しく思っています。トリステインの貴族としてでは無く、只々ルイズの父親として言葉でしか感謝を表せない非礼をお許しいただきたい。本当に、本当にありがとう」

誇り高いトリステイン貴族であるヴァリエール公爵は、まだ見ぬ異郷の人々に対して最大の敬意を込めて頭を下げる。その後、ルイズの父親からは実験での危険性を認識した事、ルイズの帰還を心待ちにしている事が伝えられた。最後に「また、お前をこの手で抱き締める事が出来る日を皆で心待ちにしているよ」と言う娘に対する言葉で締めくくられていた。

明けて翌日、いよいよ定格出力によるブリッジ発生実験が行われる。前日、部屋の中央に設置して貰う様に手紙を添えられた予備の探査体の転位が行われていた。実験中にブリッジ端点周辺で異常が発生しないかを確認する為だ。現場にはルイズの父親が監視に立つ旨の連絡が入っている。ついでに目をキラキラさせたエレオノールから地球の技術に関する書籍のリクエストがあったとか無かったとか。翻訳は一番下の妹に任せる気満々であるのを見て、ルイズは溜息をついていた。

そんなこんなで脱力する出来事もあったが、準備は整いルイズが

定位置に付いて実験が開始された。今回ルイズが長い時間集中する必要があるので、彼女に対するヴィザーの音声通知は開始時と終了時のみ行われる事になっている。ルイズの詠唱が終わり共通余剰空間で起きる超立方振動が検出され、その振動モードをブリッジ発生状態にする為に、ヤヌスに設置されている干渉装置が稼働を始め、こちら側の宇宙と向こう側の宇宙を繋ぐブリッジが出来る。ここまではいつもと同じだ。ルイズは目を硬く閉じ、自身の感覚の中に湧き上がっている或るモノに意識を集中している。

ヴィザーがフィードバック状態を監視しながら最終段の出力を上げて行くと、こちら側の研究者達が端点と呼ぶブリッジの出入り口が徐々に拡張されて行き、目視で確認出来る大きさまでになると、送り込んだ探査体からの電波が届き始めて向こう側を映像で確認出来るが様になった。

向こう側の端点は、エバーフレッシュが置かれている反対側に出現している。ここで映像にルイズの家族達がドア付近に陣取っているのが確認された。端点から距離にして十メートル近く離れている。探査体からのデーターに重力異常の兆候が見られない事からルイズの家族には影響が無いと判断され実験続行が指示される。

定格出力の六十パーセントを超えた辺りから、端点の形状が楕円から円に変化し始め、直径が一メートルを超え――その時、探査体からの信号が突然途切れた事をヴィザーが報告する。

「探査体からの信号が途切れました。原因は端点から発生する光子の周波数分布の変化による擾乱です。低レート通信に切り替えました。こちらの周波数に影響はありませんが、通信速度が遅い為に映像取得は不可能です。重力、温度その他については五十ミリ秒サンプリングでモニター出来ています。続行しますか？」

クラークは決断を迫られた。この場の責任者は彼だ。どうする？

ルイズの家族には危険性は伝えてあるし、重力異常や温度の上昇等の異常が僅かでも発生した場合は五十ミリ秒あれば緊急停止手順で安全を確保出来る。

「ヴィザー、続行だ。出力を上げてくれ」
クラークの決断を受けてヴィザーが出力を上げて行くと、端点は輝きと面積を増して行く。
「定格出力に達しました。全パラメータ安定。ルイズ嬢のバイタル、メンタル共に安定しています」
そうヴィザーが報告した時だった。ヴィザー内部のフィードバック・チェック・ルーチンが異常を検出する。超立方振動のモードが強制的にずれて行き不定状態に移行しようする。干渉装置の出力段は短時間であれば定格の百二十パーセントでの運転を可能にしているので、ヴィザーは出力とモード・パラメーターを調整し安定モードへと戻そうとした。この間に経過した時間は十ミリ秒未満である。ところが修正したにも係わらず振動モードは不定状態へとずれようとする。
ヴィザーは探査体から取得していたデーターのスキャンを行うと、赤外線データーの変化から人間の体温程の物体が移動していた事を見付けた。この事からヴィザーは向こう側の誰かが端点付近に居るか、若しくは転位状態に入った事を導きだした。
ヴィザーには、生命が危機に瀕た、若しくはそうなる可能性が有る場合、最善を用いてそれを守ると言うテューリアン特有の行動原理が組み込まれている。ヴィザーは躊躇無く干渉装置とジェネレータのリミッターを解除すると、ヤヌスの制御向けに割り振られている自身のリソースを全て使い宇宙間ブリッジの制御を始めた。異常検出からここまで二百ミリ秒が経過した。転位完了まで二秒弱の間、ヤヌスの限られた設備で安定を確保しなければならない。勿論、ヤヌスに居る全員の安全も確保した上でだ。
異常検出から千ミリ秒、終段の出力は既に定格の百五十パーセントを超えている。変調器の位相制御範囲からの逸脱を防ぐ為に、ヤヌス周辺に配置してあるブースターの出力も定格の百五十パーセントに達している。
振動モードは相変わらず危ういバランスの上で推移しており、い

つ崩れてもおかしくない状態だ。干渉装置の放熱が追いつかず、リング内の温度が急激に上昇する。ヴィザーはあと一秒保つか保たないかのギリギリの運用をマイクロ秒単位で行っている。
終段出力が定格の百八十パーセントを超えた。ジェネレータ出力は飽和し、予備キャパシタに蓄えたエネルギーで補う様に回路が接続される。
転位完了まで残り二百ミリ秒、ブースター出力は既に限界に達している。予備キャパシタのエネルギー残量もギリギリ。それでもヴィザーは最善の解を探しながらシステムを運用する。
残り八十ミリ秒、干渉装置終段で部品の一部が溶融し始める。
残り二十ミリ秒、ブースターの一部の応答が遅れ始める。
残り十ミリ秒、ヤヌスのヴィザーから独立たサブ・システムが警報を発する。
「生命体の転位を検出。干渉装置終段破損により振動、衝撃が発生します」
ヴィザーのアナウンスと同時に実験ステージ中央の端点が眩い光を発し、限界を超えた運転を強いられた干渉装置が溶損によって発生したガスが原因で次々と断裂して行く。
「何だ？　何が起きているんだ？」「リングで爆発が起きている？　サブ・システムが緊急切り離しを発令しているぞ！」「保安要員は全員の安否確認を！　急げ！」
騒音と振動で騒然とする中、実験ステージ中央で輝いていた端点が消えた。その消えた場所には本来何も無いはずだった。そう、何もあるはずが無かった。しかし、そこには――。
ルイズは振動に蹌踉(よろ)めき、キャノピーの内側に手を付いて体を支える。その時、彼女はステージ中央に人が居るのを見付けた。実験中は立ち入り禁止になる場所なのに、そこに人が居るのはおかしい。見ると二人も居るようで、何が起こったのか理解出来ずに呆然としている様である。その二人の姿を見てルイズは思わず我が目を疑った。

「ちい姉さま！　それにエレ姉さま！　なんで？」
――ヤヌスの設備をおシャカにしてまで転位して来たのはルイズの姉達だったのだ。

プレイアデス・オペレーション　（5）

未だ混乱が残るヤヌス、エレオノールとカトレアは医療区画の現在は使われていない集中治療室に一時的に隔離されていた。
転位直後の茫然自失となっている隙に、宇宙服を着込んだ保安要員によって緊急用簡易ポッド（人一人が入れる宇宙用の救命ボート。気密性が高い）に押し込められて連れて来られたのだ。
エレオノールは一見すると窓に見えるスクリーン越しに、明らかに怯えている一番下の妹に不機嫌丸出しの低い声で問いかけた。
「ねえ、ちび。ちびルイズ」
そんなエレオノールとルイズの様子を、椅子に座ったカトレアが面白そうに見守っている。
“ひぃっ！　姉さまったら怒ってる！”
スクリーン越しにエレオノールの迫力の有る不機嫌声を聞いたルイズは、姉得意のお仕置き『ほっぺたつねつね』を思い出して冷や汗を垂らしながら返事をする。
「ね、姉さま。な、なんでしょうか？」
「ねえ、おちび。私達はいつこの窮屈で殺風景な部屋から出られるのかしら？」
エレオノールは目を細めて眼鏡の奥から眼光鋭くルイズを見やりる。彼女の不機嫌ゲージが鰻登りのようで、このまま頭に角が生えて来たとしてもおかしくない。
「え、えーっと。先生、姉は“いつ部屋の外に出られる様になるのか”と言っているのですが……」
ルイズは横を向いてスクリーンの撮像範囲外に居るヴァーユ号から来た地球人船医に質問した。ちなみにテューリアンは姿を見せると色々と誤解が生じるだろうと言うルイズの進言によって、この場に同席していない。
この時の彼等の会話はエレオノール達には聞こえていなかった。

エレオノール達から見れば、いきなり『サイレント』の魔法がかかった様に感じられただろう。ルイズは何度か頷くとエレオノール達に向き直ると申し訳なさそうに言った。
「出られるけど出られない、だそうです」
「なによそれ。ちびルイズ、きちんと説明なさい！」
エレオノールの剣幕にルイズはビクっと固まってしまう。そんなルイズ達の様子を見て船医は苦笑しながらヴィザーを通しての会話を試みようとした。不明な単語が出て来たらルイズに意味を聞いて、ヴィザーに文脈が通る様に再構成して貰えば良い。彼はスクリーンの撮像範囲に入ると、ヴィザーに通訳をするように指示してルイズの姉達に話かけた。
彼の「はじめまして。お嬢さんがた、私の声と言葉が分かりますか？」と言った言葉は、ヴィザーがルイズから習得している語彙が少ない為に、エレオノール達には「はじめて。女の子の人たち、声のがと私、話し、事が分かるますか？」と聞こえた。その珍妙な話し方にエレオノールは眉を潜めた。
「違う、私話す、あなた達言葉。直す貰える、して欲しい」
エレオノールが「何かしら？」と考えていたら、カトレアが「あらあら」と納得がいった様子で手を叩いた。
「カトレア、どうしたのよ？」
「姉さま、よく見るとあの方の口の動きと言葉が合っておりませんでしたわ」
そう言われてみれば確かに何か違和感が有ったわね、とエレオノールは気付く。そんな彼女たちを横目で見ながら、船医はルイズと何か言葉を交わすと満足した様に頷いた。
「言葉、使い機械、私達変えるます。動く口の言葉だからズレる」
「今、こちらの先生は“私達は機械を使って言葉を変えています。だから口の動きと言葉がズレるのです”と言いました。こちらの人には、あたし達が使っている言葉が通じないのです」
船医の言葉に続けてルイズが説明すると、興味津々の様子で目を

輝かせたカトレアが返して来た。
「あらあら。じゃあ先程のは“私達の話す言葉はあなた方とは違います。間違いがあれば直してして欲しい”と言う事かしら？」
カトレアがそう言うとルイズは「ちいねえさま、凄い！　どうして分かったの？」と素直に驚く。そんな妹にカトレアは「うふふ。勘よ、勘」と言って微笑んでいる。
そんな妹達のやり取りを他所にエレオノールは一人に驚いていた。ハルケギニアの常識では、国によって訛りはあるが人間同士なら公用語が通じる。言葉が通じないのは独自の言語を持つトロル鬼等の亜人であり、人間同士で言葉が通じず意思の疎通が出来ないのは有り得なかったからだ。
しかもルイズの言を信じると今のは機械が通訳しているとの事。機械？　マジック・アイテムじゃなくて？　あんなカラクリの玩具（おもちゃ）でそんな高度な事が？
そんな事を考えていたエレオノールの思考をカトレアの声が断ち切った。
「まあ、ルイズ。あなたはこちらの言葉を覚えたのね。凄いわ」
「カトレアにルイズ、今その話は後回しにして。ルイズ、先に私達がいつまでここに閉じこめられてなきゃいけないかを教えなさい！」
エレオノールは脱線している自分の思考と妹達の会話にイライラして必要以上に大声を出す。それを聞いたルイズは涙目になりながら一番上の姉に懇願した。
「あ、姉さま、落ち着いてください。先生に聞きながら説明しますから」
そんな二人をカトレアは「あらあら、二年も会ってないのに変わらないわね」と微笑みながら見ているのだった。
そんなこんなでルイズは涙目になりながらもヴィザーと船医の助けを借りて何とか姉達への説明を終える。すると話を聞き終えたエレオノールが確認の為に口を開いた。

「少し理解出来ない事もあるけど……要するに、ここは“ヤヌス”と言う場所で、この近くに停泊している“うちゅうせん”でチキュウと言う乗り物まで移動して、その“うちゅうせん”と言う所まで行くのに三日かかると。それでチキュウに着いても私達が悪い病気に罹(かか)らないように暫くは外に出られない。それで間違い無い？」

この時点でエレオノール達は“うちゅうせん”と言う物は、彼女達がよく知る空に浮かぶフネの様な物だろうと思っている。更にルイズが宇宙空間や惑星などについては話が長くなると思って説明を省いていたので、二人の姉はヤヌスもチキュウも地名か何かだと考えていた。

「それで故郷(くに)へはいつ帰れるのかしら。あなたは一ヶ月後って言ってたわよね？　こちらにはフネや馬車が無いのかしら」

異なる世界と言う概念がよく飲み込めていないエレオノールは、どうせロバ・アル・カリイエよりは遠いだろうが、時間はかかってもフネや馬車を使った旅で帰れる様な距離と考えていた。それを聞いたルイズは、姉にどうやって宇宙間移動の事を説明しようかと頭を抱えた。ルイズ自身も難しくてよく分かっていないのだ。

そんな遣り取りをしている時に、ルイズはふとここに来る前に「被害規模が大きくて修理にどれだけの日数が掛かるか判らない」とクラークが言った事を思い出した。今は彼を筆頭にプロジェクトの全員はヤヌスの被害状況調査に忙しく、才人まで雑用で駆り出されている有様だ。

お兄がここに居れば、ちょっとは説明も楽だったかしら。でも今は皆が忙しいんだし、あたしだけで何とかしなくちゃ、とルイズは自分に喝を入れる。

「この事故で機械が壊れてしまって、いつ帰れるようになるか分からないらしいです。それに『扉』以外では帰れないんです」

そこまで言った時、ルイズはヴィザーから、今回の騒動の元凶は姉達二人が『扉』を通って来た事にあると聞かされていたのを思い出した。

「そう言えば姉さま、どうして『扉』を通ったのですか？　わたしは危険があるかも知れないから近付かないでくださいって、しつこく言っておきましたよね？」
　ルイズがそう言った途端に、それまで居丈高だったエレオノールの顔色が、さあっと変わる。
「じ、じじ事故よ。そ、そう。ちょっとした間違いね」
　どもりながら言うエレオノールは明後日の方向を見ながら目を泳がせている。やはり同じ血が流れているのだろう、ルイズと同じ様な分かりやすい反応をする長女。それを見ていたカトレアが微笑みながら長女の威厳に止めを刺した。
「ルイズ、エレオノール姉さまったらね、『扉』が現れるとお父さまとお母さまが止めるのも聞かずに興味津々で近付いて行ったのよ。ねえ、姉さま？」
「カ、カトレア！　あなたっ！」
　カトレアの暴露に焦るエレオノールと、それを聞いて胡乱な目つきになるルイズ。姉妹の力関係が逆転した瞬間だった。
「姉さま、詳しく話していただけますか？」
　ルイズは笑顔でそう言ったが目が笑っていない。彼女は八、九歳とは思えない程の黒いオーラを纏い、突き破らんばかりの勢いでモニター越しのエレオノールに詰め寄る。
　エレオノールはその迫力に負けたらしく諦め気味に事の顛末を話始めた。

＊　＊　＊

「カトレアの話だと、この辺りなのよね」
　エレオノールは帰って来た翌日からルイズの部屋を調べていた。何か手掛かりになりそうな痕跡が残っていないか、それこそ目を皿の様にして捜しているが見つからない。せめてカトレアがアレを見付けた直後だったら何か分かったかも知れないのに、という悔しさ

に彼女は下唇を噛む。
　エレオノールがアカデミーに入ったのは学院に入学した頃から進路として志望していた事もあるが、本当の理由は別に有った。
　一つはルイズが失踪して以来、憔悴し切ってしまった両親を見ているのが辛かった事。ルイズに対してダダ甘いだった父がそうなるのは分かる。だが、あの如何なる時も厳しく毅然としていた母までが、始祖に対する祈りと懺悔の毎日を送る事になるなど誰が想像出来ただろうか。
　彼女自身も母に倣い、ルイズには行儀や作法などについて厳しく躾るようにしていた。魔法の才能に乏しい妹が、せめて貴族として恥ずかしく無い立ち振舞いや心構えを身に付けられる様にと、それが彼女に対する愛情と信じて。
　なぜ、幼いルイズが「ねえさま、ねえさま」と微笑みながら駆け寄って来た時に、カトレアの様に優しく抱き締められなかったのだろうか。
　なぜ、何度も魔法を失敗して目に涙を浮かべながらも練習をするルイズに、強い口調で失敗を責め立てる様に言ってしまっていたのだろう。
　そんな幾つもの『なぜ』がエレオノールの心の中に刺さったまま、抜けない棘となって痛みを与え続けている。
“アカデミーになら何か、ルイズを探し出す手懸かりになる資料なり何なりがあるかも知れない”
　これが、エレオノールがアカデミーに入ったもう一つの、そして最大の理由だった。だが公爵家令嬢とは言えアカデミーでは彼女は下っ端研究員、彼女が求める様な資料の閲覧が許可される筈も無く日々を悶々と過ごしていた。
「やっぱりダメね。これだけ日が経ってしまうと何も感じられないわ」
　何も掴めない事にエレオノールはがっくりと肩を落として呟くと、彼女は部屋の出入口へ向かおうとした。

その時、視界の隅に何かが映りエレオノールは反射的にそちらに目をやると「あっ…」と言ったきり言葉を失った。彼女の視線の先には直径十サント程の『銀色の何か』が床から一メイルの高さに浮かんでいる。

“サモン・サーヴァントの扉？”

咄嗟にエレオノールが思い浮かべたのが使い魔召喚の時に現れる『扉』だった。

なぜ『扉』がこんな所に現れるのだろうか、誰かが使い魔を呼び出そうとしているのだろうか等と軽くパニック状態に陥っている彼女の目の前で、銀色に輝くそれは一メイル近くの大きさにまで拡大すると一層輝きを増して行く。

それを見たエレオノールが思わず「ひっ！」と上擦った声を発てて後退りしたその時、扉から何か灰色をした四角形の物が競り出して来る。

「な、何なの……何なのよ……」

わなわなと震えながらもエレオノールはそれから視線を外さない、いや、外せない。そんな彼女にお構い無く『扉』から出て来た灰色の何かは、ごとん、と音を発てて床に落ちた。と、同時に全く同じ形をした物が、また『扉』から競り出して来る。

何が起こっているのか理解出来ない。幻獣や亜人の仕業？　妖精の悪戯？　そんな事が頭に浮かび思考が纏まらないでいる。

ごとん、と二つ目の『灰色の何か』が床に落ちた音が響くと、エレオノールは、はっとして我に返った。あの『扉』はいつの間にか消えており、彼女は慌ててディテクト・マジックを唱えたが結果は芳しく無い。

「あれだけの『扉』なのに魔力の残滓（ざんし）が全く感じられないなんて……」

エレオノールは力無く横に頭を振ると、床に落ちている灰色をした四角形の物に対してもディテクト・マジックを唱えてみる。

「やっぱり、と言うかこちらからも魔力を感じられないわね」

彼女はそう呟いて溜息を一つ吐くと、『扉』から出てきた物に近づき手を触れようとして思い留まる。エレオノールは“まずはお父様達にお知らせするべきね”と考え、今起きた事を報せる為、ルイズの部屋を後にして父が居るはずの執務室へと足を向けた。

エレオノールが『扉』を目撃してから二十分後、家族全員がルイズの部屋に集合していた。

「これが『扉』から出て来たのかね？」

床に落ちたままになっている灰色の四角い箱状の物を見ながら、ヴァリエール公爵がエレオノールに問い掛ける。

「はい。立て続けに二つ、それが出てまいりました。現れた『扉』は使い魔召喚の物に似てはおりましたが、消失した後に魔力の残滓が残らない不思議なものでした」

エレオノールは先程、父の執務室でした説明を繰り返す。

「その二つの物についてディテクト・マジックで調べてみましたが、やはり魔力や魔法の類は簡易られないのでマジック・アイテムでは無いと思います。それ以上は何も分からず終いで……」

最後は消え入りそうな声で、力無く項垂れるエレオノールに公爵が慰める様に話かける。

「エレオノール、自分を責めてはいけないよ。今回のこの事柄は訳が分からない事ばかりだ。しかし、もしかしたらルイズが失踪した事に何かしら関係がるのではと私は思っている。さて、この箱だが……」

公爵は鋭く目を細め、灰色をした箱状の物を見つめて言葉を続ける。

「どんな危険があるか分からないからな。あまり得意ではないが私が探ってみよう」

彼の妻と娘達が「あなた！」「お父様！　無茶はお止め下さい！」と抗議の声を上げるが公爵は「お前達は外に出ていなさい」と毅然として告げた。

「もし何かあったらと思うとな。私はこれ以上、家族を失いたく無いんだよ。分かっておくれ」
そう言うと彼は有無を言わさず妻と娘達を部屋から締め出して扉を閉めた。
「二年間か。調べても祈っても嘆いても、何も分からず何も起こらずだったのに、今更だな」
公爵は誰に言うでも無く呟くと、床に転がる灰色の物の一つに『レビテーション』を唱えて宙に浮かせた。そして慎重に自身の手が届く所まで引き寄せ、浮かばせたまま検分を始める。
「……これは？」
検分を始めてすぐ、公爵の目にあるモノが留まる。灰色の箱状の物体に付いている取っ手と思われる部分の近くに、その文字が書かれた紙切れは貼り付けられていた。
それを読んだ公爵が動揺して集中が切れてしまった為に、灰色の物体―ＵＮＳＡで標準的に使われている大きめのスーツケースなのだが―は、懸かっていたレビテーションが解かれて床に落下してしまう。
公爵が見付けた紙には、ちんまりとした癖のある文字でこう書かれていた。
『こちらを上にして、ふちにある赤い丸の所を押すと開きます。開けたら中に入っている本を読んでください―ルイズより―』

＊　＊　＊

「それから二日間、寝る時間を削って『扉』から出てきた物に危険が無いかを調べて、ルイズの書いた説明書を読んで。手紙と説明書の筆跡はカトレアが調べたわ。筆跡が間違いなくルイズの物で、現れた物に危険が無いと判って、やっと“こんぴゅうたぁ”と言ったかしら、あれを動かしたのよ」
エレオノールはそう言って咽を潤す為に、用意された飲み物に口

を付けると怪訝な顔をした。
「何よこれ、ただの水じゃない。せめてワインを用意させなさいよ。何で貴族の私がこんな目に」
ぐちぐちと文句を言い始めた姉に対して、ルイズは間髪入れずに言う。
「姉さま、後で説明しますけど、ここで貴族だと言っても意味がありませんわ。それから宇宙船に移って簡単な検査を受けた後なら、こちらの物を食べても大丈夫になるそうですから今は水で我慢してください。あたしなんてこちらに来たばかりの時は言葉は通じないし、訳が分からなくて凄く怖い思いをしたし、知ってる人なんて誰も居なくて心細くて何日も泣いていたし、何週間も味気ない食事だったし、それに比べれば幸せじゃないですか。それで、どうして姉さまは『扉』に突っ込んだのですか？」
愚痴を交えながら一気に捲し立てるルイズの言い様に、エレオノールは妹がこんな物言いをする性格だったかしらと自問していると、カトレアが屈託の無い笑顔で空気を読まず話に割り込んで来る。
「そう言えばルイズの姿が“こんぴゅうたぁ”に映った時、お父さまは仕方が無いとして、お母さまと姉さままで泣き出したのは驚きましたわ。ねえ？　エレオノール姉さま」
いきなり話を振られて「へっ？」と間抜けな声で応えてしまうエレオノール。
そんな姉達の様子を見ていたルイズは何だか懐かしく嬉しい気持ちになっていく。
「ちいねえさま、それもう少し詳しく教えて！」
ルイズの声に二人の姉はスクリーンを見やると、そこにエレオノールとカトレアが久しく目にしていなかった虚飾の無い末妹の笑顔があった。
ヴァリエール三姉妹による、きゃあきゃあころころという賑かな

会話は一先ず置いておき、エレオノールが『扉』を潜る直前までの経緯について話を進めよう。
　ルイズからの所謂ビデオレターを受け取った時のヴァリエール公爵の喜びようは凄かった。二年間も行方不明で、その生死すら判らなかった娘から姿と声付きで連絡が有ったのだから当たり前だろう。
　エレオノールが返事を返す為に撮影方法を理解しようとしている間も、父が何度もルイズの姿を映しだしてくれと頼んで来るので、面倒くさくなった彼女は予備として送られて来たもう一台を父に預ける事にした。幸い再生操作自体は非常に簡単だったので、中年期の終わりに差し掛かった彼女の父でもすぐに覚えられのは、このところ睡眠不足気味のエレオノールにとっては有難い事だった。
　とは言ってもエレオノールのやる事が減る訳では無い。ルイズの書いた説明書や映像での説明には言葉が不足している部分が多々有り、初見では“こんぴゅうたぁ”と言うカラクリの操作方法が非常に分かり難かったのだ。エレオノールは、せめて父母が一々自分に頼らなくても“こんぴゅうたぁ”が操作出来るようにと、説明書の補足を書いたり、操作をしながらの説明を“かめら”で撮影したりしていたのだ。ちなみにこの作業は誰に命じられたと言う訳で無く、エレオノールが自分の判断で勝手にやっていた事である。
　そんな訳でエレオノールは寝不足と疲労が溜まりに溜まっており、実験が行われる当日の彼女は朝から異様なテンションとなっていた。

「それでね、姉さまったら『扉』が現れて二メイルくらいの大きさになったと思ったら、お父さまが止めるのも聞かないで、何かに取り憑かれた様に近付いていったのよ」
　カトレアがルイズに、その時のエレオノールの様子を説明する。
それに続けてエレオノールは開き直って自棄(やけぎみ)気味に言う。
「あの時は寝不足と疲れで少しおかしくなってたのよ。それに駆け出しとは言え私はアカデミーの研究員よ。あんな珍しい事が目の前

で起きていて、それを調べないなんて考えられないわ」
「あの、ちいねえさまも姉さまと一緒に『扉』に近付いたんですか？」
そう言えば、なぜカトレアも一緒に来てしまったのだろうと思ったルイズは、その疑問を口にした。
「わたしもね、お父さま達と同じで最初は姉さまを止めたの。でも姉さまが近付いても、何も起こらなかったし、それに『扉』の向こうにルイズが居るんだなって思ったら、無理だと分かっていても、姿が見えないかなーって」
笑いながら「わたしったらバカよねぇ」と言うカトレアに、ルイズは内心呆れたていた。そんなルイズの心を見透かしたかの様にカトレアが続ける。
「そうそう、姉さまがどうして『扉』に入ったかの話よね。姉さま、続けて良いかしら？」
「カトレアに言われるくらいなら、私から話すわ」
諦めモードに入ったエレオノールは、一度溜息を吐くとその時の様子を話し始めた。

エレオノールは現れた『扉』を表から裏から確認していた。もともと好奇心が強くて研究者気質でもある。ルイズに話では、この『扉』は彼女の魔法を機械が補助して作り出しているらしい。父母の心配を余所に、一体どういった原理なんだろうかとエレオノールは『扉』を調べる為にディテクト・マジックを唱えようとした。その時、彼女の背後から「姉さま」とカトレアが呼びかける。その声にエレオノールは反射的に振り向くと、そこにはにこやかに笑うすぐ下の妹の顔があった。
「姉さま、この向こうにルイズが居るのですね」
カトレアは向こう側に居るであろう妹の姿を探すように『扉』を見つめた。

「そうね、信じられない様な話だけど、確かにルイズはこの向こうに居るのよね」
カトレアにそう応えたエレオノールは、今一度『扉』の方を振り返る。

「それでね、その時に姉さまったら、ご自分でスカートの裾を踏み付けて『扉』の方に倒れ込んでしまったの。わたしは慌てて姉さまの手を掴んだけど、一緒に引っ張られて結局巻き込まれてしまったのよね」
のほほんとカトレアにオチを言われてエレオノールは盛大に溜息を吐いた。
「このドレスがいけないのよ。大体ね、いつも私はアカデミーで動きやすい膝丈のスカートなのよ。ほんと、裾の長いドレスなんかパーティーか帰省した時くらいにしか着ないんだから、ちょっとした事で踏んでしまうのよね」
スカートの裾を摘みながら見当違いの文句を言うエレオノールを見て、今度はルイズが盛大な溜息を吐く。
「姉さま……バカでしょ……」
ルイズが発した言葉は日本語だったので、そのままならエレオノールに伝わる事は無かった。ところがお節介にもヴィザーがそれを通訳して伝えてしまったのだ。
「ちびルイズ、今なんて言ったの・か・し・ら？」
ルイズはしまった！　と思ったが後の祭り。こうなったらと思い開き直った。
「バカだからバカって言ったんです！　近付かないでって言っておいたのに無視して近付いて、ご自分の不注意で『扉』に突っ込んで、その上ちいねえさままで巻き込んで、こっちにある“かんしょうそうち”を壊す事になって、どんだけ人様に迷惑かけてると思ってるんですか！」

似たもの同士姉妹の口喧嘩がスクリーン越しで勃発するも、真ん中のカトレアは「あらあら、困ったわね」と、のほほんと笑って見ているのだった。

プレイアデス・オペレーション　（5）（後書き）

※１１／１６　ハルケギニアの言語云々の所を修正。プロローグで公用語って使ってるのに何やってるんだ俺。凡ミスです。

プレイアデス・オペレーション　（6）

ルイズとエレオノールによる不毛な姉妹口喧嘩の直後、エレオノールとカトレアはヴァーユ号へと移送された。勿論、緊急用簡易ポッドに入れられて隔離された状態での移動となったので、二人とも外の様子を見る事は叶わなかった。

ヴァーユ号に到着後、彼女達は船内の医療区画へと移されて、そこで簡単な検査を受ける事になったのだが……。

「な、ななによ、その変な器具と針は！　まさか、そそそそれを刺す、とかじゃないでしょうね？」

どもりながら裏返った声を出しているのはエレオノールだ。本人は気丈に振る舞っているつもりなのだが、所謂『ビビっている』状態なのが丸分かりだ。

「あら、姉さま。少し血を採るくらいで怖がってるんですか？　あたしなんか何回も採られたのに」

顔色を悪くしているエレオノールに対して、子供サイズの宇宙服を防護服代わりに着込んだルイズが勝ち誇った様に言う。彼女がこの場に居るのは、スクリーン越しで通訳するよりも、その場で直接応対して貰った方が良いだろうと言う意見が通った事と、彼女自身が望んだ事のよる。姉に対してルイズの気が大きくなっているのは、宇宙服を着ている事で例の『ほっぺたつねつね』攻撃を防げているからに他ならない。

「血なんか採ってどうするのよ。まさか……」

エレオノールの脳裏にアカデミーで知ったある事柄が浮かぶ。スキルニル。小さな人形の形をしているが血をかける事で、その血を持つ人物そっくりに化けるマジック・アイテムである。

「姉さま。先生が言うには、血を採って調べる事ができなければ、帰るまでずーっと閉じ込められたままで、美味しい物も食べられないまま、だそうです。ちいねえさまはもう済ませちゃいましたよ？」

そう言われてエレオノールはカトレアの方を見ると、彼女は既に採血を済ませて肘の内側を押さえながら、ヴィザーの通訳で担当した看護師と何やら雑談をしている。それを見てエレオノールは諦めたらしく、渋面になって黙って腕を差し出した。採血中、彼女は目を固く閉じて「私は長女、私は長女なんだから」とブツブツと呟いていたが、採血を終えた時に涙目になっていたのはご愛敬。そんなエレオノールを見て、ルイズは幼い事から抱いていた一番上の姉に対するイメージが変わって行くのを感じていた。

エレオノールとカトレアは、血液検査の前にＴＮＭＲＩによる画像診断を受けており、その結果カトレアには心臓の異常が有る事が判明していた。

ヴァーユ号には複数の診療科目を履修（りしゅう）した医師が船医として何名か乗船しており、また医療専門のコンピューターを始めとした高度な医療機器が搭載されている。余程の事が無い限りは殆どの疾病（しっぺい）や怪我（けが）については船内で対応可能な体制になっている。また乗船している医師達では判断が出来ない事例については、ｉ－スペースによるｈ－リンクを通じて地球に居る専門医に相談して指示を仰ぐ事も出来る。カトレアの持つ異常についての診断が早かったのはこの為である。

カトレアが患っているのはファロー四微症（しちょうしょう）と診断された。これは先天的な心臓の奇形で、右心室と左心室の間にある壁に穴が開いている心室中隔欠損、大動脈の先天的な転位（本来とは違う場所に繋がっている）による静脈血の動脈への流入、肺動脈弁の狭窄（きょうさく）による血流異常、右心室壁の肥大の四つを合併している疾患である。地球では患者の殆どが乳幼児期に手術を受ける事で完治してしまう物だ。カトレアの場合、特に一番目と二番目について酷い状態である事が確認された。

現状、破損した超立方振動干渉装置の復旧の目処が立っておらず、カトレアが帰還出来る様になるその時まで彼女の生命を保障するに

は手術を含めての治療は必須だろう、と医師達は判断している。そしてその治療方針について、地球に居る医工研の宝条とヴァーユ号の担当医が打合せを行なっていた時、カトレアについて新たに問題が見つかったとの報告が入る。血液検査の結果、カトレアに自己免疫疾患を示す幾つかの抗体異常が見付かったのだ。

それを聞いた宝条は「地球にある高度医療施設でないと治療は難しい」と考え、素早く行動に移る。カトレアを出来るだけ速く地球に連れて来て治療を開始するには、直ぐにでもヴァーユ号で地球に向けて出発させるのが時間的に最短でベストな方法だ。

しかし、どれ程のダメージを受けているか分からないヤヌスの被害状況を多くの研究者や技術者が調査している現状で、彼等の避難先であり宿舎でもあるヴァーユ号をカトレア一人の為に動かす事は出来ない。

そこで宝条はヤヌスに居る平賀教授に連絡を取り、彼の伝手（つて）を頼る事で次善の策としてＵＮＳＡ所属の宇宙船を手配する事に成功する。地球とヤヌスの軌道は三光日ほど離れており光速で航行する宇宙船で往復に六日を要する。通常空間から分離された状態で航行する宇宙船では相対性理論は適用されず、船内での経過時間は数時間ほどとなる。乗船する者にとってはこの時間と宇宙船がヤヌスに到着するまでの日数が正味の待ち時間となる。その間はカトレアに対症療法的な処置を行う事になるのだが、問題は手術や治療の事を含め、これらの事をカトレア本人とその姉であるエレオノールにどう説明するかであった。例え別の宇宙からの来訪者であってもインフォームド・コンセントは行われるべきだと彼等は考えていたのだ。

「つまり、語彙（ごい）が少ないので伝えきれない、と言う事か」

宝条と話をしていた平賀が確認の為に問い直す。二人は現在、パーセプトロンによるｉ－スペースを通したニューロ・カップリングを使ってヴィザーの作り出す仮想現実内で顔を合わせて話をしている。

「語彙の収集に関しては今までルイズ嬢しか居なかったからね。年齢を考えると圧倒的に少ないんだよ」
宝条はどうしようも無いと言う風に両手を上げ、そして話を続ける。
「手っ取り早く語彙を増やすにはヴィザーから提案された方法を使うしか無いと思うが、これについては長女の、名前は……エレオノール嬢だったか、彼女の協力が不可欠になる」
「ああ、その方法は俺もヴィザーから聞いている。技術的にもテューリアン、いやヴィザーにとっては枯れた物だから危険性は無いだろうが、果たしてあのお嬢さんが了承してくれるかだな」
平賀の懸念に「その辺りは君の息子さんとルイズ嬢に任せればなんとかなるんじゃないかと思うが、どうかな？」宝条は軽い調子で返した。
二人が話していたヴィザーから提案された方法とは、エレオノールの表層意識領域からニューロ・カップリングを使い直接に言葉とその概念に関する部分を読み取り、彼女達が使っている言語の翻訳ライブラリを増やそうと言うものだ。勿論プライバシーの問題があるので他の意識領域についての読み取りを行わない。
ＢＩＡＭを使ったルイズの脳内活動パターンの解析結果から、彼女の大脳の活動パターンが地球人類と大差無かった事から、エレオノールをヴィザーの仮想現実に接続する事は復変調系の微調整を行えばそう難しい問題では無いとされている。では何故ルイズで実証しなかったのかと言えば、単に『十五歳未満の者のニューロ・カプラによるヴィザーへの接続を禁止する』という法律が日本に存在していたからである。
さて、宝条からの無茶振りによってエレオノールの説得（？）を任されたルイズと才人であるが、ヴァーユ号の食堂でお菓子を摘まみながら、どう話をしたものかと二人して悩んでいた。
「なあ、ルイズ。お前の一番上の姉ちゃんってさ、どんな人なんだ？」

才人に問われたルイズは暫く瞑目して考える。
「んー。キツイ性格？　でも今はよくわかんない。なんかヘタレっぽくなってるし」
「何だよそれ……。まあ二年も会ってないんだから、しょうがないか。他に何か無いか？　好きな事とか趣味とかさ、何でも良いから」
「好きな事ねぇ……。あ！　そう言えば何か珍しい道具を見付けると必ず父さまにおねだりしてたわ。それで買ってもらうと、ご飯も忘れて夢中になって部屋から出てこなかったり」
　それを聞いた才人は暫く腕を組んで考えると、あちら側との何回かのやり取りでエレオノールに関して耳にしていた事を才人は思い出してルイズに聞いてみる。
「そういやビデオレターの返事で、こっちの色々な本が欲しいとか何とか言ってたんだよな？」
「うん、言ってたわ。姉さまのあの感じ、父さまにおねだりしてた時と一緒」
「ほう、面白そうな話をしてるじゃないか」
　突然、背後から彼等の話に才人の父親が割り込んで来た。いつの間にか食堂に来て才人達の話を聞いていたらしい。
「父さん、いつの間に来てたんだよ。ほんと心臓に悪いから」
　父親は「すまんな」と笑いながら才人の隣、ルイズから見て斜め前に座る。
「ルイズのお姉さんは凝り性で好奇心が強いみたいだな。なんだっけ、あちらで言う【アカデミー】とかで研究員をやっているんだって？」
「あたしが居なくなった後に入ったんだって。アカデミーで何をしてるか聞いてないから分かんないけど……」
　そう応えるルイズの言葉に堅苦しさは全く無い。平賀家に於いてルイズが家族同然の扱いを受けていた為だろう。蛇足だが、地球での生活でルイズには仲の良い友達が出来ていたりするが、その話は別の機会に書かせて貰う事にする。

「なあ、才人。確か小難しい事でもお前が理解できればルイズもそれを憶えられるんだよなぁ」
何か考えがあるらしく平賀教授が才人に確認する。
「うん。憶えると言うかなんと言うか……」
そう言いながら才人がルイズの方を見て「どうなんだろな？」と話を振ると、ルイズは「えーっと、“分かっちゃう”のよね。頭の中にぱぱっと浮かぶの」と何でもない事の様に応える。
平賀教授は何かを納得した様に一人頷くと、冷めてしまった飲みかけのコーヒーを一息に飲み干す。
「よし、そんじゃ二人とも、今から俺と一緒にルイズのお姉さんを説得しに行くか」
彼は子供達にそう声をかけて立ち上がる。すると才人が「ちょ、父さん。いきなり訳わかんないよ」と抗議の声を上げるが、彼の父は「いいから付いて来い」と無理矢理に二人を連れて食堂を出たのだった。

食堂で才人達の所に平賀教授が乱入する少し前、エレオノールとカトレアは医療区画の隔離エリアにある病室に案内され、そこで寛いでいた。ヤヌスで押し込められていた部屋同様に窓も装飾も無い殺風景な所だが、姉妹二人きりになれた事で漸(ようや)く落ち着いて来たエレオノールは或る違和感に気付いていた。
「姉さま、何かおかしく感じませんか？」
どうやらカトレアも感じているらしく、首を傾げながらエレオノールに聞いて来る。
「そうね。こちらに来てから色々有って考える間も無かったけど、こうやって落ち着いてみると確かに変な感じがするわね」
どうにも上手く説明が出来ない、漠然と感じる違和感。その正体が分からずエレオノールの心中は穏やかで無い。考え込む姉の姿を見ながら、その心情を汲み取ったかの様にカトレアが呟く。

「何かが抜けてしまった不安感と言いますか……。はっきりと分かりませんが、わたしにはそんな風に感じられます。姉さまはどう感じておられるの？」
そう言われてエレオノールは、“感じないのだ”と気が付く。
彼女は優秀な土メイジであるが故に、普段から触れる物に関しての性質を土メイジ特有の感覚で無意識の内に感じ取り認識している。
ところが、こちらに来てからの事を思い起こしてみると、初めて手にした物で溢れているのにその性質を感じ取っていない、いや感じ取れていない。
まさかと思いエレオノールは目の前にあるテーブルに手を置いて意識を集中してみるが、予想通り何も感じ取れなかった。
「姉さま？」
カトレアはエレオノールの様子に不安を感じて声を掛けたが、姉はそれには応えず今度は黙って杖を取り出すとテーブルの上にあるカップに対して練金のルーンを唱えた。しかしカップには何の変化も現れない。
「そんな……」
魔法が発動せず、ルーンを唱えた時に必ず感じる魔力の流れが無かった事に、エレオノールは絶句する。俄（にわか）には信じられず再度ルーンを唱えてみるがやはり結果は同じ。
「どういう事なの？　確か『扉』はルイズの魔法で……」
そこまで言ってエレオノールはルイズの魔法が失敗ばかりだった事を思い出した。そして彼女の小さな妹が今回どうやって『扉』を現出させていたのか詳細を聞いていない事に思い至る。
その時、エレオノールの思考を遮る用にカトレアが「姉さま、あれを」と部屋の壁の方を指差しながら声をかけた。壁はいつの間にか無くなっており、その向こう側にルイズと見知らぬ少年、そして少年によく似た壮年の男性が立っているのが見える。
エレオノールとカトレアが呆気にとられて見ていると、真剣な表情のルイズが口を開く。

「姉さま、ちいねえさま。今からお二人に大事なお話があります。その前に紹介しておきますね。こちらの方がチキュウであたしがお世話になってるヒラガのおじさま。隣に居るのがおじさまの息子さんでサイト。あたしはいつもお兄って呼んでるの」
ルイズの紹介で男性と少年が各々に挨拶をする。言葉と口の動きが合わない事に違和感を感じながら、エレオノールは彼等の声をぼんやりと聞いていた。

お互いの挨拶が済み、ルイズ達三人によるエレオノールの説得が行われた。平賀教授から才人へ、才人からルイズへ、そしてルイズが少ない語彙を駆使してエレオノールに話すのだから手間が掛かりるのは仕方がない。それでも程なくしてエレオノールは彼等が言わんとしている事を理解し始めていた。
「つまり、カトレアが患っている病の原因とその治療方法について説明するのにルイズを通してだと言葉が足りないから、私の頭の中から言葉に関する事を引き出させて欲しいと。そう言う事でしょ？
でも本当にそんな事が出来るのかしら」
人間から特定の記憶のみを取り出すなんて、とエレオノールは信じられないでいた。とは言え、多くの水メイジが診てもその原因が分からず、魔法や秘薬による対症療法的しか出来なったカトレアの病が治療出来ると言うのだから、その方法を詳しく知りたいとも思う。更に平賀教授から交換条件として、エレオノールが欲したチキュウの様々な書籍について彼女達が使っている言語に翻訳して提供するとの申し出もあった。
どうしようかと顎に手を当て考え込むエレオノールに、今まで黙って聞いていたカトレアが珍しく真剣な顔で突然、懇願を始めた。
「姉さま、わたしのは知りたいの。わたしの病が何なのか、どうすれば治るのか。だから……。姉さま、どうかお願いします。わたしに、わたしの病の事を教えて下さい。お願いします」

そう言い終えたカトレアは俯くと、まるで何かに叩き付ける様に言葉を続ける。
「わたしだって、姉さまやルイズの様に外に出て走ったり、舞踏会で踊ったりしたい。姉さまみたいに魔法学院に入学して、同い年くらいのお友達を作りたい。わたしだけ何でこんな病気なの？　どうして姉さま達と同じにできないの？　小さい頃からずっと姉さまやルイズが羨ましいと思い続けてたの！　でも、わたしは籠の鳥と諦めて……」
床を濡らす涙とともにカトレアは自身の心を吐露する。その言葉の最後は消え入る様にして終わり、啜り泣く声だけが残った。
「カトレア」
「ちいねえさま」
姉と妹それぞれが彼女に声をかけるが、それ以上言葉が続かない。病を抱えながらも、いつも穏やかなカトレアが抱えていた思いを初めて知り、それに対しての言葉が見つからない。そんなカトレアの啜り泣きだけが聞こえる場の沈黙を破ったのはエレオノールだった。
「分かったわ。どの道このまま言葉が通じなきゃ不便だし、カトレアの為にもやってやろうじゃないの。それに、どうしてここでは魔法が使えないのかも聞きたいし。ねえ？　ルイズ」
低い声でそう言った彼女の目は据わっていた。

＊　＊　＊

エレオノールが承諾すると、直ぐに彼女はニューロ・カプラが設置されている部屋に連れて行かれる事になった。平賀教授の指示で部屋の滅菌処置が予め済ませられていたのだ。
またも簡易ポッドに押し込められての移動だが、エレオノールは隔離される意味を教えて貰い、また三回目でもある事から移動中ポッドの中で落ち着いていられた。
ポッドに入れられると彼女は、自分の体の重さを感じなくなる奇

妙な感覚を味わった。最初はレビテーションかと思ったが、上も下も感じない全く違う感覚に戸惑いながら、暫く考えた彼女はこれに覚えがある事に気付いた。
　それは子供の頃に物を壊した罰として、杖を持たされないままルネードで母親に空高く放り上げられた後で地面に向かって落下して行く時のものに似ている。あの時、もし風を感じていなかったらこんな感じだったのだろうとエレオノールは母から受けた仕置きとその理由を思い出しながら苦笑した。その理由と言うのが、父から母へプレゼントされた高名な職人の手による機械式懐中時計を、エレオノールが興味津々で分解してしまったからだ。
「嫌な事を思い出してしまったわ。しかし不思議よね。ルイズもあの人達も『こちらには魔法が無い』って言ってたのにレビテーションみたいなものを使っているみたいだし。まさか先住魔法とかじゃないでしょうね……」
　後でエレオノールは知る事になるのだが、彼女の移動には移動経路の重力場カットと重力ビームによる牽引が行われていた為、彼女の周囲は自由落下状態になっていたのだ。
　エレオノールが思索に耽っていると急に体の重さが戻って来る。どうやら目的地に着いたらしく、暫くして彼女は窮屈なポッドから解放されると辺りを見回した。
　連れて来られた部屋は五メイル四方程でそう広くはない。その部屋の中央寄りに簡易寝台のような物が等間隔に三つ並んでいる。その傍らに宇宙服を着込んだルイズと平賀父子と思われる二人が立っている。
「さあ、どうすれば良いのかしら？」
「そこのベッドに適当に横になって目を閉じて下さい。すぐに終わりますよ」
　エレオノールの問いに応えたのはヴィザーだった。
「ありがとう。確かヴィザーだったわね。貴方、ずっと姿を現さないけど何者なの？」

「姉さま、それは後で分かりますよ。あー、姉さまが羨ましい。あたしなんか二年もこっちに居るのにニューロ・カプラ使ったこと無いのに、いいなー」
半分やっかみを込めて答えたのはルイズだった。そんな妹にエレオノールは「全く、人の気も知らないで」と呟くとベッドに腰を掛け、そして横たわる。
「あら？」
仰向けになったエレオノールは思わず声を上げた。ベッドの表面が変化して体が楽になる様に支えられ、その今まで経験した事の無い寝心地に驚く。
「では姉さま、終わるまであたし達は別室に居ますから」
無意識に目を閉じたエレオノールに、妹の声はどこか遠くから響いているように感じられる。その後は彼女は暫く微睡(まどろ)みにも似た状態でぼんやりとしていたが、突然、全身が冷たく粘りつく液体の様な物の中に浸されたのを感じた。咄嗟に叫び声を上げたはずだが口は動かず呻き声すら出ない。手足を動かそうともしたが全く動かず、身体の自由が全て奪われた彼女はパニックに陥りかけた。その時「怖がらないで。すぐに楽になります」とヴィザーと呼ばれている存在の声がはっきりと耳元で聞こえた。ヴィザーの声は続ける。
「今、あなたの心を世界の網に繋げる準備をしています。少し気持ち悪くなるかも知れませんが、怖がらないで。次は少し暖かくなったり、目の前がちかちかしたりしますが何も心配する事はありませんよ」
世界の網？　何の事かしらと考えているうちに、ヴィザーの言う通りの事が彼女の身に起こった。ぬるりと身体を包む物が無くなったと思ったら、まるで暖炉の前に居るかの様に全身が温かくなり、瞼は閉じたままなのに火花が散る様に白い光が網膜を射す様に明滅する。
「もうすぐ準備が終わります」
そうヴィザーが告げると、エレオノールは急に身体が軽くなるの

を感じた。恐る恐る目を開けると、自分はあの不思議な感覚を味わう前と変わらず寝台の上に仰向けに寝たままだった。彼女は上半身を起こすと、両手を見つめながら手を開いたり閉じたりする。どうやら体に異常が無いらしいと確認すると、今度は辺りを見回す。ルイズ達は別室に移動したのか姿は無く、自分一人だけが部屋に居る。

「終わったのかしら？」

「ええ、準備は終わりました。今、言葉について取り込んでいます」

一人誰に問うでもなく呟いたエレオノールにヴィザーの声が答えた。

「どういう事？」

「説明するのに言葉が足りません。もう少し待って頂けますか？それまで寛いでいてください」

何の事か理解できず問い返すエレオノールに、ヴィザーがそう答えると部屋の様子ががらりと変わった。それまで三つの寝台以外何も無かった狭い部屋が、いきなりその十倍はあろうかという豪華な応接の間に変化したのだ。床には精緻な図案のペルシャ絨毯が敷き詰められ、家具調度類はロココ調のアンティークで統一されている。壁にはモネの『睡蓮』の連作が掛けられ、高い天井からはシャンデリアが下がる。

そしてエレオノールは大きな一枚ガラスで出来た窓の外を見て、驚きに息を飲む。そこには彼女が見た事も無い雄大な景色、ゴルナグラート展望台から望むマッターホルンの姿が広がっていたからだ。

「ヴィザー、これは一体どういう事なの？」

まさか魔法？　でもこんなに精緻で大規模な練金なんて見た事も聞いた事も無いと、理解を超える出来事にエレオノールは目が眩みそうになる。そんなエレオノールの目の前に給仕用ワゴンが突然現れた。

「取り敢えずはこれでも飲んで落ち着いて下さい。地球産のワインですが味は保証しますよ。実際に酔いはしませんけど」

ヴィザーの促されてワゴンの上のを見ると、明るいルビー色をし

た液体が注がれているグラスが置かれている。エレオノールはそれを恐る恐る手に取ると鼻に近づけて香りを確かめ、少しだけ口に含んだ。さわやかでフルーティーな口当たりと花の様な香りが鼻腔をくすぐりながら抜けて行く。

「なにこれ……。まるで果実酒みたいなワインね。でも飲みやすくて美味しいわ」

エレオノールが出されたワインを気に入り、一口、二口と味わいながら飲んでいるとヴィザーが作業の完了を告げた。

「全ての作業が終わりました。妹さんの病気について説明する前に、まずは今の状態についての種明かしをしましょう。睡蓮の絵で真ん中にある物を見て頂けますか？」

そう言われてエレオノールはワイングラスをワゴンの上に置き、壁に掛かった一連の『睡蓮』の中央にある物を注視すると、絵が消えてそこには宇宙服を着込んだルイズ達が映しだされた。おや？とエレオノールは思った。映しだされた部屋には見覚えがある。確か自分が寝台で横になった部屋にそっくりだ。もし視覚化するならエレオノールの頭上には盛大にクエスチョンマークが出現している事だろう。そんな姉に手を振っていたルイズがにやにやしながら話しかける。

「姉さま、どうですか？」

「どうですかって……。何が何だか訳が分からないわ。いきなり部屋の様子が変わるし、ワインは現れるし、それに……」

そこまで言ってエレオノールはルイズ達の後ろあるものを見て絶句する。そこにあるのは眠っているかの様に目を閉じて寝台に寝ている彼女自身の姿。

「え？　その部屋に居るのは私？　でも私はここに居るわよね？何が起こっているの？」

混乱しながら確かめる様に両腕で自分の体を抱き締めるエレオノールに「何も起きてはいないよ」とヴィザーが声をかける。それと同時に彼女の目の前に現れたのは全体が光っている見覚えのある天

井。どうやら自分は先ほど横になった寝台の上にいるのだと気付き、混乱しながらも上体を起こして傍らを見ると、そこには変わらず宇宙服を着て笑みを浮かべ自分を見つめるルイズ達が立っていた。なにがどうなっているのか訳が分からず目を白黒させているエレオノールにヴィザーが「ほうらね。何も起きていないでしょう？」と言う。

「ちょっと驚かせ過ぎたみたいだな。ルイズ、これをお姉さんに着けてやってくれ」

平賀教授がルイズにイヤーセットを渡すと、ルイズは「姉さま、ちょっと失礼」と言って呆然としているエレオノールの片方の耳にそれを装着する。

「さて、お嬢さん。これで十分な意思疎通が出来る様になったはず。先程よりは言葉が流暢（りゅうちょう）になっていると思うが、どうかね？」

目の前で平賀教授が未知の言葉で話すと、同じ声で流暢な公用語がイヤーセットから聞こえて来た事にエレオノールは戸惑いながらも頷き、そして平賀教授に対して疑問を口にした。

「先程のあれは、一体何事ですか？」

「簡単に言ってしまうと“強制的に夢を見させてる”ってとこかな。そうしないとヴィザーがお嬢さんから言語記憶を引き出せなかったのでね。“ニューロ・カップリング”の仕組みについての詳しい事は追々教えてあげる事として、まずは妹さんの病気の件が先。そうだろ？」

それを聞いてエレオノールは「はい」と肯定しながらも「ただ今日は少し休ませて頂けますか？　色々とありすぎて……」と憔悴した表情で訴えた。

＊　＊　＊

ニューロ・カップリングをエレオノールが体験した当日は、彼女が精神的に疲れてしまた事と、時間の関係で地球に居る宝条の都合

がつかなかった為に、カトレアの病気と治療についての説明は翌日に行われた。
　その説明にもエレオノールは驚きを隠せなかった。スクリーンにはカトレアの心臓が立体的に表示され、問題のある箇所が見て分かる様になっている。人体の内部を切開せずに見るなんて水メイジでも難しいのに、それを複数の人間が目で見えるようにするなんて信じられないと思った。何か騙されているのではと疑ってはみたものの、宝条の説明は一々納得せざるを得ないものだった。
「それで、カトレアのこの病を治すには心臓に手を加えて、血管の繋がりを正常な位置にしたり、穴を塞いだりしないければ治らないのですね。でも、どうやったらそんな事が出来るのですか？」
　エレオノールが質問すると宝条は「それじゃあ」と言って人体の模式図をスクリーンに出した。
「この図を使って手順を分かり易く説明して行こう。まず、カトレア嬢には“全身麻酔”を施す事になる。ああ、何と言うかな。薬品を使って切られても痛みを感じない程の深い眠りに入ってもらうと考えて良いだろう。勿論、専門医がコントロールするので覚めなくなる様な事は無い」
　切る、と言う言葉にカトレアとエレオノールは不安を顕わにしたが、それに構わず宝条は続ける。
「まずこの様に胸部を切開して心臓を露出させる」
　模式図で胸の中央が開かれていき略図で表された心臓が現れるとエレオノールは青ざめた。生きたまま身体を切り開いて心臓を切り張りするなんて、そんな事をしてカトレアは無事なんだろうか？そう思ってカトレアを見ると彼女は驚きながらも真剣に宝条の話を聞いている。更にスクリーンの向こうに居るルイズを見ると彼女には全く動じた様子が見られない。
「心臓を露出させたら“大静脈”と“上行大動脈”、これは血の流れの要になる太い血管の事だ。そこにに“人工心肺装置”を接続する。手術は心臓を止めて行うから、手術中はこの装置に心臓と肺の

代わりをさせる訳だ。今のタイプは長時間使用しても生体にダメージを与えないから後遺症の心配は全く無い」
　それを聞いたエレオノールは思わず立ち上がった。
「心臓を止めるですって？　それではカトレアが死んじゃうじゃない！」
　感情を剥き出しに宝条に激しく抗議するエレオノール。見るとカトレアも胸元で手を組み不安げな表情を浮かべている。そんな姉妹を見て頭を掻きながら宝条は宥める様に語りかける。
「なるほど。君達の所では心臓が止まるイコール死と言う生死感なのだね。こりゃ寄り道してその辺りを説明しないと納得できないか……」
　やれやれと言った表情で、宝条は心臓は血液を全身に送るポンプである事、そのポンプの代わりの機械を手術中に動かしているので全身の血流は確保される事、手術が終わればまた心臓を動かす事が出来る事、手術の失敗例が千分の一未満である事等を説明した。
「例えその時に手術が失敗しても、一時的に人工心臓に置き換えておいて後で再手術も可能だから、実質の失敗はゼロと言って良い。地球に於いての“人の肉体的な死”はね、国や民族の宗教観で多少は違って来るけど、概ね脳の機能が完全に失われた状態を指す様になっているんだ。逆に脳さえ死んでいなければ、他の臓器は一時的に機械で代替えさせておいて、後で本人の細胞から作った再生臓器を移植する事で賄う事が出来る。かく言う僕もそんな再生臓器の移植手術を受けた身でね。生まれ付き重い心臓病だった僕は五歳まで体外に補助人工心臓を付けてたんだよ。それで五歳の時に自分の細胞から再生した心臓を移植、まあ悪い心臓と交換したんだけど、その手術で一時的にだけど僕の体には“心臓が無かった”んだよ。それでも僕は生きている」
　そう言うと宝条は上着をたくし上げて自身の胸元を見せる。
「殆ど残っていないけど、胸の真ん中にうっすらと手術で切開した痕が有るのが分かるかな？　信じられないなら僕のも含めて手術と

治療に関する映像資料を見て貰う事も可能だが、刺激が強いのでお薦めは出来ないね」
　宝条の話が途方もなさ過ぎてエレオノールもカトレアも付いて行けなくなっている。特にエレオノールは下っ端とは言えアカデミーの研究員であり知識もそれなりにあると自負していた。しかし、その彼女の知識も常識も通用しない。果たしてカトレアの治療を任せていいのだろうかとエレオノールが考えていると、それまで黙って聞いていたカトレアが口を開いた。
「宝条先生、あの、質問よろしいでしょうか……？」
「ああ、何でも聞いてくれたまえ。出来る限り答えるよ」
　真面目な表情で応えた宝条だが、カトレアの様子がおかしい事に気付く。彼女は何やらもじもじしながら頬を赤らめて恥ずかしそうにしているのだ。その様子に全員が気付き、何だろうと首を傾げる。そんな全員を見回して蚊の鳴く様な声でカトレアが何事かを言ったが聞き取れない。
「カトレア、何を言ってるか分からないわよ。普通に話しなさいよ」
　エレオノールに言われてカトレアは耳まで赤くして俯いた。
「あの、“手術”の時って、その……ね……を……せる……すか？」
「何よ、うじうじしないで、はっきり言いなさい」
　姉にそう言われたカトレアが顔を上げると、恥ずかしそうな困り顔で涙目になっている。
「しゅ、しゅじちゅの時は、む、胸を見せなきゃダメなんでしゅか？」
　羞恥に身悶えしつつ噛みながらカトレアがそう言った次の瞬間、緊張に満ちていたその場の雰囲気が盛大に消し飛んだのは言うまでも無い。

プレイアデス・オペレーション　（６）（後書き）

カトレアさんの不安は、嫁入り前の生乳を他人様に見られる事だったようです。
※最近知ったのですが白血球からｉＰＳ細胞が作れるようになったんだそうですね。
※カトレアさんの病気については突っ込まないでくだしあ。そのうち作中で説明します。

プレイアデス・オペレーション　（7）

カトレアの一言にエレオノールは眼鏡を外して人差し指と親指で目頭を押さえた。

命の危険よりも何でそっちの事を心配するのよ。そりゃあなたはまだ十六歳だし見られたら嬉し恥ずかしの立派なモノを持ってるわよ。私なんか二十歳にもなったのに未だぺたん子で殿方からは憐憫の眼差しを向けられてばかりだし、いやいやいやいやそうじゃなくて！　とエレオノールは思考が暴走するのを抑え込むとカトレアに強い口調で諭す。

「カトレア、心配するのはそっちじゃないでしょう！　生きたまま胸元を切られて開かれるのよ。しかも心臓まで止められてしまうのに、あなた恐ろしくはないの？」

そうやって怒る彼女の顔は半分泣き顔で、妹の事を心底心配しているのが現れている。しかし当の妹はいつもの、のほほんとした調子で姉に言葉を返す。勘の鋭いカトレアは、妹と平賀父子の様子から宝条が話いている手術と言うものに危険は無いと感じている。

「あら姉さま、わたしは恐ろしくなんかありませんわ。だってほら、ルイズは平気な顔をして聞いてるじゃありませんか。心配なんかしなくても大丈夫よねえ？　ルイズ」

彼女は微笑みながら妹に話を振ると、振られたルイズは「ええっ、なんであたしに？」と、手を上下にわたわたと振りながら慌てふためく。そんな妹の様子が可笑しくてコロコロと笑うカトレア。緊張感の無い妹達を見ながらエレオノールは「確かに落ち着いてたわよね」とルイズを睨み付ける。

「ねえルイズ、あなたは私達の知らない何かを知ってるのかしら？」

眼鏡を掛け直しながら問う姉に、ルイズは両手を組合わせ人差し指だけ伸ばすと、指先を閉じたり開いたりしながら上目遣いで返事をする。

「姉さま、そんな大したことじゃ無いです。ただ、前にドキュメンタリー番組で見た事があって、こっちだと、その、心臓の手術なんて普通の事だと思ってたし」
一番下の幼い妹が何の抵抗も無く手術と言う行為を受け入れている事に「普通の事ですって？」と驚く姉。そんなエレオノールとルイズのやり取りを聞いていた宝条は「その手が有ったか」と手を叩く。
「ルイズ嬢の言う通り、年間に何万人も受けている至極普通の手術なんだよ。そうか、ドキュメンタリーなら一般向けで刺激も少ないし説明にはもってこいだったね。いや、盲点だったよ」
一人納得して頷く宝条を見ながら、“どきゅめんたりぃ”って何かしら、また聞く事が一つ増えたわね、とエレオノールが考えていると、カトレアの「あの、先生。先程のお答えを……」と恥ずかしそうに言う声がした。
「ああ、済まない。やはり年頃の娘さんだもの恥ずかしいだろう。大丈夫、手術の時に切開する部位以外は特殊なシートで覆う事になっている。それでも恥ずかしいなら執刀医を含めスタッフ全員を女性にする事も出来るよ」
宝条からの答えと約束を聞いてカトレアはやっと安心した様で、ほうっと息を吐いた。
「うん、実際の手術の手順や術後の処置については、医療ドキュメンタリーの映像を用意して後で見られる様にしておこう。心臓手術については下手にここで話すより、そちらを見て貰った方が遥かに良いだろう。さて……」
宝条が言葉を区切り皆の注意を自分に向けさせる。その表情はどこか厳しい物が有る。
「実は、もう一つの病気の方が治療に関しては厄介なんだ。地球に着いてからの精密検査をしないと確定は出来ないが、自己免疫性疾患である事はほぼ間違いない」
聞き慣れない言葉にエレオノールもカトレアも首を傾げる。

「分かりやすく説明してみようか。ヒトの体は異物が侵入して来ると、これを攻撃して排除しようとする免疫と言う仕組みを持っている。この仕組みに異常が発生して、本来なら守るべき自分の体、例えば特定の内臓や筋肉を攻撃してしまう事態がカトレア嬢の体の中で起こっている」

ここまでは良いかなと言う様に宝条はエレオノールとカトレアを交互に見やる。

「体内に侵入した特定の異物を攻撃する武器として抗体と言う物質が体内で作られているのだが、カトレア嬢から二種類ばかり自分の体を攻撃してしまう異常な抗体が見付かった。今まで頻繁に手足が痛んだり腫れたり、お腹が痛くなったりしなかったかね？」

そう問われたカトレアは肯定を表して深く頷き、エレオノールも痛みを訴えては水メイジの治療を受ける妹の姿を思い出した。

「ちょっと難しい話になるが、こいつの治療方法は遺伝子治療、ああ『遺伝子』については後でヴィザーに詳しい事を聞いて貰うとして今は話を進めよう。で、この遺伝子をベクターと呼ぶ特殊なウイルス、ええと非常に小さな遺伝子を運ぶ入れ物だね、そいつを使って自身への攻撃因子が発現しないように修正するのと同時に、特殊な酵素……んと、薬で免疫を形作る仕組みを初期化する。そうしないと既に獲得している自分を攻撃する抗体作りを止めさせる事が出来ないんだ。それと同時に今までに獲得した様々な病気に対する耐性を失うから、それまで何でも無かった病気、例えば普通なら軽い風邪程度で済むものでも罹ったら命に関わる程に重症化する事も有り得る。その為に治療中は病気に感染しない様に無菌室で過ごす必要がある。免疫系の再構築速度は個人差があるから一ヶ月から二ヶ月は部屋に閉じ籠もりっきりになると考えておいて欲しい。ただ、ルイズ嬢とエレオノール嬢の二人から、免疫情報の移植が可能ならば期間は少し短く出来るね」

宝条がそこまで言った時に、今まで黙っていた平賀が口を挟んだ。

「治療の順番はどうなるんだ？　素人考えだが免疫系に異常がある

状態で手術はやばいんじゃないか？」
「それについては患者のＤＮＡを含めて精密検査が必要だし、カトレア嬢が地球に来てから医療チームと相談だね」
そう言うと宝条はカトレアに向き直り「それよりも重要なのは、治療を受けるかどうか、カトレア君の意思だ。正直に言うとリスクは全く無いと言い切れない。この二つの病気に関しては、ここ半世紀の治療実績についてほぼ百パーセントの完治を示している。だが、人間のやる事に『絶対』は無いからね」と告げた。
カトレアはにこやかに「それでも先生達はそこを目指そうとなさるんでしょ？」と事も無げ返すとエレオノールに「姉さま、わたしは此方（こちら）の方々が持つ医術を信じたいと思います」と告げる。
そんな妹を見つめながら何かを言おうとしたがエレオノールは言葉を見付からなかった。

宝条からの説明があった翌日に観せられた心臓手術や遺伝子治療、免疫等ついてのドキュメンタリーや教育用映像に、エレオノールとカトレアは驚きを隠せなかった。手術については目で見てのインパクトが大きかったが、遺伝子治療や免疫について説明される中で語られた生命の進化や、細胞の微細な構造、目に見えないほど小さな微生物の事などは、学者肌であるエレオノールの知的好奇心をいたく刺激した。そしてこれ等の知識を得た手段に魔法が全く使われていない事、そもそもこちらの世界には彼女達の言う魔法が存在しないと、はっきり知らされ彼女達は、やはりそうなのかと納得した。
ハルケギニアの、特にエレオノール達の祖国であるトリステインの貴族は「まず魔法在りき」の風潮が強い。但し戦（いくさ）以外での魔法の実践的な使用や研究は、表向きには下賤なものであるとされ、為に魔法技術については大国であるガリアや新興国（とは言っても千年以上の歴史があるのだが）のゲルマニアに大きく後れを取っている。
教条的な研究に終始しているアカデミーに些（いささ）かうんざりしていた

エレオノールは、魔法を使わずにそれでいてハルケギニアでは考えられない様な事を成し遂げているハルケギニアとは異なる『こちらの世界』についてもっと知りたいと思い始めていた。

＊　＊　＊

エレオノール達がドキュメンタリー映像を見せられてから三日後、宝条が手配していた宇宙船がヴァーユ号に到着した。エレオノールとカトレアは勿論の事、平賀家の面々とオブザーバーとして来ていた南武とテューリアンのエイドレフが地球への帰路に就く。クラークを筆頭としたプレイアデス・オペレーション第二グループの研究者達と技術者達は引き続きヤヌスでの被害調査を行うが、友永と数名は地球に戻り筑波の実験施設を使って三姉妹の両親へ彼女達が無事である事を伝える試みを行う事になった。

地球帰還組を乗せる宇宙船は太陽系内の連絡用に使われる小型船（とは言え全長は二百メートル強もある）でヴァーユ号のドッキング・ポートに接舷できるタイプだ。わざわざこのタイプを選んだのは、シャトルでの乗り継ぎを無くす事で病気を患っているカトレアに掛かる負担を軽くする為だ。

滑らかな流線型をした機体がゆっくりと、だが確実にヴァーユ号のドッキング・ポートへと近付いて来る。その様子をエレオノールとカトレアはルイズと一緒に展望室で見学していた。三人とも宇宙服や防護服は着用しておらずＵＮＳＡ標準船内着である青を基調としたポロシャツの様なデザインの半袖シャツと、ゆったりしたズボンを着せられている。彼女達は大事を取って隔離されていたが、検査の結果からルイズと同じく細菌やウイルスに対する耐性を獲得している事が明らかになった事で窮屈な生活から解放されたのだ。但しこれは滅菌室と同じ宇宙船内の環境だから許可されたのであり、彼女達は地球に到着すると直ぐに隔離されたまま国立生物医科学・生物工学研究所へと移送され精密検査とワクチン等の接種を受ける

事が決められていた。カトレアは治療の為にそのまま留め置かれる事になるが、エレオノールはルイズと一緒に平賀家の世話になる事が決まっている。
「凄いわね。空海軍の戦列艦を見た事あるけど倍以上あるじゃない。これが光の速さで飛んで来たなんて信じられないわ」
事前に大きさを知ってはいたが宇宙船のコックピットに乗員の姿が見えた事でその大きさを実感したエレオノールは感嘆の声を上げる。何もない宇宙空間が背景だと比較物が無い為に見た目での大きさが分かり難いのだ。
「今わたし達が居るヴァーユ号はこれよりもっと大きい船なんですよね……」
姉の言葉にカトレアが応えた。彼女の声は低酸素発作を予防する為に着けられた酸素カニューレ（両鼻腔に短いチューブを挿入して耳に掛けて固定した状態で酸素を送る医療器具）のお陰で若干鼻声になっている。最初カトレアは見た目が恥ずかしいと酸素カニューレの装着を嫌がっていたが、医師から本来なら薬剤を使って発作を予防するのだが精密検査を行うまでは下手に使う訳にもいかないからと丁寧に説明され、彼女は渋々と装着に同意したのだ。
「ルイズ、ごめんなさいね。ミスタ・ヒラガから聞いたわ」
唐突にエレオノールは一番下の妹に対する謝罪を口にした。彼女は平賀教授からヤヌスの役割と彼等が言う『プレイアデス・オペレーション』の目的を聞かされていた。こちら世界の人々の努力により、あと少しでルイズはハルケギニアに、自分達の所に帰れたはずが、それを自分の不注意により台無しにしたのだ。自分があの時に無用な好奇心を抑えていれば……。そんな姉の心情を知ってか知らずか、ルイズは謝罪する姉を驚きの目で見るとすぐに微笑みを返した。
「姉さま、あたしは……気にしてませんよ？」
何よその間と疑問形は！　と言うエレオノールのツッコミを華麗に受け流し、ルイズはカトレアの方を見て弾んだ声で言葉を続ける。

「姉さまのドジのお陰で、ちいねえさまの病気が治せる事になったんですもの。あたしは嬉しいですわ」
何気なく酷い事をルイズに言われて落ち込むエレオノール。そんな姉の珍しい姿を見ながらカトレアが苦笑混じりに言う。
「ルイズ、宝条先生がおっしゃってた様に、まだ治ると決まったわけじゃないわよ」
それを聞いたルイズは、とんでもないと言わんばかりに首をぶんぶんと横に振りながら訴える。
「そんな事無いです！　ちいねえさまは宝条先生達が必ず治してくれます！　みんな、あたしを帰してくれる事を諦めないでくれました。だから、ちいねえさまの事も必ず治してくれます！」
「そうね。迷い込んだあなたを帰す為だけに、これだけの事をする人達ですものね。わたしも信じるわ」
妹たちのそんな会話を聞きながらエレオノールはヴィザーの解説付きで見せられた『こちらの世界』の事について思い出していた。彼女にとっての世界とはハルケギニアの大地とそれを取り巻く海、太陽や双月が廻る空が全てだった。そんな彼女はヤヌスとヴァーユ号について自分の知識の範囲内で知り得る建物と桟橋に係留されて浮いている大型のフネを想像していたのだが、漆黒の虚空に浮かぶヤヌスとヴァーユ号の映像を見せられた時、彼女は自分の想像の範囲外の光景に絶句した。
真っ暗なのは夜だからなのだろうか？　月はどこなのだろうか？　背後に瞬きもせずに輝いているのは星で間違い無いのだろうか？　それよりもヤヌスは『建造物』ではなかったのか？　何故、浮いているのだろうか？　地面はどこにあるのか？
様々な疑問で思考が埋められて行く。そんなエレオノール達にヴィザーは丁寧な解説で理解を促した。とはいえ全てが理解出来た訳では無い。取り敢えずここから地球までは、彼女の知る単位で約七百七十億リーグという事と途方もない距離にある事と、宇宙空間と呼ばれるこの場所には上も下も無いと言う事くらいだった。

そして見せられた地球。白と青のマーブル模様の円盤に見えたそれは直径一万二千リーグの球形をした世界だった。白く見えるのは雲、青く見えるのは海。所々に緑や茶色の陸地が見える。「貴女達の住むハルケギニアも宇宙から見たら、きっとこう見えるでしょう」と言うヴィザーの言葉が印象に残っている。魔法が無くても人間はとてつもない事が出来る力を持っている。エレオノールはそんな事をぼんやり考えながらドッキング作業を眺めていると、ルイズが心配そうに声をかけてきた。

「姉さま？」

「あ、ごめんなさい。ちょっと考え事をしてたわ」

「どんなことですか？」

「こっちに来てから驚かされる事ばかり。なんかアカデミーでの魔法研究が馬鹿らしくなっちゃって」

エレオノールは砕けた口調でそう言うと口元に笑みを浮かべながら肩を竦める。いつもと違う長姉の仕草と口調に信じられない物を見たと言った様子でカトレアとルイズは目を丸くする。

「姉さま、熱でもあるんですか？」

そう言いながらルイズは背伸びをして姉の額に手を当てた。

「こら！　ちびルイズ！　さっきは黙っていたけど、あなたさり気なく失礼な事を言う様になったわね？　どの口が言・っ・て・い・る・の・か・し・ら？」

久しぶりにエレオノールの対ルイズ必殺技が発動、油断していたルイズはエレオノールに頬を抓り上げられる。

「あだあ！　やべで（やめて）！　ねべざば（ねえさま）！　ほっへほびぶ（ほっぺのびる）！　ほっへばいだいでふ（ほっぺがいたいです）！」

勿論カトレアはその様子を微笑みながら「あらあらまあまあ」と生暖かい眼差しで見つめるだけだ。ひとしきり姉妹のスキンシップ（？）が繰り広げられた後、涙目になったルイズを解放したエレオノールは真面目な顔になり話し始める。

「まだこっちに来て日が浅いけど色々と考えさせられたのよ。私達からしてみれば魔法が存在しないこちらは平民だけの世界でしょ？
そんな世界の方が六千年も魔法を至上としてきたハルケギニアより遙か先を行っているなんてね。魔法に頼らないでも人間が為し得る可能性って言うのかしら、少しだけそれが見えた気がするの。もっとこの世界の事を色々と知りたいけど、私達が帰る時まで、どれだけ知る事が出来るのかしらってね」
「ヤヌスの機能回復には現状で二ヶ月以上後かかると報告を受けているよ。カトレア嬢の治療の件もあるから三ヶ月以上は確実だね」
誰に言うでも無しに言ったエレオノールの問いに対し、不意にイヤーセットを通して声が聞こえた。翻訳音声が流れる少し前に同じ声色の話し声が後ろから聞こえていた事からエレオノールは振り返る。そこには地球人の平賀とテューリアンのエィドレフが立っていた。既にエレオノールにエィドレフを含めたテューリアン達の事は紹介済みだ。最初はトロール鬼程では無いがその巨躯に驚き、彼等テューリアンが二千五百万年以上の歴史を有し、技術的にも彼等から地球人が学んでいる事を聞かされるに及んで、今では畏敬の念さえ抱いている。
「ミスタ・ヒラガ、ミスタ・エィドレフ、わざわざこちらに？」
エレオノールは目上に対する礼儀をもって平賀とエィドレフに接している。もし彼等の接触がハルケギニアで行われていたなら、エレオノールの地球人とテューリアンに対する認識や態度は「平民と亜人」と言うような物になっていたかも知れない。
「君達がこちらでドッキングを見学していると管制室に向かう途中で聞いたから、ちょっと寄ってみたんだが、何やらお悩みの様じゃないか。良ければ相談に乗るが」
平賀の申し出にエレオノールは一も二も無く即断でお願いする事にした。

＊　＊　＊

ストレス・フィールドによって覆われ通常空間から分離した状態で光速に近い速度で航行する宇宙船には外部の通常空間との相対論的複合時差を生じる。ヴァーユ号を発って地球軌道上に到着した小型船は、地球時間で三日間を宇宙空間の航行に費やしていたが船内では僅か三時間しか経過していない。エレオノールは事前に説明を受けていたが実際に体験しても航行中の宇宙船からの景色をその目で見ていないので、本当に七百七十億リーグも移動したのかと疑いを持つ。彼女達を乗せた小型船には窓が無く、例え窓が有ったとしてもストレス・フィールドを展開して通常空間から切り離された状態なのだから、窓が有ったとしても視認しようが無い。

ヤヌスからの引き上げ組と新たな来訪者二人を乗せた小型船は、地球軌道上にある重力制御衛星による制御降下を使い宇宙港の指定された駐機場へと無事に着陸した。駐機スペースにある昇降機が迫り上がってエアロックに接続されると、平賀はエレオノールとカトレアに「出発前に言った通りエレオノール嬢とカトレア嬢は俺と一緒に迎えのＶＴＯＬで宝条の所へ直接向かってもらう」と告げる。昇降機の窓からは、彼等が乗ってきた小型船の傍らに一機のＶＴＯＬ機が待機しているのが見えた。

エレオノールとカトレアは防護用のフェイス・マスクを着用させられ、更にカトレアには体の負担を考えて車椅子が用意されていた。カトレアは大丈夫だと言って固辞したのだが、エレオノールに窘められて結局は車椅子に座る事になる。そのカトレアの車椅子を押しながら昇降機に乗り込む平賀に付いていきながらエレオノールは話しかける。

「ミスタ・ヒラガ、あの件ですがミスタ・ホウジョウには？」

「大丈夫、話は通してあるよ。但し最初に話した通り、あまり期待はしないでくれよ？　適性が無いと無理な事なんでね」

「ええ、その時は潔く諦めますわ。それじゃあルイズ、また後でね」

平賀との短いやり取りの後、エレオノールは船内を振り返りなが

ら小さな妹に声を掛けた。
「はい、姉さま、ちいねえさま。後で研究所に会いに行きますから」
「ルイズ、来る時にはおみやげ忘れないでね。あなたが言ってたケーキでも良いわよ」
笑顔で言うとカトレアに、複雑な表情を見せながらルイズは平賀教授を見やる。カトレアが心臓病と自己免疫性疾患の治療で暫くは外に出られない事をルイズは知っている。それを思ってどうした物かと考えた表情と行動だったのだが、そんな妹を見てカトレアは柔らかく笑う。
「ふふ。ルイズ、冗談よ、冗談。わたしだって分かっているわ。でもね、治ったらその時は必ず食べに連れて行ってね。約束よ」
「はい、ちいねえさま。必ず元気になれますから、だから……」
「ルイズ、あなたが言ったのよ。ミスタ・ホウジョウ達なら必ず治せるって。だから信じるわ」
言葉に詰まり目にうっすらと涙を浮かべた妹に、カトレアは優しく話した後で、平賀に「あまりお待たせするのも失礼ですよね」と声を掛けると、平賀は「ああ、そうだな。それじゃ二人を送ってくる」と彼の妻と才人に言う。
「ルイズ、私は一週間くらいで出られるらしいから、あなたのお気に入りのケーキ、まずは私が味見させてもらうわよ」
「姉さま、ずるいですわ。ルイズ、姉さまと一緒に時々会いに来てね」
「はい。姉さま、ちいねえさま」
笑顔で返事をするルイズ。それを確認したエレオノールは「では、参りましょうか」と促した。平賀の合図で昇降機のハッチが閉まると三人は地上へと運ばれ、エレオノールとカトレアは文字通り『異世界の大地』に初めて足を降ろした事を実感しながら駐機しているＶＴＯＬ機へと歩みを進めた。

「これが空を飛ぶんですか？」
　しげしげとＶＴＯＬ機を見たエレオノールが平賀に聞く。ずんぐりとした胴体、高翼式で長スパン直線翼の主翼。その翼端には樽の様にも見える水素ターボファンエンジンが付いており、現在それの角度は地面に対して垂直になっている。胴体後方にある水平尾翼の翼端それぞれに垂直尾翼が取り付けられており真後ろから見るとＨ字に見えた。端的に言えばＶ－２２オスプレイを一回り小さくして、両翼端にある回転翼付きターボシャフトエンジンを高バイパス比を持つターボファンジェットエンジンに換装した様な機体を想像して頂ければしっくり来るだろう。空を飛ぶモノと言えば鳥やフネ、竜くらいしか知らないエレオノール達の目にその機体は奇異な物として映っていた。
「ああ、近距離の連絡用によく使われる機体だよ。取り敢えず乗った乗った。百聞は一見にしかずだ」
　平賀は笑いながらエレオノールを促すと、カトレアを乗せた車椅子を操りＶＴＯＬ機の後部ゲートのスロープから搭乗する。彼は機体中央付近で窓際の座席にカトレアを座らせるとシートベルトを締めさせ、エレオノールにも着席してシートベルトをする様に指示すると自らも座席に座る。程なくしてコクピットからはエンジン始動を知らせるアナウンスが入ると微かに甲高い音が聞こえて来る。
「ではお嬢様方、これより短い時間ではありますが遊覧飛行も兼ねた空の旅をお楽しみ下さい」
　平賀の芝居がかった口上と共にＶＴＯＬ機は上昇し始め、見る見るうちに高度を上げる。一定の高度の達するとエンジンの角度が徐々に水平に近づき、上昇しながら速度が上がって行くが、機内は驚くほど静かで揺れも殆ど無い。
「こ、この機械は、どれ位の速さで飛べるのですか？」
　味わった事のない加速に戸惑いながらも窓の外を見たままエレオノールは平賀に質問した。
「時速八百キロメートル以上だったかな。機長、教えてくれないか

？」
「高度八千メートルで最大巡航速度が時速八百二十キロメートルですね。今回は目的地が近いのと低高度で遊覧飛行もするのでそこまで出しませんが」
　彼等の使っているメートル及びキロメートルは、エレオノール達にはそれぞれメイルとリーグに翻訳されて伝えられている。
「時速八百二十リーグですか？　しかもそんなに高い所を飛べる乗り物だなんて」
　エレオノールは風竜ですら届かない速度と高度に驚きつつ感心し、カトレアはカトレアで始めて乗ったにも拘わらず「姉さま、この乗り物は竜籠よりもずっと乗り心地が良いですわ。帰る時に一つ頂けないかしら」と曰っている。
　そんなこんなを話している内にもＶＴＯＬは旋回しながら高度と速度を上げて行き、宇宙港に駐機している小型宇宙船やシャトルが見る見る小さくなって行く。そうして宇宙港全体が見渡せる高度になると窓の外を見ていたエレオノールは息を呑んで目を見張った。
　彼女は山並みが見えない事から宇宙港があるのは平原の真ん中ではと思っていた。だがその推測は外れた。上空から見て海原が広がっている事から海上にある事が分かる。遠くに見えるのは陸地なのだろう。だが窓の外に見えるモノは果たして何なのだろうか？　そう思ってしまう程それは余りにも平坦で整然としていて幾何学的だった。
「ミスタ・ヒラガ、私達が降りた宇宙港と言うのは……」
「ああ、説明してなかったか。人工の浮島だよ。よく見ると正六角形が集まっているのが見えるだろ？　あの正六角形一つ一つが一辺三百メートルの浮島で、それが千個程繋げられて約十キロメートル四方の宇宙港を構築しているんだよ」
　宇宙港は房総半島館山湾西方沖四十キロメートルに所謂メガフロートとして建造されていた。構成要素一個一個の浮体そのものは海中にあり上部構造は海面から二十メートルになるように、また繋げ

られている各々が全体で水平を保つように制御されている。
平賀の説明を聞きながらエレオノールはヤヌスやヴァーユ号の説明を受けた時よりも大きな衝撃を受けていた。宇宙空間と違って比較出来る物があり実感できるからに他ならない。これが人の力で作られたモノだと彼女は俄(にわか)には信じられなかった。
「凄いですね……」
そう言ったきりエレオノールは言葉を失う。カトレアも只驚き黙ったままだ。
「例の適性が有れば直ぐにでも理解できる様になるさ。もし駄目でも帰る時に一生をかけても読み切れない程の文献や資料を渡すから期待しといてくれ」
平賀の言葉に何台もの荷馬車に堆く本が積まれている様子を想像して顔を青ざめさせたエレオノールと、何やら嬉しそうな笑みを浮かべるカトレア達を乗せたＶＴＯＬ機は予定高度に達すると水平飛行に移り、国立生物医科学・生物工学研究所が在る東京へと機首を向けた。

プレイアデス・オペレーション　（７）（後書き）

活動報告に書いてありますが、このままだと１ヶ月更新無しになってしまいそうなので投下予定ポイントまで達していませんが投下します。為に中途半端感が否めない内容となっています。

なんかここのところエレ姉さま中心で書いている気がする。

現在書いている過去編でのルイズ達の年齢ですが作中に書いてはありますが纏めてここに書いておきます。

エレ姉さん：２０歳←重要

カトレアさん：１６歳

ルイズ：９歳

但しハルケギニアでの年齢

※自己免疫性疾患の治療方法は妄想です。現状では有効な治療法は無いそうです。

※感想返しをしない作者ですが、いただきました感想はしっかりと有り難く読ませて頂いております。感想返しをすると自らネタバレをやらかしそうなので自重している次第。ご容赦の程よろしくお願い致します。

オムニプレックス・ウーマン　（1）

エレオノールとカトレアを乗せたＶＴＯＬは東京湾上空を北上した後に進路を西に変え、反時計回りで都心部上空を遊覧飛行しながら医科工研へと無事到着した。高さ数百メートルの摩天楼が林立する有様は、エレオノールが「事前に映像で見せられて説明を受けていたにも拘わらず、自分の目に映る光景が人の手に因る物だとは俄には信じられなかった」と後に述懐した様に、彼女達にとって驚きに満ちた光景だった事は間違い無い。

そんな驚異の余韻に浸る間も無く二人は医科工研に入所するとすぐに処置室に通され、防護服を纏った女性看護師達の手によってあれよあれよと言う間に全身洗浄処置をされて寝間着に着替えをさせられた後、ルイズと才人が以前に収容されていた海が見える無菌病室へと連れて来られたのだった。

ちなみに、この金貧長女（えれおのーる）と桃巨次女（かとれあ）の姉妹が剥かれた後に隅から隅まで泡まみれで洗われて着替えに至るまでの『きゃっきゃうふふ』な描写については読者各人の妄想力にお任せした方が良かろうとの判断から、敢えて描写しない事にさせて頂いた。それにこのご時世で、物語のこの時点に於いて二十歳である金貧長女（えれおのーる）の方は良いとして、未だ一八歳未満である桃巨次女（かとれあ）について描写するのもまあ憚れると言う事で。いや、そのですね、そう言う事にしといて下さい。ええと、あの、実はですね。本当は途中まで書いたんですよ。でも書いてるうちに何と言いますか。読み直したら恥ずかしさで首筋とか背中とかがむず痒くなって、気が付いたら何時の間にかごっそり消しておりまして。あー。えー。その。一応謝っておきます。ごめんなさい。

閑話休題（それはさておき）。

無菌病室に連れて来られたエレオノールは室内を一瞥すると「予想はしていたけど“うちゅうせん”の時と同じで、本当に何も無い部屋ね」と言うなり、ほうっと溜息を吐く。

エレオノールはワクチン等の接種をした後に一週間程で病室の外に出られる。だが妹のカトレアは自己免疫性疾患と心臓疾患の治療の為に長ければ二ヶ月以上をこの部屋で一人過ごす事になる、その事を思っての嘆息だった。

そんな姉の気持ちを知ってか知らずか窓辺に近付いたカトレアは感嘆の声を上げた。

「まあまあまあまあ。姉さま見てくださいな。なんて素敵な眺めなんでしょう！　これなら退屈しないで済みますわね」

「ほんと、あなたの脳天気っぷりには敵わないわね」

窓辺ではしゃぐカトレアに、エレオノールは内心では“本当は誰よりも不安で押し潰されそうなのに無理してるんじゃないのかしら”と思いながらも努めて明るく言葉を続ける。

「景色ばかりじゃないわ。ルイズから聞いたけどヤヌスで経験したみたいに映像や音楽、それに読み物を何時でも好きなだけ楽しめる上に、“こんぴゅうたあ”を使った大勢の人で参加出来る遊びもあるらしいから退屈する暇も無いと思うわよ」

姉の言葉に振り返りながら「そうですわね。それに病気が治ったらルイズが言っていた“てーまぱーく”とか言う場所にも行けるでしょうし、楽しみですわ」

カトレアはその時が待ち遠しいと笑うが、反対にエレオノールはルイズがお気に入りのアトラクションだと言う事で見せられたジェットコースターの、それも先頭車両からの乗車視点の映像を思い出して身震いをした。

なんであんな恐ろしい事を末の妹（ルイズ）は『楽しい』と感じるのだろうか？　映像を見せられただけで胃の辺りが締め付けられる様に感じる自分に、幾ら安全が保障されていると言っても、あんな物に乗る事なんてとても耐えられないし御免被（ごめんこうむ）るわと思いつつ、年長者の見

栄でそれを隠して彼女は相槌を打ちながら応える。
「そうね。あなたとルイズ達で楽しんでらっしゃいな。私はきっと色々と忙しいと思うから遠慮しておくわ」
「まあ、わたしの快気祝いに姉さまはご一緒してくださらないの？」
姉が内心怖がっているのを分かっていながら、カトレアはいかにも悲しそうな表情をしながら聞き返す。そんな妹の企みに気が付いていないエレオノールは慌てた様に言い訳を始める。
「ち、違うわよ。お祝いするなら、ほ、ほら、やっぱり静かな場所で、お、おお落ち着いてした方が良いでしょう？　それに、あなたの快気祝いなんだもの。家に帰ってから、そうよ。ヴァリエール領に帰ってからお父様とお母様からもお祝いして頂いた方が良いと思うのよ。うん、そうしましょう。そうすべきだわ」
「うふふ、姉さま目が泳いでますわよ。ルイズが好きそうな物は刺激の強い出し物ばかりみたいですから、無理もありませんわね」
人の悪いを笑みを浮かべたカトレアを見て“ああ、この子ったらこんな顔も出来るのね”とエレオノールは少し感心しながら、ならばと芝居掛かった口調で応えた。
「カトレアっ！　私を謀ったわね？　はぁ、あなたは勘が良いって事を失念していたわ……」
がっくりと態とらしく項垂れるエレオノールに、カトレアが小さく舌を出して「エレ姉さま、ごめんなさい」と謝る。お互い、目と目が合うと暫くして二人とも同時に声を上げて笑い出した。一頻り笑うとエレオノールは笑い過ぎて目尻に溜まった涙を指先で拭いながら話し始めた。
「あー、おかしい。カトレア、あなたがそんな風に心の底から楽しそうに笑うのを見るのは本当に久しぶりな気がするわ。トリスティンから遠く離れた場所に来てしまったのに、こんなに気分になるなんて何か不思議な感じね。やっぱり身内が一緒に居るからかしら」
「姉さま、わたしもそう思います。でも、二年前にたった一人で迷い込んだルイズは本当に心細かった事でしょうね……」

迷い込んだ当時の妹の心情を思ったカトレアは語尾を濁しながら視線を伏せた。そんな妹にエレオノールは「確かにそうね」と返すが、「それにしても……」と続ける。
「あの子、変わったわね。ヤヌスでは詰め寄られた挙げ句に恨み言と愚痴を聞かされたりしたけど、何と言うか行方不明になる前よりも明るくなっている。いいえ、寧ろ図々しい、図太いと言った方が正しいかしら？　辛い思いをしてたなんて感じられない位に」
首を傾げる姉を見ながらカトレアは楽しそうに「それはそうよ。今のルイズには彼女だけの騎士様が付いているんですもの」と言うと、それを聞いたエレオノールは「騎士様？　誰よそれ」と怪訝な表情を浮かべる。
「ふふふ。鈍い姉さまでもそのうち直ぐに分かりますわ」
そう言われて更に首を傾げて悩む素振(そぶ)りのエレオノールをカトレアは微笑みながら見つめるのだった。

エレオノールとカトレアが東京の医科工研で病室に落ち着いたその頃、友永を始めとする第二チームの分遣隊は、筑波の高次物理学研究所に到着すると休憩もそこそこに超立方振動干渉装置の基礎実験で使っていた機器のチェックを始めていた。
彼等の目的は三姉妹の両親に娘達の無事を知らせる事。ヤヌスのシステムが使い物にならない今、ここ筑波に在る装置だけで何とか目的を達成しなければならない。装置そのものは基礎実験で使用していた為に十分に機能はするのだが、マクロサイズの世界間ブリッジを生成するには如何せん出力が足りない。
「……開口部の限界値は五ミリメートルか。元々ここの位相変調機構はそこまで考えて設計されてないからしょうがないか」
確認をしながら誰に言うでもなく呟いた友永に技術者の一人がと返す。
「解析しやすい様に共振器のQ値を高く設定してあるから自ずと開

口部は小さくなりますからね。大きくしようとしてパラメータを変えると最悪、変調器の作り直しですよ」
「あちらに送ってある端末関係はセンチメートル波を使う民生品だからなぁ。波長より小さな開口部じゃあ、ワイヤレスで送るってのは無理かな？」
「不可能では無いですが、電波が拡散し難いのと減衰が大きくなるので端末を端点の直ぐ傍に置いて貰う必要がありますね。それとヤヌスで観測された光子放出による擾乱の影響も考慮するとかなり辛いですよ。その前に『その事をどうやって先方に知らせるか』ですが……」
　受け答えをしていた技術者が言葉を濁す。
「白山羊さんから手紙を送るのに事前に知らせないと黒山羊さんが受け取れない。卵が先か鶏が先かにも等しいですねぇ。伝書鳩でも使えれば良いのに」
　誰かが冗談めかして言うと、それを聞いた友永の手が止まる。彼は瞑目して「伝書鳩か……」と、ぶつぶつ何事か呟き始めると「そうか！　そうだよ！」と唐突に声を上げた。
「友永さん、どうしたんです。まさか本気で伝書鳩を使う気ですか？」
　伝書鳩発言をした本人が驚いて尋ねると、友永は真剣な表情で続ける。
「いや、そうじゃないよ。電波を使うだけが通信じゃないって事さ」
　それを聞き、その場に居た者達全員が一瞬だけ怪訝な表情をする。だが暫くすると各々が「なるほど」とか「そうか」と言い始め、どうやら彼等も友永が言わんとしている事に気付き始める。
「開口部が五ミリでも、出力を上げて適正な制御が出来ればブリッジを使った質量移動が可能になる」
「そう、何も手紙をコード化して電波で送信する必要は無い。文字通り『手紙』をそのまま送れば良いんだよ。紙でも何でも良い。シート状の物に文字を書いて、丸めようが短冊にしようが兎にも角に

も幅を五ミリ以下に収めてブリッジを通過させるんだ。但し、そんな小さな質量の物を送るにしても筑波のシステムでは決定的に出力が不足している」

その発言を切っ掛けに、堰を切った様に全員が自分のアイデアを述べ始め場が騒然とし始める。

「その代わりに変調器の位相制御範囲はヤヌスのシステムよりも余裕がありますよ。維持制御に関しては問題無いでしょう」「予備部品を並列に繋げて稼働が出来るようにすれば出力段の増強は在り合わせの機材でなんとかなるかな」「転位完了までに掛かるエネルギーは、エネルギーセンターから優先で回して貰えるように上と掛け合って来ます」等々、既に具体的に動き始めようとする者まで居る始末だ。

「まあ落ち着いて！　まずはチェックリストだ。何をすべきか何が有るのか何が足りないのか、その他諸々を明確にして確実に実行して行かないとね。装置の改造を含めて全てを三日で仕上げたいが良いかな？」

各々が「おう」や「はい」と応える中「友永さん、ここを何処(どこ)だと思っているんですか？　かの有名な『筑波の不夜城』ですよ」と一人が言うが「それ、ご近所と一部関係者にしか認知されていない渾名だろう」と誰かが笑いながら混ぜ返す。

「ここが不夜城だからと言って完全徹夜は効率が下がるから原則禁止で。平賀先生からの受け売りだけど『無茶は承知だ無理するな。慌てず急いで正確に』で行こう」

笑みを浮かべながらも目には強い意志を宿しながら言う友永に、プレイアデス・オペレーション第二チーム分遣隊の全員が強く頷いた。友永は彼等を見渡すと、ふっと息を抜きながら頼もしい仲間達に宣言する。

「よし。それじゃあ白山羊さんから黒山羊さんへ手紙を渡す為に、伝書鳩は仕事始めようじゃないか」

＊　＊　＊

ヴァリエール領の城にあるルイズの部屋、そこは城の主である公爵の命によって彼と公爵夫人以外は出入り禁止とされていた。その使用人達の間で『開かずの間』などと影で言われ始めた娘の部屋で、公爵夫人が細く巻かれた手紙と思われる物を見付けたのはエレオノール達が光り輝く『扉』の向こうに消えてから十日も経ってからの事。その小さな手紙は謝罪と無事を告げる言葉で始まっていた。

『お父様、お母様。私の勝手な行動でご心配をおかけしている事と思います。お詫びの申し上げようもありません。私とカトレア、二人ともこちらで無事に過ごしております。勿論ルイズが元気でいる事もこの目で確かめております』

見た事もない様な薄さと手触りの紙に、長女が書いた見慣れた文字の文をそこまで読むとヴァリエール公爵は自分の妻を見る。その視線を受けて妻のカリーヌは続きを促す様に頷いた。

『私達が来てしまった此方の世界には驚くべき事に魔法が存在しておりません。私自身、此方では魔法が使えないのです。砂漠（サハラ）の果てロバ・アル・カリイエ（東方）でも何処でもない、ハルケギニアとは全く違う“異なる世界”です。どんなに時間を掛けようとフネや馬車では到達出来ない場所で、トリステイン、いえハルケギニアでは見た事も聞いた事も無い物で溢れ驚愕してばかりいます。此方の方々に“異なる世界”とハルケギニアの関係について説明を受けましたが、恥ずかしながら難しすぎて言われた事の半分も理解できませんでした。この世界からハルケギニアへ渡るには特別な機械（カラクリ）で件の扉を作らなければならないのですが、私とカトレアの二人が同時に扉を潜った事で機械に予期せぬ大きな負荷がかかってしまい、酷く壊れてしまったそうです。私の不注意でルイズの帰還を遅らせ、また、こちらの方々にも大変な迷惑をかけてしまいました。機械の修理にはどんなに急いでも二月（ふたつき）以上、その後の検査や試験に一月（ひとつき）以上かかるとの事で、私達がそちらに戻る事が出来るのは少なくとも

三月(みつき)以上は後になるだろうと聞かされております。それまで何の連絡も出来なくてはお父様お母様が心配なさるだろうと、こちらの学者の方々が基礎実験で使っていた機械を無理矢理改造して手紙を送る事が出来るようにして下さいました』

夫がそこまで読むと公爵夫人は「帰ってきたらエレオノールには仕置きが必要ですわね」と厳しい目つきで言い放つが、全体はどこか安堵した雰囲気を浮かべていた。

そんな妻に公爵は苦笑しながら「程々にな」と言うと続きを読み進める。

『私達がこちらに来て非常に喜ばしい事がありました。カトレアの病がこちらの医学で治療が出来るものだと判ったのです』

そこまで読んで公爵は思わず「なんと！」と声を上げる。カリーヌも驚きの表情を顕わにして「あなた、続きを」と夫を急かした。

『数多(あまた)の水メイジが匙を投げたカトレアの病を、魔法が無いこちら世界の医学だと治せるのです。俄には信じられませんでしたが治療に関わる様々な事を見せていただき私は信じるに値すると思いました。それにカトレアも治療を受ける決心をし、今はその準備をしております。治療の関係で二月(ふたつき)は部屋の外に出られない為にカトレアには不自由をかけますが、順調に治療が進めば私達が帰る迄に完治させる事が出来るだろうと主治医の先生は仰りました』

そこまで読むとヴァリエール公爵は「本当にカトレアの病が治るのか……？　あれに人並みの生き方をさせてやる事が出来るのか……」と声を詰まらせながら誰に問うでもなく言う。公爵夫人は俯きながら両手で顔を覆っている。微かに嗚咽が聞こえてくる事から泣いているのだろうか、烈風の二つ名を持ち苛烈な事で知られた元マンティコア隊隊長の彼女も、結局は娘の為に心を痛める普通の母親だった。

『嗚呼、本当はもっと詳しく色々とお伝えしたいのですが、改造した機械の都合とかで送る事が出来る手紙の大きさはこれが限界らしいのです。またこれを送った後で機械が壊れて使えなくなる可能性

もあるとの事で、帰る直前まで連絡を差し上げられる事が出来なくなるかも知れません。ですが、こちらの方々は私達を帰すと約束して下さいましたし、私達もそれを信じます。必ず三人揃ってお父様お母様の元へと戻りますので、この後に手紙が届かなくても、どうかお心を痛めないで下さい。―親愛なるお父様お母様へ、エレオノールより―』

長女からの手紙を読み終えた公爵と夫人は娘達の無事を知り、その顔には安堵の表情が浮かんでいる。

「彼等には恩を受けてばかりで心苦しいな」

ぽつりとヴァリエール公爵が呟く。ルイズの保護ばかりか、不始末を冒したエレオノールを咎(とが)めるでも無く、剰(あまつさ)えカトレアの病までをも治すと言う彼等“異郷の民”に何ら報いる事が出来ず、且つ事態を傍観する事しか出来ない自分に歯痒い思いを抱いている事を、公爵は妻に打ち明ける。

「歯痒いのは私も同じです。でもエレオノールが書いてある様に“異なる世界”であるなら私共(わたくしども)ではどうする事も出来ませんわ。それに彼等の行いを見ていると見返りを求めての事とも思えませんし」

「確かに。子供一人を家に帰すと言うだけで何百人という人員が働いているとの事だ。その様な人々に金銀宝石の類を贈っても喜ぶとは思えんな。こちら(ハルケギニア)では考えられない程のお人好しなのかね、異界の民は」

「そうですわね……。もしカトレアの病も治るのなら彼等には感謝しても感謝しきれません。それはそうと、あなた。これから三月もの間どうやって事を公にしないかを考えませんと。エレオノールとカトレアの姿が見えない事で、使用人達の間に“また”良からぬ噂が広がっておりますし……」

悔しそうに唇を噛み俯く公爵夫人。そんな感情を顕わにする彼女を見ながら公爵は「ふむ」と考え込むと「信頼に価する家臣はジェローム一人だけだな」とカリーヌに問うと「残念ながら」と応えが返って来る。

「やれやれ。ルイズの失踪から変わらず忠節を保っているのは彼奴(あいつ)だけになってしまったか。居た仕方ない。カリーヌ、ジェロームを此処へ。彼奴に事の次第を話して三人で対策を練ろうではないか」
そう言う公爵の顔は、若い頃に戻ったかの様に生気に満ち溢れたものになっていた。

＊　＊　＊

ウォロス、“高次(ハイペリア)の異境”ではエントヴァースと呼ばれる世界にある惑星上に彼女は居た。走馬灯幻想世界(ファンタズマゴリア)とも呼称されていた世界で、彼女はヤヌスや地球で経験した以上の衝撃を味わっていた。彼女の隣には赤毛の女性が見守るように佇んでいる。
建前上、惑星ジェヴレンに様々なサービスを提供するヴィザーと同等のアーキティクチャーで作られたコンピュータ“ジェヴェックス”。ヴィザーが惑星は疎かｉ－スペース情報通信網によって大規模な分散システムを構築されているのに対し、ジェヴェックスは過去にジェヴレン人がヴィザーを凌駕すべく、秘密裏にジェヴレン星系にあるアッタンの地下を惑星規模で刳り抜いて設置した集中型の超大規模データ処理マトリックスで構築されている。
その結果、情報マトリクスを構成する素子の励起状態が仮想的な“情報量子”を構成し、膨大な数の素子が存在する事による情報量子の相互作用によって実在としてのマトリックス宇宙『エントヴァース』は誕生した。そのエントヴァースに存在する惑星ウォロスでは生命が進化し知性を持つに至った。その知的存在はエント人と呼ばれている。
ヴァリエール家の長女エレオノールは、いや、正確に言うならヴィザーによってエントヴァースに適合した存在としての彼女の分身(サーロゲイト)が、このウォロスに降り立っているのだ。
「なんて事なのかしら。世界が世界を内包するだなんて……」
エレオノールがエントヴァースを訪れる事になった切っ掛けを説

明するには、少し時を遡る必要がある。

「それじゃカトレア、がんばってね」
「はい、姉さま。でも、いつでもお話が出来るのですから改まって言う必要も無いんじゃないですか？」
ワクチン等の接種が終わり、エレオノールには室外での活動許可が出た。今の彼女は支給されていた寝間着ではなく、医科工研の女性看護師が見立てた簡素ながらも動きやすいようにとブラウスと膝丈のスカートに身を包んでいる。
全くの余談だが、着替えの時にサイズの合った地球製ブラを着けさせられ、見た目で胸の膨らみが増した事で感涙に噎(むせ)んでいると、それを見た（胸のサイズ的な意味で）同志の看護師から「矯正ブラやパッドというのもありますよ」と耳打ちされ、帰る時には是非ともそれ等を持てるだけ持たせてもらおう、と密かに決意するエレ姉さまだった。
さて、これから自由に行動出来るようになるエレオノールとは逆に、カトレアは本格的な検査と治療が始まる。まだ検討段階ではあるが、自己免疫性疾患の遺伝子治療と心臓疾患の手術を並行して行う方向で話が進められていた。
「ふふふ、確かにね。出来るだけ連絡を入れる様にするわ。けど、あなたの治療の都合もあるだろうし、毎日とはいかないかもね」
「そうですわね。でもルイズはそんな事お構い無しの様な気がしますわ。あの子、今でも毎日連絡して来ますもの」
用も無いのに専用回線を使い、他愛のない話しをしてくる彼女達の小さな妹の事を思い出してカトレアはくすくすと笑う。それに釣られてエレオノールも思わず「あの子ったら、こちらに順応しすぎよね」と笑みを浮かべる。その時、着用しているイヤーセットからヴィザーの「もうすぐ時間だよ」との声が聞こえた。

「あら大変！　お待たせしちゃ悪いからそろそろ行くわね、カトレア。また後で連絡するから」
「はい、お話し楽しみにしてますわ。姉さま、いってらっしゃい」
手を振るカトレアに見送られ、エレオノールは二重扉になっているエア・シャワー室を抜け、病室手前にある緩衝室を通り廊下へと出ると、ヴィザーに案内されながら目的の場所へと向かう。向かった先は医科工研の所長室。扉の前に立ちノックしようとすると「ああ、待っていたよ」とイヤーセットから宝条の声が聞こえドアが自動で開く。どうにも慣れないわね、と思いながらも彼女は「失礼します」と言い入室した。
そこには宝条と二人のテューリアン、一人はエィドレフだろうとエレオノールは思うが、もう一人は彼に比べて肌の色が少し明るい。エィドレフとはまた違ったデザインをした桜色の衣装を着ておりどことなく柔和な印象を与えている。そしてその隣には始めて見る顔の地球人と思しき女性。こちらは赤毛の白人女性で髪を後ろで纏めてカチっとしたスーツに身を包んでいる。
「紹介しよう。エィドレフ君の隣に居るのがセファウ君、ガニメアンの女性だよ。そちらはエント人の“アヤトラ”でカーリシ君。セファウ君、カーリシ君。こちらは件のお客様でエレオノール女史だ」
宝条にそう紹介された二人は立ち上がると「＜シャピアロン＞号第三世代ガニメアンのセファウです」「アヤトラのカーリシよ。よろしく」と軽く自己紹介をした。
「初めまして。トリステイン王国ラ・ヴァリエールが長女、エレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールと申します。以後お見知り置きを」
エレオノールが二人に向かい、ハルケギニア貴族の嗜みとしての優雅な礼をしながら初対面の二人に挨拶をすると全員が目を丸くした。
「いやはや、君のフルネームはそんなに長い物だったのかね？　驚いたよ」と呆れた様に言う宝条に対してエレオノールが内心“え？

驚くところはそっちなの？”と思いつつも何食わぬ顔で「今まで通り、エレオノールで構いませんわ」と返す。
「ところで宝条先生、お二方の人種、いえ種族ですか？　は始めて耳に致しました。宜しければどのような方々なのか御教示をお願いしたいのですが」
「それじゃ最初にそっちを掻い摘んで話をするとしようか。その後に君の希望を実現する為の方法についてを説明する、で宜しいかな？」
そう言うと宝条は、一世紀以上前に起こった出来事をエレオノールに語り始めた。

ガニメアンとは、その存在の痕跡が木星の衛星ガニメデで派遣された事から地球人にそう呼ばれる事になった種族であり、太陽系にあった惑星ミネルヴァで草食動物から進化し、二千五百万年前には恒星間航行が可能なまでに文明を進歩させた知的種族である。ガニメデでの彼等の痕跡の発見直後、地球人の前に生きたガニメアンが姿を現す事になる。
二千五百万年前、彼等＜シャピアロン＞号のガニメアン達は、恒星イスカリスで行った実験が失敗し、主星が新星化（ノヴァ）するイスカリス星系から命からがら脱出した。
その脱出の際、不幸な事に宇宙船の減速機構がオーバーホール中であった為に彼等は故郷である太陽系に到着しても、メインドライブであるブラックホールのトロイド運動を減速する事が出来ずに、それが発生する時空の泡に閉じこめられたままとなってしまったのだ。
宇宙船が減速するまで船内時間では十数年、しかし外部世界では二千五百万年の時が経過して漸く＜シャピアロン＞号は通常空間へと浮上する。そして彼等は地球人と邂逅し自身の故郷ミネルヴァが失われている事を知る。地球人と友誼を交わした後、遙か過去に彼

等の同胞が旅立った先、そしてその子孫が暮らすテュリオスへ紆余曲折を経て到着を果たしたのだ。ガニメアンは遙か過去からの来訪者でありテューリアンの直接の祖先。セファウはその＜シャピアロン＞号の初代乗組員であるガルース達から数えて三世代目の子供達の一人だ。

一方、カーリシはジェヴェックスの中にある情報量子によって構成された内宇宙（エントヴァース）の出身者でエント人だ。その昔、彼等の一部は修行によって“解脱”しハイペリアへ至る事を望んだ。ハイペリアとは実は惑星ジェヴレンの事であり“解脱”とはジェヴェックスにニューロ・カップリングしているジェブレン人への“憑依”であった。“憑依”が行われると、その対象となった者の精神は抹殺されエント人の精神によって上書きされてしまう。“憑依”の犠牲者は周囲から見ると人格が変わったり精神に異常をきたした様に見え、この事はジェヴレン社会では長い間の謎とされて来た。

この“憑依”された者を“アヤトラ”と称したのはルナリアンの起源やガニメアンとの邂逅、テューリアンとの接触などに多大な貢献をし歴史にその名を残す科学者ヴィクター・ハント。彼はテューリアンやガニメアンに協力し、エント人のジェヴレニーズへの大量憑依を目論んだ光軸教の＜救済主（デリヴァラー）＞ユーベリアスの野望を阻止した事でも有名である。彼に対する後世での評価は「科学者と言う肩書きの冒険者」となっている。閑話休題。

光軸教事件の後、ハイペリアへと“解脱”を望むエント人の声に応える為に、テューリアンとジェヴレニーズの研究者達によってエント人の精神構造に適合した人造の肉体が遺伝子工学を駆使する事で完成する。エント人の修験者で“解脱”を希望し且つ資格があると認められた者は、その存在を外宇宙（エクソヴァース）にある造られた肉体へと宿らせる事が可能になった。そうして新たに“解脱”した者達も、過去からの慣習で“アヤトラ”と呼ばれている。

説明を聞き終えたエレオノールは呆然としていた。正直、あまりにも途方もなさ過ぎて信じられないと言った風である。とは言え彼女も研究者の端くれ、暫くすると驚愕よりも好奇心の方が上回って来る。それにハルケギニアにも翼人や韻竜、エルフ等の人語を解する種族が居るではないか。と気を取り直したエレオノールに宝条が言う。

「この二人を呼んだのは他でもない。セファウ君は走馬灯幻想世界（エントヴァース）関連の専門家でね、カーリシ君にはナビゲータをお願いする事になっている」

はて？　と首を傾げるエレオノールを見て、宝条はクスクスと笑う。

「三ヶ月で実時間三年以上に匹敵する学習を行うという裏技に必要不可欠な人材だよ。では本題であるこの事についての説明を始めるか。まあ、乱暴な言い方をするとだね、君の分身を幾つも作って別々な授業を受けさせた上で、最後に本人に記憶を統合すると、まあ、そう言う事だ」

エレオノールはそれを聞いて目を丸くした。分身？　どういう事？　彼女がそこまで考えた時、エィドレフが宝条の後を引き継いで説明を始めたので大人しくそれを聞く事にする。

「ヤヌスで体験した様に、ヴィザーは人の記憶を読み取る事が可能なのはご存じですね。しかしヴィザーは許可さえ貰えれば記憶どころか無意識も含めて、その人の人格そのものを複製する事が可能なのです。簡単に言うと貴女がニューロ・カップラでヴィザーに接続して許可さえ出せば、貴女と全く同じ意識構造をそっくりそのまま“情報の塊”として複写します」

そこまで良いですか？　とエィドレフはエレオノールの確認すると話を続けた。

「さて、このままでは“情報の塊”は只のデーター、言い換えると写本みたいな物で貴女の分身足り得ません。これに意識活動をさせるには、実はそれなりにヴィザーのリソースを使う事になります。

貴女の分身を活動させると、局所的にですがヴィザーの処理に遅延が生じるので、ヴィザーの運用には余裕を持たせたい我々としては極力避けたい処理でもあります」

エィドレフはセファウへと視線を向けると、彼女が説明を引き継ぐ。

「そこで貴女からコピーした“情報の塊”を、先程の話に出てきたエントヴァースに適合する様に再構成し、そこに送り込む事で独立した意識体として活動させます。エントヴァースはジェヴェックスの情報素子が構成する情報量子世界ですので、貴女の分身（サーロゲイト）が活動する事でヴィザー及びジェヴェックスの負荷が増加する事はありません。視覚を始めとする各種感覚についてはヴィザーが実行する置換ルーチンでラッピングする必要がありますが、負荷レベルは一人をニューロ・カップリングするのと同じで済みます。この方法なら、貴女の分身を増やしてもヴィザーに掛かる負荷は増えた分身の置換ルーチンの処理分だけ。さて、その分身がエントヴァースで活動している間ですが、貴女自身がヴィザーに接続している必要はありません。そうですね、週に一回、記憶統合処理を行えば事足ります」

セファウはそこで一旦言葉を句切る。

「ところが、この記憶統合処理で問題が発生する場合があるのです。テューリアンは平気なのですが、地球人やジェヴレン人の多くは記憶統合後の“同時に進行する複数の記憶が混在する状態”に激しい違和感を覚えます。この違和感は時間の経過と共に小さくなり、個人差もありますが一週間から一ヶ月の間には解消します。しかし、この違和感への耐性が低い場合に繰り返し記憶統合処理を行うと、意識の恒常的な混濁を起こして植物状態になる恐れもあります。統合される意識の数が多ければ多いほど、そのリスクは指数関数的に大きくなります」

そこまで聞いて顔色を悪くしているエレオノールを見た宝条は「そう心配しなくても大丈夫。だからこその適性検査だしね」と話しかけた。

「それで、どんな検査をするのですか？」
おずおずと尋ねるエレオノールにセファウが応える。
「まずヴィザーに貴女の分身（サーロゲイト）を作らせて、その分身にエントヴァースへ行って貰います。カーリシがナビゲート役として付いて行きますので安心してくださいね。その後、こちらの貴女は覚醒した状態でエントヴァースに居る分身の様子を、ヴィザーを通して観察して頂きます。その後で貴女と分身の記憶統合処理を行いますが、その時の貴女の精神にかかったストレスその他の状態をヴィザーが読み取り、解析して可・不可の結果をすぐに提示します。但し全て貴女の承諾が得られなければヴィザーは何もしませんし出来ませんので、ね？」
そう言うとセファウは地球人の微笑みを真似てエレオノールを見たのだった。

エレオノールの分身（サーロゲイト）がカーリシを伴いウォロスに降り立ったその時に時間を戻そう。
エレオノールが目を閉じて横たわるニューロ・カプラの傍で、宝条達はヴィザーから思いがけない報告を受けていた。
戸惑いながら「それは間違い無いの？　彼女は昏睡状態のはずよね？」と問うセファウに、ヴィザーは「間違いありません。エレオノール女史の脳内にウォロス上に居る分身と同一の思考・記憶のパターンが現れています」と答える。
「君がアップデートしている訳ではないよね？」
「それはありません。彼女の本体と分身は完全にセパレートされている状態です。置換ルーチンからのデーターリークは認められず、ニューロ・カプラとｈ－リンクノードについての独立診断ルーチンの実行結果は問題無しです」
それを聞いてセファウは驚きの表情を浮かべて宝条を見る。宝条

は腕を組み暫し考えると「エレオノール女史の分身を一時的に“活動停止”にしても問題は無いかね？」とセファウに質問した。
「それは問題無いと思います。ヴィザー、局所的な情報量子の活動停止は問題無しよね？」
「はい、周囲に影響は出ませんし、あの世界でのルール違反は過去に行っていますから問題ありませんよ」
そう言うヴィザーの声は心なしか懐かしさを含んでいるようでもある。その時、エィドレフが何事かに気付いたらしく「宝条先生、活動停止はちょっと待って頂けますか。それとルイズ嬢をモニターするのに使っていた機器はまだ撤去していませんよね」と尋ねると、宝条は「ああ、そっくりそのまま残っているが」と答えた。
「ヴィザー、ここに設置してあるＣＳ２ＤＡＶ（共通余剰空間次元軸振動モード共鳴検知装置）を今から稼働状態に持っていけるか？」
「エージングに十五分かかりますが問題ありません」
「分かった、起動してくれ。それと平賀先生達にも連絡を頼む。データーはリアルタイムで送ってくれ」
何事かと問いかける宝条とセファウ。エィドレフは横たわるエレオノールと、モニターに映る彼女の分身を交互に見る。
「すっかり忘れてましたよ。彼女もルイズ嬢と同じ魔法世界の住人だと言う事です」

オムニプレックス・ウーマン　（1）（後書き）

活動報告でお約束していた週明け更新、何とか間に合いました。
ゼロの使い魔で代表的な魔法と言えば“遍在”。独立した意識と実体を持つ分身って、どんだけ反則なのかと。しかし「ホーガン作品で、しかも「ガニメアン」シリーズで“独立した意識を持った分身”と言ったらこれだろ」って事でエレ姉さまにはエントヴァースへ飛んで貰いました。その結果、また地球人とテューリアン、そして今度はガニメアンも加わって右往左往するんですけどね。
ガニメアンとエントヴァースの件についての詳細は、それぞれ「ガニメデの優しい巨人」「巨人たちの星」と「内なる宇宙」の上下巻（全て創元ＳＦ文庫）を読んで頂ければ宜しいかと思います。と言っておいて何ですが「内なる宇宙」が書店にあるのかは不明。「星を継ぐもの」「ガニメデの優しい巨人」「巨人たちの星」の三作は近所にある幾つかの書店で必ず見かけるのですが……。

オムニプレックス・ウーマン　（2）

エレオノールとカーリシが降り立ったのはウォロスにある聖山の一つ、ナゼロソ山の麓。まるで目の前に壁が聳えるが如く、見上げる程に急峻なこの山の頂は霊気の通り道であり、エント人が“解脱”をしてハイペリアへと“昇天”する為の聖域。山の中腹のそこかしこから幾つもの滝が水を落とし、その飛沫は麓に至る前に霧となって辺りを霞ませる。そんな光景が目の前に突然現れたのだから衝撃を受けない訳が無い。エレオノールは驚きに自身の口が開いているのも気付かずにその光景に見入っていた。

「調子はどうかしら？」

カーリシからの不意の問い掛けに、ナゼロソ山を見上げていたエレオノールは彼女の方を見て目を瞬かせた。カーリシの服装はニューロ・カプラに横たわる前と違い、ゆったりとした丈の短いスカートの様なチェニックに古代ローマ風のサンダルを履いた姿となっている。

「平気よ。少し驚いただけ」

そう言うとエレオノールは改めて周囲を確認する。彼女達の周囲は膝丈程の草で覆われた草原が広がっており、その中を一本の狭い道がナゼロソ山に向かって延びている。

ふと自分の足下を見ると、自身もカーリシと同じ様なサンダルを履いているのに気付く。服装も隣に立つ赤髪の彼女と同じデザインでやや長めの物を纏っているらしい。

「ここは、どこかしら？」

混乱した状態から少ずつ回復したエレオノールは、現状を把握しようとしてカーリシに問い掛けた。

「ウォロスにあるナゼロソ山の麓よ。この先に導師エシキスの住む庵があるの」

「導師エシキス？　どういう人？」

「私の師匠で“解脱”に導いてくれた恩人。善い人なんだけど一つだけ問題があるの。アレさえ無ければ、今頃は弟子を沢山抱えてるはずなんだけどね……」
物憂げな表情で「全くあの糞爺(くそじじい)は」と毒吐きながら嘆息するカーリシ。そんな彼女の様子にエレオノールは呆れながらも尋ねる。
「恩人である師匠に何て言い種(いいぐさ)かしら。その方の庵の近くに居ると言う事は、今からその方に会いに行くのよね？」
「貴女のガイドをする序(つい)でよ、序で！　アヤトラとしてジェヴレン(ハイペリア)に“昇天”するとね、なかなかウォロスには来られないからガイド役を引き受ける際に報酬の一部条件としてお願いしたの。こちらに来るからには顔くらい出さないと不義理の誹りは免れないから」
「貴女にとっては臨時の帰省でもあった訳ね。でも帰省なら先に親御さんの所に行くのが筋じゃないかしら？」
そうエレオノールが問うと、カーリシの表情は益々憂鬱な影を帯びて来る。
「私ね、早くに両親を亡くしてるのよ。導師エシキスは師匠にして私の実の祖父で育ての親。他に親類縁者の居ない私の、唯一人の肉親、そして……」
そこで言葉を句切ると、彼女は驚くエレオノールを見詰めながら諦めた様な表情で告げる。
「世間では好色な破戒導師として有名だった人。今は枯れて実害が無くなったとは言え、はた迷惑なスケベ爺に変わり無いわ」
その言葉を聞いてエレオノールは何故かその脳裏に、嘗て自分が在籍していた学院の恩師―豊かな白髭を蓄え柔和な笑みを浮かべた老人―の姿をありありと映しだしたのだった。

「ＣＳ２ＤＡＶによる観測データーにはルイズ嬢に起きた記憶転写の時と類似した超立方振動が認められます。また、エレオノール女史と分身の間にｈ－リンク経由のデータースストリームが存在してい

ません。“二人”はｉ－スペース情報網上では完全に分離した別個の存在ですが、昏睡状態にある彼女本体に起こっている意識反応はエントヴァースに居る分身の意識反応と完全に一致しています。これについてデーターリンクに異常が無いか、外部診断機構で検査しましたが異常は認められませんでした。これは私に生じたエラーに因るものではありません」

ヴィザーが予備運転（エージング）を終えたＣＳ２ＤＡＶによって計測された共通余剰空間で起きている変化と、“エレオノール達”の意識構造内に起きている事を地球の医科工研に居る面々に報告する。と、その意味を理解した宝条が今起きている事が信じられずに思わず渋面を作る。

「ルイズ嬢の事例と同じ事象が観測されているとは言え、質の悪い冗談にしか思えない……。どうしてエントヴァースの存在と現実の肉体が何光年も離れて直接相互作用するんだい？　ルイズ嬢の“魔法”ですら未だに解明出来ていないのに、こうもまた次々と常識外れが起こるんだね？」

「宝条、取り敢えず落ち着け。現にこうして観測的事実として目の前にあるんだから冗談では片付けられん。エィドレフ、君の見解を聞かせてもらえるかな」

平賀はスクリーンの向こうから取り乱す宝条を宥め、エィドレフに意見を求めた。彼は筑波にある研究所に協力している企業での会議に参加していたのだが、事態の報告を受けるや会議を中座して急ぎ研究所の自室に戻ると医科工研に回線を繋いできたのだ。

「見解も何も、正直なところ私も宝条先生と同じ気持ちです。共通余剰空間での超立方振動とコンパクト化された余剰次元についての研究は端緒に就いたばかり。発生メカニズムについては手探りの状態ですからね」

諦めた様にエィドレフが言うと続けてセファウが発言する。

「エント人の一部は、修行によって彼等が“通力”と呼ぶ意思の力、地球人的には超能力と言った方がしっくり来ると思いますが、それ

を用いて“エントヴァースの実存”に干渉する事が出来ます。しかし、それはあくまでもエントヴァース内に限られた事です。情報量子世界から私達の宇宙（エクソヴァース）に対して、ヴィザーもニューロ・カプラも介さずに直接的にエネルギー物理的な干渉を行うのはどう考えても不可能です。……不可能ですが、これを見る限りそう言い切る自信を無くしますね」

「確かに脳内での神経細胞の生化学反応は極論すればエネルギー量子である光子（フォトン）を媒体とした物理現象だしなぁ。しかし何時までも推測だけじゃ埒が開かない。こうなったら宝条の言っていた事を実行しようじゃないか。エレオノール君の分身を一時活動停止させて、彼女の本体を覚醒させる。その状態で活動停止している彼女の分身に意識活動が生じるかどうかをヴィザーが確認する。それでｈ－リンクが関与しない未知の相互作用が“彼女達”に発生している事の判断材料に出来るだろう、って事で良いんだよな？　まあ、超立方振動が確認されている以上、ルイズと才人に起こった事と似たような現象が起きているんじゃないか、とは思うのだがね」

その場に居る全員が平賀の提案に賛成する。

「セファウ君、分身の一時活動停止と本人の覚醒、その後の記憶統合に問題は生じそうかな？」

「いいえ、元々の予定では分身の一時活動停止をせずに本人を覚醒させて、その後に記憶統合を行う予定でしたから。それに比べれば彼女に与えるリスクは皆無に等しいですね。ただ、あくまでもしもの話ですが……彼女と分身が既に記憶の交換を行っているのなら統合する必要はありません」

宝条の問いに彼女はそう答えた。それを聞き平賀はヴィザーに指示を出す。

「エントヴァースに居る二人に、エレオノール君の分身を一時的に活動停止すると連絡してくれ。その後でエレオノール君の本体を起こし、もし同意が得られるなら彼女自身に聞きながらヴィザーに記憶を照らし合わせて貰うのが手っ取り早いだろう」

そう言うと平賀は誰に言うでも無く「こりゃ前に話した与太話が本格的に与太話じゃなくなりそうだな」と小さく呟く。その唇は普段の彼からは考えられないほどに白くなり、そして微かに震えていた。

カーリシの先導で歩いて行くと、程なくして質素な作りの庵が見えて来た。円柱状に土壁が巡らされ、その上に被さる様に円錐状の板葺き屋根が乗っている。窓にはガラスでは無く雨除け板が嵌め込まれる仕組みなのだが、その板は今は明かり採りの為に支え棒で斜めに開けられている。その庵の質素な佇まいは、エレオノールにヴァリエール領で見る農民の家を思い出させた。

彼女達が庵に近付くと、不意に傍らの草むらから奇妙な生き物が飛び出して来る。カンガルーの様に二本の足で飛び跳ねながら近づいて来るそれは、人間の幼児程の大きさで全身が茶色の鱗に覆われ、頭だけは毛皮で覆われた犬の様な姿をしていた。

二足歩行をする犬、或いは鎧を着けたカンガルーの様な姿に「コボルト？」と驚いて数歩下がって警戒するエレオノールに、カーリシが「大丈夫よ。害の無い獣よ」と告げる。

「これは導師が飼っているニャスクだわ。ニャスク、久しぶり。私の事を覚えてるかしら？」

そう言って彼女は掌を差し出すと、獣はその尖った鼻先で一頻り（ひとしきり）“ふんふん”と掌の臭いを嗅いだ後にカーリシの顔を確認するようにじっと見る。暫くするとニャスクと呼ばれた獣は目を細め、柔らかい毛で覆われたその頭をカーリシの掌と言わず腕全体に甘える様に擦りつけて来た。

「ちゃんと覚えててくれたのね、嬉しいわ。ところで導師は留守みたいだし……。何処に居るか知ってる？」

そう尋ねられた獣は、鼻を一回鳴らしてカーリシから離れると、庵から左の林へ続く小径（こみち）の方へと跳ねて行き“こっちだよ”と言い

たげなふうに二度程振り返る。それを見たカーリシは「“霊石の河原”の方ね」と言うと獣が跳ねて行った方へと歩き出す。
「導師は日課の瞑想中らしいわ。行きましょう」
そう促されエレオノールは、後ろで緩く纏めた赤髪を揺らしながら先を歩いて行くカーリシを慌てて追いかけた。小径は角の有る小石が数多転がっており、皮のサンダルでは歩き難い事この上ないの。だが、そんな事を気にした風も無くカーリシは滑る様に歩いて行く。
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　貴女こんな酷い所をよく平気で歩けるわね」
カーリシの後を追いながら、あまりの足場の悪さに悪態を吐くエレオノール。その声に振り返るとカーリシは舌を出しながら“しまった”と言う様な表情をして謝る。
「ごめんなさい、外宇宙（エクソヴァース）の人はヴィザーの助けが無いと“通力”が使えないのを、うっかり忘れてたわ」
そう言うと彼女は手をエレオノールの足下へ向ける。するとカーリシの手から光の波が広がりエレオノールの足を包み込む。驚くエレオノールに「貴女の足裏と地面の間に間隙が出来る様にしたわ。どう？　もう痛くないはずよ」と何でもない事の様にカーリシは言う。確かに足裏に感じていた小石のごつごつした感じが消えて、まるで絨毯の上にでも居るかの様だ。
「これは“レビテーション”？　いえ、呪文を唱えてなかったから先住魔法？」
驚きに目を丸くして思わず聞き返すエレオノール。そんな彼女の反応を見てカーリシは思わず笑い出した。
「な、なによ！　笑う事ないじゃない！」
顔を真っ赤にして抗議するエレオノールにカーリシは尚も笑いながら言う。
「貴女の言った事が何の事か分からないけど、ここに居る貴女は“あちら（クソヴァース）”から見ると、こちら（エントヴァース）で仮の“実身（エ）”を与えられた意識構造だけの分身だって事を忘れたの？　それにここは外の宇宙とは全く

違った法則が支配する世界。此処で貴女が見たり感じたりしている事は、ヴィザーが全て貴女の意識構造に適合する様にと感覚を変換している結果だって事を覚えておいてね。まあ難しい話は置いとくとして、私の用事を済ませたらオレナッシュの街でも案内するわ。きっと貴女にとって珍しい物が見られるわよ」

そう言って赤髪の彼女は、釈然としない表情のままで固まっているエレオノールの手を引いて林の中、“聖石の河原”へと向かう小径を進んで行った。

「ほう、珍しや。斯様(かよう)な寂れた場にハイペリアからの使者が降臨なさるか」

清流が勢い良く流れる傍の開けた場所で、人の背丈の倍以上はあろうかという大きな岩の上に座して瞑想していた導師エシキスは閉じていた瞼を開く。だがその姿勢は微動だにしない。

「霊気の流れから見るに降臨されしは二人の御使い。はてさて、弟子の一人も居らぬ導師に何用であろうか。この老骨を召される為に降臨されたなら出迎えに行かぬは礼を失すると言うもの」

目を開いてから暫く、そう言うと導師は胡座のまま宙に浮き上がり、そのまま大岩の上から地面へと降りると自らの足で立ち上がる。その時に何を感じたのか「おお」と声を上げた。

「此は懐かし！“解脱”を果たして“昇天”を許された最後の弟子にして我が孫が発する“通力”の気配ではないか。使者への随伴を許されて再臨するとは何とも誉れな事よ」

導師は嬉しそうに呵々と笑うと自らの庵へと歩を進めようとしたが、何かを思いその足を止める。

「ふむ、我が孫となればニャスクが案内するであろう。ここは待つも一興か」

そう言うと導師エシキスは河原にあった手頃な形と高さを持つ石に手を翳すと、果たしてそこには腰を下ろすに丁度良い石造りの丸

椅子が現れていた。彼は自らの庵へ続く小径へと目を向けながら椅子に腰掛けると、使者と使者に随伴しているであろう孫を待つ事にした。

暫くするとエシキスが予想した通り林の小径から彼の飼う獣が飛び出して来る。

「ニャスクよ、御苦労。して、訪れたのは我が孫であったか？」

飼い主に声を掛けられたニャスクは飛び跳ねながらエシキスの傍まで来ると肯定するかの様に小さく“くぅ”と鳴いた。

「そうかそうか。やはりカーリシであったか。それは重畳至極」

満足そうに頷くと、エシキスは懐から乾し肉を一切れ取り出すとニャスクに与える。彼の獣はそれを口で銜えて受け取ると、両前足に掴み直して美味そうにがしがしと囓り始めた。

ニャスクが乾し肉を食べ終わる頃、エシキスの待ち人達が姿を現した。それを認めた導師は椅子から立ち上がり、その祖父の姿を見付けたカーリシは小走りで駆け寄る。

「導師エシキス、お久しゅうございます」

祖父である前に自身の師匠であるエシキスに、彼女は跪き弟子としての礼をとる。その弟子であり孫であるカーリシの様子を見て満足そうな笑みを浮かべながらエシキスは語りかけた。

「其方が昇天して其の在り様は変われど纏う霊気は真にカーリシの物。ハイペリアより御使いへの随伴を許されての再臨とは実に目出度い事よ。息災であったか」

「はい。ハイペリアにて叡智を学ぶ日々を恙無く送っておりますれば。導師に於かれましてもご健勝の事と存じ上げます」

カーリシはそう言って顔を上げると、導師エシキスは「して、何故に斯様な老い耄れにハイペリアより使者が遣わされたのか」と問う。

「此の御方のウォロスへの降臨は見聞を広める為でありますれば。師への訪問を許されたるは随伴の褒美にございます」

「そうであったか。物見遊山の旅となれば堅苦しい事も抜きで良かろう。お客人、儂は此のカーリシが祖父にて導師のエシキスと申す者。此度は再臨せし我が孫に引き合わせて頂き恐悦至極」
そう言うと導師はエレオノールに向かって深々と頭を下げた。しかし、その頭を下げられた当の本人は突然話を振られた事で軽く困惑した状態に陥っていた。
え？　蚊帳の外だったのにいきなり何なの？　って言うか何よこの人達の時代懸かった物言いは。トリステインでも今時こんな言い方しないわよ。って、ぞんざいな言い方で挨拶なんてしたらレディとしては失格だし、どんな言葉遣いをすれば良いのかしら、と悩んでいたところで最近聞き慣れ始めた声が頭の中に響く。
「心配せずともそのまま話しても正確に通じるから大丈夫だよ。それと二人に連絡事項がある。返事は言葉を口にしなくても頭の中で考えるだけでこちらに伝わるからね」
「ああ、ヴィザーね！　何よ連絡事項って」
「少し重大な事が発生してね。その確認の為にそちらに居るエレオノール女史を一時的に活動停止状態にする必要が生じたんだ。重大とは言っても危険な事じゃ無いから心配する必要は無い。あと三分程で活動停止のシーケンスを開始するから、それまでに挨拶を済ませておいた方が良いと思うよ。それじゃまた後ほど」
その様子を興味深げに見ていたエシキスは「はて、客人と我が孫に降りし霊気の流れはハイペリアよりの天啓を齎らす物であったか」と呟いた。それを聞いてエレオノールは慌ててカーリシの祖父である導師に出来るだけ優雅に見えるように礼をしながら挨拶をする。
「導師様、初めまして。エレオノールと申します。この度はカーリシさんの案内でウォロスについての見聞を広めようとこの地を訪れました。以後、どうぞお見知り置きを」
深く前に倒した上体を、頃合いを見計らって戻すと彼女の目の前にいつの間にか導師エシキスが移動していた。
はて？　と思う間もなく「あ、駄目！　避けて！」とカーリシが

叫ぶのが聞こえたので「え？　何？」と彼女の方に顔を向けようとしたその刹那、エレオノールは何かごつごつした物に包み込まれる感触を自らの左胸に感じた。
「ほへ？」
間抜けな声を出しながら目を向けると、申し訳程度の膨らみしか無いエレオノールの胸にエシキスがその節くれ立った右手を当て、形をなぞる様に動かしている。
「ほほう。客人は女性（にょしょう）にしては些か胸が薄いと思うたが、此はなかなか。触り心地は稚児の頬にも似て申し分無しであるな。善哉善哉」
呵々と笑う導師エシキスを目にして、何が起きているのか理解が追いつかず混乱するエレオノールは助けを求める様に視線をカーリシの方に向ける。向けた視線の先には、燃える炎の赤髪を正に怒髪天を突く勢いで逆立てて、般若の形相で怒りを顕わにしながら師匠であり祖父であるエシキスを視線で射殺さんばかりに睨むカーリシの姿があった。また視界の端には勢い良く跳ねながら、振り返りもせず一目散に逃げて行くニャスクと呼ばれていた獣が映る。
何とか状況を把握する為に頭を必死に働かせようとするエレオノールだったが、自分の身に何が起こっているのかを理解た事で取り敢えず叫ぼうとしが、その瞬間エントヴァースに居る彼女は文字通り“フリーズ”した。

「ひっ、ぃいやゃぁぁあああああっ！……って夢ぇ？」
ニューロ・カプラの上で目を覚ますなり、エレオノールは素っ頓狂な叫び声を上げると、それに続けて間の抜けた声を発てた。彼女は今し方カーリシの祖父に無い胸を撫で揉み回わされ悲鳴を上げた途端、地球にある医科工研でニューロ・カプラの上に横になっていた訳である。夢から覚めた様な、それでいて妙に現実感の有る記憶の感覚に目眩を感じながら彼女は上体を起こすと辺りを見回す。
まず宝条が俯いて肩を振るわせながら「くくっ……」と何やら耐

えている様が目に入り、次いで隣のニューロ・カプラにはスーツ姿のままカーリシが横たわり目を閉じているのを確認すると、赤髪の彼女はまだウォロスに居るのだなと理解した。
「やあ、災難だったね。気分は？」
まだ少しぼんやりとしている様子のエレオノールに、ホロスクリーン越しの平賀教授は笑いを噛み殺して声をかける。
「気分は……そう悪くありません。ですが機嫌についてはすこぶる悪い状態ですわ……。ウォロスでの出来事を覚えていますから、記憶統合とやらは上手くいったのですね？」
口を尖らせ不機嫌オーラ全開状態でそう確認するエレオノールの言葉に、その場に居合わせた全員が驚きで目を見開く。
「いいえ、貴女に記憶統合処理は行っていないのよ。貴女の分身を停止状態にしたのはね、その“ウォロスでの記憶”を確認する為なの」
申し訳なさそうに応えるセファウの背後にあるスクリーンには、人形の様に全く動かないエレオノールの分身と、信じられない程に苛烈な光を発するカーリシの“通力”による攻撃を、ひらりひらりと身軽に躱(かわ)し、ある時は杖で往なし続ける導師(エロジジィ)エシキスの姿が映っていた。

＊　＊　＊

エレオノールとその分身に起こった事はルイズの事例にも劣らない、否、それ以上に非常識な事だった。
地球に居るエレオノール本体の覚醒と同時に、エントヴァースで停止状態にある分身に意識反応が起こるのが認められた。この時の彼女はニューロ・カプラから離れた状態であり、どうやっても分身に情報が伝達するはずが無い。それなのに、である。念の為にエレオノールの許可を得たヴィザーが停止状態の分身に起こった意識反応を再生すると、案の定それはエレオノール本体が医科工研で覚醒

してからの記憶だった。
　ルイズと才人の間に起こった記憶の転写や宇宙間ブリッジの発生は、超立方振動を励起していると思われるプランク長以下にコンパクト化されている余剰次元に於いて、未発見の物理法則が関与する相互作用によって起こるのではとの仮定でエィドレフを中心に研究が行われている。しかし、エネルギー量子宇宙（エクソヴァース）と情報量子宇宙（エントヴァース）が相互作用している状態を生じさせるには、必ずインターフェースとしてのソフトウェアとハードウェアが必要になる。それがヴィザーであり、ニューロ・カプラなのだ。だがここに来て、その常識を突き崩す事例がエレオノールによって作り出された。
　本体と分身で起こる原因不明の記憶共有。もしこれがエレオノールの意識構造に対して悪影響を与えるものだとすると、当初予定していた方針は破棄するしか無い。
　セファウを始めとする研究者達には彼女を通して起こる未知の事象に対して、少しでも究明したいと思う欲求は確かに存在する。しかしテューリアンやガニメアンは、ヴィザーの優先基本プログラムを生命の尊重、維持を旨とした事から分かるように、他者を害してまで自身の欲求を貫く様な人種では決して無い。そして一世紀強ほど彼等と付き合って来た地球人達も底抜けにお人好しな隣人達に相当な影響を受けているのは確かだった。
　未知の現象によって生じる記憶共有に因って如何なる弊害が発生するのか全く予測不能であるが故に、エントヴァースでの検査を継続する事でエレオノールに危険を冒させる訳にも行かないとの理由から、彼女の分身をエントヴァースに置いて学習させると言う計画については見直される形となった。
　その決定に激怒したのは誰あろうエレオノール自身。彼女は平賀と宝条、エィドレフやセファウ等の主立った関係者に対して連日の様に抗議を行い、果ては医科工研内で無関係な所員の誰彼を構わず掴まえては不平不満をダダ流しにする。ちなみにエレオノールは医科工研のゲストルームに滞在させられており、所内では比較的自由

に行動出来るよう便宜が図られてはいるが、未だ建物の外には出して貰えずにいる。この辺りの事情もエレオノールをイライラさせている要因の一つと思われる。
この時の様子を目撃したルイズは「まるで目の前の餌を奪われて怒り狂う野生の虎みたい」と評している。お前はそんな場面を見た事があるのかと突っ込みたいところではあるが、エレオノールの様子は当にその表現が当て嵌まるのだった。
そんな女王様(エレオノール)の剣幕としつこさに平賀達はついに折れ、この件についての話し合いの場を設けさせられる事になった。

「それは本当かね？」
「嘘は申しませんわ。カトレアとルイズもお母様が“遍在”を使うのを見ていますから、あの子達からも聞き取りをして頂ければ宜しいかと。何でしたらヴィザーに私の記憶を覗いて貰っても構いません」
話し合いの席で宝条に問われたエレオノールは、先般の同志看護師が自主的に調達してくれた矯正ブラに因って更に一寸(ちょっと)だけ膨らんだ胸を張って言い切る。
エレオノールが平賀達を前にして語ったのは、ハルケギニアで高位の風メイジが使える“風の遍在(ユビキタス)”についてだった。
「それには及ばないでしょう。貴女達が嘘を言う理由が見当たりませんし。それにしても精神力が作る、独立した意思と実体を持ちながら本人と記憶を即時共有する分身。しかも身に着けている物までコピーされる。研究者としてはエントヴァースで見られる様な事象がエネルギー量子世界に起こるという、貴女達の宇宙の基礎構造がどうなっているのか、非常に興味を唆(そそ)られますね」
エィドレフが淡々と洩らすが、イヤーセットから流れる彼の翻訳音声には興奮を示す感情が込められていた。それを聞きながら宝条はエレオノールとの話を続ける。

「とは言っても君は使えないんだろう？　その何だっけ、系統が違うとか何とかで」
「系統もありますが、呪文のクラスが違うのです。土のトライアングルの私では、風の上位である“遍在”は使えません」
「ふむ、しかし今回の検査で君が体験した事が、その風の属性である君の上司やお母さんから聞いていた事と酷似しているのを思い出した、と」
　そう確認する宝条を見詰めながらエレオノールは首肯する。
「ええ。遍在から得た記憶には或る共通点があります。皆さんは明晰夢、現実と見紛う程の夢ですが、それを見た事が有りますか？」
　彼女の問いに平賀と宝条の地球人組は頷くが、エィドレフとセファウは何とも言い難いと答える。ガニメアンとテューリアンの睡眠は地球人のそれと違う為、感覚的に理解出来ない事については仕方が無い。エレオノールは説明を続ける。
「遍在から流れてくる記憶は、複数に及んでも前に見た明晰夢を思い出す時の感覚と同じだと風メイジ達から聞き及んでいます。今回の私の身に起こった事が彼等の言う事にそっくりなのです」
「現在進行中だろうが複数だろうが、送られてくる記憶は本人が知ろうと、いや思い出そうとしない限りは意識の表層に出て来ないって事か」
　宝条が確認すると再びエレオノールは首肯する。それを見て宝条は疲れた表情で続けた。
「意識的に同時進行していた、いや、同時進行している記憶さえも整理された状態で認識出来るとはね。セファウ君からの分析報告には我々と君達で意識構造にそう違いは無いとなっているが、いや、そもそも我々には君達の様な“魔法”が使えないんだっけ……」
　そこまで言うと宝条は黙り込む。そんな宝条からセファウが引き継ぐ様に言葉を発する。
「そして貴女もまた、エントヴァースでの出来事を実体験ではなく明晰夢と同様な感覚で記憶している。だから複数分身による記憶共

有が起きても問題は無いだろうと、そう言う事ね？」
「続行の許可は出来ないな」
エレオノールが口を開こうとした途端、それまで腕を組んで黙って話を聞いていた平賀が口を開いた。その声の響きには有無を言わさぬ迫力があり、流石のエレオノールも出掛かった言葉を飲み込む。
「そもそも我々のプロジェクトの目的は何だったかな？」
平賀の問いに「迷子を無事に親御さんの許へ帰す、それに尽きますね」と何を今更と言ったふうにエィドレフが答える。それを聞き平賀はエレオノールへ向き直り、教え子を諌める様にゆっくりと話し始めた。
「エレオノール君、そう言う事だ。我々は君達姉妹を無事に親御さんの許に送り届ける事をプロジェクトの第一義にしている。新しい知識への興味に世界の神秘真理の探求大いに結構。私も一応は学究の徒だから君の気持ちは分かる。だが少し考えれば分かると思うが君が望み行おうとしているのは蛮勇でしか無いんだよ」
それを聞き俯いて肩を落とすエレオノール。確かに蛮勇かも知れない。それに彼女はルイズの帰還を遅延させたのは自身の我の強さから出た無茶な行動と不注意から起きた事だと自覚している。でも諦めきれない、何とかならないかしらと考えた彼女は或る事を思い出した。
「そう言えばエントヴァースに居る私の分身はどうなりました？」
「未だあちらで凍結中ですよ」と返したセファウはエレオノールが嫌そうに眉を顰めるのを認める。彼女も地球人との付き合いが長いので表情を読める様になっている。
「貴女の分身は停止状態でウォロスの砂漠の中に移し、誰も触れる事が出来ない様にヴィザーが障壁を設けてますから安心してください。ただ、平賀先生から中止の決定が出ましたからね。念の為に記憶統合処理をした後で分身は消去する事になりますね」
「そうですか……。ミスタ・ヒラガ、我が儘を言って申し訳ありませんでした」

セファウの言を聞きエレオノールは立ち上がり頭を垂れて平賀に詫びを入れた。
「分身を使った学習の件はきっぱりと諦めますわ。ただ今一度あの不思議な世界、エントヴァースに降り立ち導師エシキスに“お礼”を申し上げたいのですが、駄目ですか？　勿論、ヴィザーにあちらの“通力”が使える様にして貰って、ですけど」
そう言うエレオノールの目には剣呑な雰囲気が漂っていた。

＊　＊　＊

医科工研の廊下を金髪と赤髪の美女二人が話ながら歩いている。金髪のスレンダー美女は言わずと知れたエレオノール。歩きながら隣の赤髪の女性に謝っていた。
「ごめんなさいね。付き合わせちゃって」
「いいのよ。どうせ報酬は前払いで全額貰っているし。それにジェヴレンへ向かう便は一週間後だから正直言って暇だったのよ」
「あら、観光はしないの？」
「たった一週間だと行ける場所は限られちゃうし。それにヴィザーに頼めば、ここだけで既知宇宙（オムニヴァース）の何処にだって行けるから無理に出掛ける事も無いわ」
赤髪のエント人（アヤトラ）、カーリシは自分の額を指先で突いて笑いながら言う。
「それより貴女も随分と奇特な事を望んだわね。導師にまた会いたいとか」
「“お礼”が言いたいだけよ。貴女が代わりにしてくれてたみたいだけど、こういう事はやっぱり自分できちんとやっておかないとねぇ？」
「貴女って上品なお嬢様だと聞いていたけど、なかなかどうしてどうして。気に入ったわ」
カーリシはそう言うとエレオノールの背中を乱暴に叩き大声で笑

い出した。彼女の陽気さに釣られる様にエレオノールも笑い出す。談笑しながら歩く二人は程なくしてエレベーターホールへと着く。

乗り込んだエレベーターが目的階に向かって上昇している時に、エレオノールが右手に持っている【杖】を目聡く見付けたカーリシが「それは何？」とエレオノールに聞くと、彼女は「お守り、みたいな物よ」と素っ気なく答える。カーリシは「ふうん」と言って興味深げにそれを見たが、丁度その時にエレベーターが目的階に到着した事で彼女がそれ以上【杖】について問う事はなかった。

エレオノールはその事に内心安堵しながら、ブラウスの袖の中に注意深く【杖】を潜ませ、エントヴァースへ向かうべくエレベーターから足を踏み出した。幸か不幸かその様子を所内に設置してあるカメラが映し出す事は無かった。

ニューロ・カプラが設置してある通称“コミュニケーション室”に来ていたのはガニメアンのセファウだけだった。

宝条は学会出席で立ち会えず、平賀とエィドレフは自分達の仕事を進める為に筑波に詰めている。平賀とエィドレフは南武と同じくプレイアデス・オペレーションの中核を担っているので、ほいほいと筑波から離れられないという事情もある。

それにエレオノールを昏睡状態にしてエントヴァースの分身を活動させるので問題発生の余地は無く、セファウ一人で十分と判断されたのだ。安全性についてヴィザーの事前シミュレーションで確認しているので問題は起こり得ないと誰もが考えている。

だが人は往々にして突拍子も無い事をやってしまうもの。ヴィザーは万能に近い存在であるが全能では無い。ミクロの世界で粒子の振る舞いが確率に支配される様に、人の心も予測不能な振る舞いをする事がある。

「では始めましょうか」
セファウの合図でニューロ・カプラで横になった二人が目を閉じる。エレオノールに行われるのは意識構造の複写ではなく意識の遮断だけ。原因は解明されていないがリアルタイムで現実の彼女と記憶を共有する分身（サーロゲイト）が、既にエントヴァースに存在するからだ。そのエレオノールの分身は既にナゼロソ山の麓へ移送されていた。ヴィザーはエクソヴァースに居るエレオノールの意識を遮断し昏睡状態にした後、エントヴァースの分身を停止状態から活動状態へと切り替える。
そして彼女はエントヴァースで覚醒した。
「……ふう。やっぱりこの感覚って不思議よね」
どうやら記憶は本体からきちんと引き継がれているらしい、とエレオノールは安堵する。
「そう幾度も経験が出来る事じゃ無いから、しっかり味わっておきなさいよ」
声がした方を見ると前回と同じ服を纏ったカーリシが微笑みながら立っていた。
「あら？　よく見ると貴女、霊気が前と少し変わっているわね。ヴィザーに通力を使える様にして貰ったからかしら」
エント人の中にはエントヴァースを流れる“情報”をカーリシの様に霊気として視覚に捉える事が出来る者が居る。その目にはエレオノールの変化が見て取れたのであろう。
「カーリシ、またお世話になるわね。そうそう、聞きたい事があったの。エントヴァースでは通力を使って自分の思い通りに物を作る事が出来るって聞いてたんだけど」
そう質問するエレオノールに「出来るわよ。ヴィザーの助けがある今の貴女なら何でも作れるわね」とカーリシが言う。
「やり方は？」
「一番簡単なのは同じ様な形の物に『変われ』と命じる事かしら。やってみたら？」

「呪文とかそう言うのは……。そうね、ここは異世界(エントヴァース)だったわね。それに私の通力はヴィザー任せでした」
自嘲気味に笑いながら言うと、エレオノールは道端に落ちてた手頃な大きさの枯れ枝を拾い上げ“変わって”と念じる。すると小枝は霞む様に明滅するとぐにゃりと形を変えエレオノールの【杖】とそっくりに変化した。それをエレオノールは真剣な表情でじっと見詰めている。
「それって貴女がお守りって言ってた物ね」
興味深そうにカーリシが聞いてきたがエレオノールはそれに応えずに目を閉じて【杖】を構えた。
「……エレオノール？」
再度呼びかけたカーリシの耳に聞こえたのは、一語一区確かめる様に、そして囁く様に詠唱しているエレオノールの声。
「ユビキタス、デル、ウィンデ……」
目を閉じて一心にエレオノールが唱えているのは、彼女の系統とは明らかに違う風の、しかも高位の呪文“遍在(ユビキタス)”だった。土のトライアングルであるエレオノールが使える魔法では無いが、座学に於いても優秀だった彼女はその呪文を正確に覚えていた。
エレオノールは“本体”が隠し持っている【杖】と、今“分身の自分”が持つ【杖】とが重なる事を意識しながら呪文を唱え続けると、身の内から杖に、あちら側(エクソヴァース)では全く無かった魔力に近いものの流れを感じる事が出来る。彼女は“上手くいく”事を確信し目を開く。
「貴女、何を？」
訝しげにカーリシが問うたその時、呪文が完成しエレオノールは払う様に【杖】を振るった。

「エレオノール嬢の意識レベルが上がっています。神経活動抑制のストレス波が遮断状態になりました。原因は不明で制御不能。覚醒

します」
ヴィザーがの声が“コミュニケーション室”に響く。
「なんですって？」
慌てたセファウはエレオノールに近付くと、目を覚ますはずが無いエレオノールがその瞼を自ら開くのを見て驚愕する。
「エレオノールさん、貴女、どうやって……？」
ゆっくりと起きあがるエレオノールに、イヤーセットを通して聞こえるセファウの声は当惑で震えていた。
カプラから降りたエレオノールは、驚きで腰が引けているガニメアン女性ににっこりと微笑むと「ちょっと試してみたら存外に上手く行きましたわ」と隠し持っていた【杖】を得意満面でセファウに見せる。
「でも“こちらの私”が目を覚ますとは思っていませんでしたから、正直、自分でも驚いていますけどね」と淑女らしからぬ少し戯(おど)けた仕草で続けた。
「強制的な遮断が起きて覚醒したみたいだけど大丈夫？　頭痛とか目眩とか、何かおかしいと感じる事は無い？」
そう身を案じるセファウにエレオノールは涼しい顔で「平気です。混乱も違和感もありませんから」と答える。
「そう……。でも取り敢えずもう一度カプラに横になって貰えるかしら。ああ、でも昏睡状態にする事はしないわ。ヴィザーに意識状態をスキャンさせて検査するだけだから」
ガニメアンやテューリアンは他者を騙す事はしない。地球人からすれば驚くべき事なのだが、彼等には相手を騙して出し抜くと言う発想が無いのだ。為に一世紀前まで、永年に渡ってジェヴレン人がテューリアンを欺き、その牙を隠し持ってした事に気付けずにいた訳だが。
そんな巨人たちの性質(たち)を分かり始めていたエレオノールはセファウの言葉に素直に従う。
「それじゃ寝たままで良いから何が起こったのか。いいえ、何を“

起こしたのか”教えて貰えるかしら？」
ヴィザーに解析の指示を出しながら平静を取り戻した穏やかな女性ガニメアンは、エレオノールにそう問い質した。

エレオノールが【杖】を振るった瞬間、カーリシは“霊気”の流れがエレオノールを中心に渦巻き、そこから分かれた流れが杖を振るった彼女の横に集まって行くのが見えていた。螺旋を描いて凝縮するそれは、忽ちのうちに人型になってエレオノールと寸分違わぬ姿へと変化する。
「出来るとは思っていなかったけど、出来ちゃったみたい。あちらの私が目を覚ましたのは予想外だったけど」
杖を振るった方のエレオノールが言うと、先程現れたもう一人のエレオノールが「そうね。でもこれでミスタ・ヒラガの説得は一気に出来るんじゃないかしら」と返す。
「あちらの私もそう思っているみたいね。今ミス・セファウに色々と話してるわ」
「私も貴女と同じ分身なんだから、一々言わなくても分かるわよ」
「それもそうね」「そうよ」
目の前で起きている事が信じられずカーリシは茫然自失となる。意識構造をコピーされた分身は、ヴィザーによってエントヴァースに適合する様に変えられてジェヴェックスのデーターストリームに乗せられ、ここウォロスへと降り立つ。それ意外で“分身”がウォロスに降り立つ事は無い。
カーリシの様な能力を持ったエント人がその時の様子を見ると、天空の一角を横切る“霊気の流れ”から一筋の光明が地上へと降りてきて、そこに人が出現する様に見える。
ところが目の前で起きた事はどうか？　霊気の流れから見るに、彼女自身で彼女の分身を作ったとしか思えない。それに彼女達の会話の内容だと、まるで自分達の本体が居る“コミュニケーション室

”が見えているとしか思えない。その為には彼女達にはハイペリア（エントヴァース）から降りる“霊気”が繋がっていないとおかしいのだが、その繋がりが全く見えない。

注意深く警戒し後ずさりし、通力による障壁を準備しながらカーリシは低い声で会話を続ける分身達に言葉を掛けた。

「エレオノール。貴女は、いいえ。“貴女達”はいったい何者なの？」

その響きには、先程までの気安さは微塵も含まれていなかった。

オムニプレックス・ウーマン　（２）（後書き）

左胸→さむね→詐胸……ッッッ！　ＰＡＤかッッッッッ？　エレ姉さまはＰＡＤをデフォにしろと言う天啓なのかッッッッッッッッッッッッ？　変な事を書いたせいで、明日からエレ姉さま親衛隊に命を狙われ続ける仕事が始まるお……。

それはさておき、前回の後書きで次回、つまり今回の話についての盛大なネタバレをしてしまいました。反省。って事で年末年始にサボったので少しでもプロットを消化すべく頑張って更新してみましたが、ネタバレ通りの遍在ネタ。

そして章と言うか話の副題を変更して詐胸エレ姉さまのターンは続く！　ルイズェ……。

ちなみにオムニプレックスは英語のｏｍｎｉｐｒｅｓｅｎｃｅ（遍在する）からの造語です。

オムニプレックス・ウーマン　（３）（前書き）

今回の東北・関東大震災で被災された方々には哀悼の意を、お亡くなりになられた方々にご冥福をお祈り致します。
私自身も被災し、現在避難所生活です。また福島原発の状況によっては県外に避難する事も考えておりますので、暫くは生きていくのが精一杯な環境になると思います。
ですので、取り敢えず推敲が済んでいる部分までを掲載しておきます。申し訳ありませんが今はこれで勘弁して下さい。
では皆様、お互いご無事で。またお会いしましょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

六月十四日
　修正・加筆・追加を行い（仮）を取りました。文字数は約三千五百文字から約一万文字まで増加しています。
　また、ご心配をおかけしましたが活動報告にも書いております通り、何とか無事にもとの住処で生活できております。
　今後ともなにとぞ宜しくお願い致します。

オムニプレックス・ウーマン　（3）

カーリシは眉根を寄せた険しい表情で、いつでも通力を打ち出せる様に腕を交差させ油断無く構える。対して、それまでとは打って変わって剣呑な雰囲気になった案内役と対峙している二人のエレオノールは、自身でも状況が飲み込めずにきょとんとしていた。

「何者、と言われても……ねぇ？」

エレオノールの分身達は困惑気味にそう言うと全く同じタイミングで顔を見合わせ、これまた同じタイミングでカーリシへと顔を向ける。

「見ての通り、エレオノールよ」

「増えたけどね」

「ひょっとして誰も彼女に私の出自を話してないのかしら？」

「顔合わせの時にミスタ・ホウジョウは“件の”って紹介してたわよ」

「そうだったわね。ああ、でも魔法の事は話していないかも知れないわ」

「あちらでは発現しない事を伝えてたし」

「それで言わなかったんじゃない？」

端（はた）から見たら出来の悪い双子漫才の様な緩（ぬる）い遣り取りを始める分身達を、カーリシは胡乱な目付きで注視していた。まずは距離を取るべきだとカーリシが考えたその時、彼女の頭の中にヴィザー経由でセファウからの声が響く。

「どんな原因で増えたのか分からないけど二人とも正真正銘エレオノールさんの分身、彼女達に害意は無いわ。今こちらのエレオノールさんに事情を聞いているから」

それを聞いてカーリシは構えを解いて緊張を解くと安堵の息を漏らす。俯き加減になり一瞬だけ彼女の注意が分身達から外れたその時に「ひぃぃぃゃやぁあああああ！」と見事なユニゾンで分身達が

叫び声を上げた。
　それは一瞬の出来事。カーリシの視線が外れた瞬間に何処に潜んでいたのか、彼女の祖父にして破戒導師のエシキス爺がエレオノールの分身達の後ろに忽然と現れ、怪しからん事に彼女達のお尻を、それも中指を尻の割れ目に添える様にして撫でくり回したのだ。全く以て怪しからん。
　エレオノールは某白髭老人のセクハラ行為を目撃した事はあっても、その被害者になった事は一度も無い。また恋仲になった男性など皆無なので“そういう事”は話に聞くだけで経験も無い。
　これが後十年も経って十分に薹が立った彼女であれば、無言のうちに裏拳で相手の鼻っ柱を砕いて怯ませ、振り向き様に鳩尾に肘打ちを叩き込むや、頸部を押さえ込んでの膝蹴りで更に顔面に追い打ちをかける位の三連コンボは平気でこなせたかも知れない。或いは乗馬鞭を取り出して問答無用、全力の乱れ打ちであろうか。
　しかし今のエレオノールは未だ二十歳（だがハルケギニア基準だと崖っぷち）の“おぼこい”娘さんである。そんな事をされれば堪ったものでは無い。
　真っ赤な顔で涙目になり、チェニック風衣装の前を押さえアヒル座りで道にへたり込みながら、器用にもカーリシの方へずりずりと後退るエレオノールの分身達。
「お、おおおお、おおおし、おしりををを、ななななで、ななでて、わ、わわわ、われ、わわれ……」
「ささささ、ささわ、ささわらられれれ。ゆゆゆ、ゆゆゆび、ゆびが……」
　吃りながら必死に抗議をしようとする彼女達の視線の先に居るのは、先達て直接に“お礼”を申し上げようとしていた導師エシキス。
「エレオノール殿の御胸は些か物足りぬ物であったが、腰つきはすこぶる善き物にして真に絶品。形善し張り善し締まり善しで必ずや良い赤子を産すであろうの」
　彼は満足そうな顔でそう言うと呵々大笑するが、そうは問屋が卸

さない。彼の弟子にして孫娘のカーリシが通力で導師の足下を捏泥に変える。しかし導師も然る者、泥を固められる前に中空に舞い上がり拘束を免れる。その機動を読んだカーリシが雷光の様な通力を発するが導師は余裕の表情で掌を翳し上空へと往なす。

「隙有り！」と叫ぶカーリシの声とともに五つの炎柱が導師を囲み巻き込んで行くが「なんの」と導師は余裕の表情で手を払うや、次の瞬間に彼を取り囲む様に氷の円柱が地面より現れ、広がりながら炎柱を全て薙ぎ払う。氷の円柱はその勢いのまま氷壁へと姿を変え猛烈な速度でカーリシへ迫り、そして彼女を弾き飛ばした。

こうして腰を抜かしたエレオノール達の目前で師弟の戦いの火蓋は切って落とされたのだ。

そんな過激極まる祖父孫娘喧嘩がウォロス（エントヴァース）はナゼロソ山の麓で始まった頃。

「どうしたの？」

医科工研のコミュニケーション室で宝条達からの連絡を待っていたセファウは、ニューロ・カプラの上でヴィザーのスキャンを受けながらも顔を赤らめて嫌そうに顔を顰めるエレオノールに話しかけた。

モニターにはエントヴァースで何が起きているのか映しだされているのだが、エレオノールは分身と記憶を共有しているので、その様を自身の記憶として認識する事が出来る。

「いえ、少し感触の記憶が生々しかったので……」

そう言うとエレオノールの内に沸々と怒りが湧き起こってくる。

お嫁に行く前なのに、い、今まで、ととと殿方に、ささささ触られた事も無い、むむ胸どころか、今度は、おし、お尻をささささ触るなんて！　しかも、ああんな、あんないいいい嫌らしいささ触り方をするなんて！

と、それはもう乾燥した草原に拡がる野火の如く怒りが拡がって行く。本人が、否、本体が直接に触られた訳では無いのだがそれで

も赦せない。
怒りで熱くなりながらも頭の片隅は冷静なエレオノールは分身達がヴィザーによって通力が使える様になっているのを思い出した。
医科工研（エクソヴァース）に居る本体の意識が流れ込む事で、分身達は見る見るうちに冷静さを取り戻した。
「カーリシ！　加勢するわ！」
彼女達は見事なユニゾンで叫ぶ。
分身の一人が「女の敵は滅すべきね」と言うや、通力で風を起こし空中を舞うエロ導師を牽制し始める。
もう一人の方は杖を構え呪文を唱え始めた。自分では使えないはずの“風の遍在”と同じ様な『魔法』がエントヴァースで発現したのだから、ひょっとしたら自身の系統である土の、それもゴーレムが使えるかも知れないと考えたからだ。
しかし彼女の目論見はすぐに外れる事となる。呪文を唱えていたエレオノールの分身は、それを中断して呟いた。
「駄目だわ……」
遍在の呪文を唱えた時みたいな流れが感じられない。彼女は電撃と旋風が猛威を振るっている場所を険しい目つきで睨むと「仕方がないわねっ！　もう！」と悪態を吐きながら道端の枝で作った杖を捨て、通力で自身に炎を纏うとカーリシともう一人の分身が牽制する破戒導師（エロジジイ）を殲滅すべく駆けだした。

＊　＊　＊

「まったく無茶をする」
ホロスクリーンの向こうでは憮然とした顔で平賀が睨んでいる。
その視線を受けてエレオノールは小さくなっていた。宝条とエィドレフはどうしても席を外せず不参加であり、エレオノールの隣にはセファウ、その後方にはエントヴァースでのドタバタに一段落を付

けて晴れ晴れとした顔のカーリシが立っている。その表情から件の導師エシキス(エロジィ)に対して一定の成果を上げたようだ。
「申し訳ありません。私の認識不足でした」
平賀は謝罪を続けようとするセファウに手を挙げながら「いや、君に非はないよ」と制止する。
「今回の件で責を負うべきは最終的に許可を出した私だ。それにしても……」
再び平賀の鋭い視線がエレオノールへ向くと、彼女は悪戯が見付かり叱られる事を恐れる子供のように身を竦め、俯き加減のまま上目遣いで平賀を見ながら続く言葉を待つ。
「今回の件と言い、端点いや君には『扉』と言った方が通りが良いのかな、それを潜った事故の原因と言い、君は自殺志願者かね？冒険家や探検家だって君みたいな無茶はしない。親御さんから君達を預かっている身としてはもう少し慎み深く行動して欲しいんだがね」
「はい……。返す言葉もありません……」
エレオノールは小さな声で神妙な態度を取りながら謝罪の言葉を口にする。その語尾は今にも消え入りそうだ。そこには先日来の女王様然とした姿は無く、とんでもない悪戯をしでかして叱られている子供の様にも見える。
そんな彼女を見ながら、平賀は小さく息を漏らすと口元を弛めると、いつもの“気さくな親父(おやじ)”の表情になる。
「とは言え、やっちまったもんは仕方がない。今回は結果オーライと言う事もあるが、十分に反省している様だしな、これに懲りて以後は慎むようにしろよ？　そうそう、そちらにルイズ達が面会で着いているはずだから行ってあげると良い」
平賀にそう言われたエレオノールは安堵の表情を浮かべると「はい」と一言小さく返事をし、背中を丸めながらそそくさと退室して行った。彼女が退室するのを待っていたかのように「さて、何か分かったのかな？」と不意に平賀からセファウに話が振られると、彼

女は「いいえ」と力無く答える。
「なぜ彼女のエントヴァースでの分身が増えたのか、なぜ記憶の共有が起こるのか原因は不明のままです。しかし幾つかの興味深い物が得られました」
彼女はそこで言葉を区切るとヴィザーに対しスクリーン上にデーターを表示する様に指示を出した。
「エレオノールさんの脳内神経細胞の活動と分身達の意識構造内で起きていた事象を関連付けて視覚的に表した物です。x軸が時間、y軸とz軸が彼女自身の脳内活動領域及びそれに対応する意識構造の領域で、破線は見易くする為のエリア分けです。色調の変化ですが、これは分身側との意識レベルの相関によって変化させています。相関が高いほど赤く低いほど青く、また明度は活動レベルに比例して明るくなる様にしてあります」
セファウが中空を指でなぞるような動きをすると、それに従ってスクリーンに表示されているデーターが変化して行く。
「ここはエレオノールさんが意識して分身から記憶を呼び出した時の相関の変化部分です。まず通常の記憶を呼び出すシーケンスが脳内で起こるのですが、この後に注目して下さい」
彼女が言った直後、実線で強調されたエリアの色調と濃淡が目まぐるしい変化をし始める。
「まず脳内にある例の松果体様器官の活動が活発になります。その後、分身が保有する記憶データーが地球人類の俗に言うワーキングメモリー領域に突然現れます。この前後について精査したのですがワーキングメモリー周辺の神経組織には何の兆候も認められませんでした。勿論この時点で彼女は既に覚醒している状態でありヴィザーにも接続していません。そしてこのワーキングメモリーに現れたデーターが恰(あたか)もエピソード記憶であるかの様に組み換えられると、別なワーキングメモリー領域へと移送された後に海馬を経て記憶として認識されています。彼女が明晰夢みたいだと認識するのはこれが原因の様ですね。これは平賀先生のご子息とルイズ嬢との間に起

きた記憶の転写とは全く異なった動きとなっていて、またこの時に共通余剰空間で超立方振動が発生しているのをヴィザーが確認し記録しています。データーの相関関係について、以前の事と併せて現在エィドレフのチームが解析と比較を行なっていますのでかなり詳細な関係性が見出せるかもしれませんね。ただ、分身間で起きていた記憶共有についてなのですが……」

「何か問題があったのかね？」

「モニターの結果から、それぞれに相関があるのは分かったのですが、その……何と言うか奇妙なのです」

「君が、いやガニメアンがそんな物言いをするなんて珍しいな」

平賀が指摘する通り、率直な事が知られているガニメアンが（勿論その子孫であるテューリアンもだが）奥歯に物が詰まった様な言い方をするのは非常に稀な事だ。そこを指摘されたセファウは地球人の首肯の仕草を真似る。

「観測された現象が事実である事を理解は出来ているのですが、どうにも……。これを見て下さい。彼女の分身二体の意識構造の状態を先程の様に脳の領域に対応させマッピングしたデーターです」

促されたセファウはヴィザーに指示を出してデーターを表示させた。

「分身同士にも、分身とエレオノールさん本体との間に生じた様な記憶の伝達が行われています。ですが決定的な違いがあります」

一度言葉を切ると彼女は「変化点でのデーターを」とヴィザーに指示をする。

「本体と分身間と違って、分身同士では海馬を介した記憶プロセスが行われずに意識構造の全く同じ記憶領域が同時に変化を起こします。しかし決定的な違いは例の松果体様器官に相当する部分での活動が全く認められない事です。更にヴィザーからの報告では該当する座標系での超立方振動も起きていません。彼女達の言う“魔法”に類する現象が起きているにも拘わらずです」

そこまで言ったセファウからの視線を受けてカーリシが補足する。

「エント人の私から見て彼女の分身達の間に何らかの交感を見る事は出来ませんでした。それどころか彼女達の霊気、いえ意識構造ですか、それが私には終始“全く同じ者”として見えていました。同一人物の分身が二体でも、時間経過で差違が生じて必ず見分ける事が出来るのですが、こんな事は普通有り得ません。それに彼女達は個別に判断して行動していました」

カーリシの補足を受けてセファウは続ける。

「同一の意識構造と記憶を持ちながら、まるで個別に判断して行動をする存在なんて前代未聞です」

「彼女の分身達は全く同一でありながら個別の意識を持つ様に振る舞い、且つ物理宇宙（エクソヴァース）でも情報量子宇宙（エントヴァース）に於いても彼女達を関連付けさせる様な現象が認められなかった、と言う事か」

平賀はそう言うと眉間に手を当てて俯きながら何事かを考えはじめた。そんな彼の様子をセファウとカーリシは黙って見詰めている。ややあって平賀はやおら目を開け「記憶統合での問題は？」とセファウに問うと、彼女は「分身同士は全く同一なので統合の必要が有りませんでしたし本人への統合も全く問題ありませんでした。ですが……。ですが、その統合処理後も不可解な事が起こりました。ヴィザーが行う統合処理は本体と分身の記憶の差分をストレス波を使って脳内の神経ネットワークへ反映する比較的単純な物です。それで前回は統合時に彼女の脳内活動についてモニターしていなかったのですが、今回の件で改めてＢＩＡＭによるモニターを実施しながら統合処置を行いました。その時の結果がこれです」

セファウはＢＩＡＭのモニター結果を表示させた。

「これが反映させた直後のエレオノールさんの脳内活動状況です。地球人（テラン）とジェヴレン人は、この状態から記憶領域を意識構造上で整合性させる為の変化は時間を掛けて行われます。ですが彼女の場合は僅か一ミリ秒にも満たない間に劇的な変化を起こします。それも差分として反映された物が彼女と分身間で行われた記憶の共有と同様のプロセスを経てエピソード記憶として固定されています。そし

てこの時、超立方振動は起きていないのです」
　そこまで言うと彼女は地球人が肩を竦める仕草を真似しながら「現象面しか観測出来ないのがもどかしいですね」と呟くと「エィドレフから聞いた、平賀先生が仰ったと言う“与太話”が現実味を持って感じられます」と心情を吐露した。
「ああ、我々が認識している精神や意識と言う物が観測不可能な物理的実体を持つんじゃないかと言ったアレか」
　平賀の言葉にセファウは肯定の意を示す。
「はい。今回の件で検討してみるだけの価値はあると私は思っています。それに『既知宇宙（オムニヴァース）に生存する知的生命の意識構造に認められる互換性』に対する答えがそこに有るのではないかと」
　ジェヴェックスが内在する情報量子宇宙（エントヴァース）。その発生原因も概ね解明されているのだが未解明な事も幾つか存在する。その最たるものが言語による意思の疎通である。過去に於いてジェヴレン人に憑依したエント人は何の教育も無しに例外無くジェヴレン語を話せたのだ。その逆も然りで、ヴィザーによって作られた地球人やジェヴレン人、テューリアンの分身（サーロゲイト）も、特にヴィザーが処理をせずともエントヴァースに於いてエント人と“会話”が出来るのである。前者は人格部位のみの上書きとして説明出来なくもないが、後者については全く解明されていない。
　この意識構造の互換性問題についてはエントヴァースの発見以来多くの者が研究に携わっておりセファウもその中の一人であるのだが、今以（いまもっ）てそれに対する明確な解答が得られていない。
「謎は増えるばかりですが、もしかしたら彼女達の宇宙へ行けばその答えが見付かるのかも知れませんね」
　平賀を見つめる彼女の表情からは読み取れないが、その呟きには何処か期待に満ちた感情が込められていた。
　その後の宝条とセファウらによる検討の結果、エレオノールの分（サーロゲイト）

身による学習が許可される事になった。分身はその在り方から物質的な制約が無く、故に食事や睡眠を必要とせず疲労も蓄積しない。活動の全てを学習に割り当てる事が可能なのだ。但し分身と言えども人間の意識構造を複写しているので飽きたりもするので息抜きは必要なのだが、それを含めても生身に比べて時間効率は非常に高い。

エントヴァースに於けるエレオノールの分身数は当初二体だった。だが分身間で起こる謎の記憶共有のお陰で記憶統合処理の際にエレオノールが受ける負担が極端に少なかった事から、程なくして分身の数は十体にまで増やされる。これによって彼女は、ざっくり計算して一日が二十日前後になったのと同じ恩恵を得る事になった。

さて、その結果として本体(エレオノール)はどうしているかと言うと――。

平賀家の居間にあるソファーに座り「はぁ、暇だわね」と彼女は呟く。ブロンドの髪をクリップ型の髪留めで後頭部に纏め、こちらに来てから作って貰った黒縁のお洒落な黒縁眼鏡から覗くその瞳はやや物憂げでもある。その顔(かんばせ)だけ見れば流石は公爵家令嬢、一部の隙も無い様に見える。

だがしかし、少し引いて見れば彼女が着ている物は、何の変哲もないややくたびれた感のある灰色スウェットの上下。その手に持つ筆文字で『草加煎餅』と大きく書かれた袋をガサゴソとまさぐると、艶やかな焼き色が着いた香ばしい醤油が香る丸い物体を取り出してポリポリと囓りはじめた。なんかもう色々と台無しな公爵令嬢である。

「ふう。後を引くのよね、これ」

煎餅を一枚食べ終えたエレオノールはそう言うと、テーブルに置いてあるマグカップに入った煎茶を一口飲む。壁の時計を見ると時刻は九時を少し回ったところだった。

「出掛けるまでまだ少し間があるわね。どうしようかしら？」

平賀家の面々だがそれぞれ才人の母親は近所の友達と買い物に、父親と才人、そしてルイズは筑波へと既に出掛けており、家に残る

のはエレオノールだけだった。そのエレオノールも十一時に、医科工研に勤務し本日は非番である（胸のサイズ的な意味での）同志看護師である十六夜千早（いざよいちはや）と出掛ける約束をしている。それにしても分かる人には分かる酷い名前である。

さて、どうしようかと暫く考えたエレオノールはハウス・コンピューターに指示を出した。

＊　＊　＊

「大分顔色が良くなったわね。体調はどうかしら？」

エレオノールが話しかけるスクリーンの向こう側、カトレアは若草色のチェック柄に襟元にレースがあしらわれたパジャマを着て、肩から薄いクリーム色のカーディガンを羽織っている。

カトレアは地球に移送されてから程なくして、酸素吸入をしていても頻繁に低酸素発作を起こすようになってしまった。その顔色はチアノーゼに因って青ざめ唇は紫色のまま、何時しかその表情も暗く辛そうな物へと変わっていった。

しかし今スクリーンに映る彼女の唇は艶やかな桜色で、その頬は仄かに紅を差した様な十代乙女の健康的な血色を取り戻し、以前よりも幾らか健康的にふっくらした印象も受ける。

何故なら自己免疫性疾患の治療を行う前に身体に負担が掛からない様にと、血管カテーテルによる心室中隔欠損孔閉塞と肺動脈狭窄部の拡張を目的とした姑息手術（所謂応急的な緊急手術）が行われたからだ。

これによって動脈血と静脈血の混合が防止されて、肺動脈への血流が増加する事でカトレアのチアノーゼは解消され、低酸素発作からも解放された。但しこの処置はあくまでも一時的な物であり、自己免疫性疾患の根治的治療が完了した後に根治手術が行われる事になっている。

そんなカトレアは現在医科工研の無菌病室で自己免疫性疾患の治

療を受けている最中なのだった。
「お陰様で治療は順調だそうです。でも姉さま、心配してくださるのは嬉しいのですが……」
朝の読書時間を邪魔されたカトレアが恨めしそうに言う。
「だってねえ、暇だったし」
行儀悪く煎餅を囓りながら返すエレオノールの姿を見ながら、カトレアは少し息を吐いた後に輝く様な微笑みを浮かべた。
「姉さまのそのお姿を録画しておいて帰った後でお母様にお見せしようか？」
「な、何を言うのカトレア！　それだけは止めて、お願い！　ね？」
そんな空恐ろしい事をされては堪ったものでは無い、とエレオノールは真っ青になり慌てて居住まいを正した。慌てふためく姉の姿を見ながら、そう言えばとカトレアは思い出す。
「今日はお父様達に手紙を送る日でしたわね。姉さまはルイズ達と一緒にツクバに行かなかったのですか？」
「ほら、私が行っても役立たずだし」
そう言うとエレオノールは僅かに目を泳がせる。
「それだけですか？」
にこにこと微笑みながらエレオノールを見つめるカトレア。
「それに行く途中で人混みとか多いし」
「それだけですか？」
「ええと、行く時に乗る列車で窓際に席が取れない事もあるし」
「それだけですか？」
「そうそう、研究所の食堂ってご飯が美味しくないし」
ちなみにルイズ達と一緒に筑波の研究所に行った時は、エレオノールも蝦蟇屋で昼食を食べていたりする。
「それだけですか？」
カトレアの「それだけですか？」が繰り返される度に、その笑顔に何か黒い物が加わって行く錯覚をエレオノールは覚えた。
あれ、この子ってこんなに黒かったかしら？　病弱だけど明るく

て少し短慮なところもあるけど慎ましやかだった気がするけど。あ、でも勘の鋭さは前から変わっていないわ。もうルイズと言いもカトレアと言い、揃いも揃って地球(こっち)に来てから変わったんじゃないかしら。それとも今の状態がこの子達の素なのかしら？

とエレオノールが自分の事を棚に上げてつらつら考えていると怪訝な顔をしてカトレアが声を掛けて来る。

「姉さま、何か良からぬ事を考えてません？」

「そんな事、微塵も考えて無いわよ。あーっと、実は出掛ける約束していて、それまで暇だったからあなたの様子を」

エレオノールが誤魔化すようにそこまで言うと、カトレアが口を尖らせて拗ねた様子を見せながらその言葉を遮る。

「ヒラガの小母(おば)さまとお出かけですか。羨ましい事ですわね」

「違うわ。ほら私達を世話してくれた看護師で私の担当だった子が居たじゃない。やたらお喋りで小動物っぽい感じの少しつり目気味で線が細い」

そこまで聞いてカトレアは「ああ」と思い出す。ちなみに同志看護師は二十四歳でエレオノールより年上なのだが、見た目的に年下と認識されたらしい。

「姉さまと同じむ……」

胸の薄いと言いかけてカトレアは言葉を濁し、慌てて誤魔化す様に続けた。

「ええと確かイザヨイさんでしたか。いつの間にか仲良くなられたんですね。その方とお出掛けですか？」

妹が酷い事を言いそうになった事にエレオノールは気が付いていない様だ。

「そう。ちょっとした買い物に彼女から誘われたのよ」

彼女達が常々話していた内容を知っているカトレアは、強調して「彼女から」を言うエレオノールに内心“絶対に姉さまから連れって行ってくれと言い出したんでしょうね”と思いながらも、姉のその薄い胸板を更に抉る様な事は口に出来なかった。勿論どんな物を

買いに行くのかも承知している。
「それで姉さま、わたしにも何か買ってきて頂けるんでしょ？」
「買って来ても、あなたの病室には物を持ち込めないじゃない」
「大丈夫ですよ。食べ物以外なら大方の物は滅菌処理が出来るそうですから。ほら、このパジャマとカーディガンだってヒラガの小母さまからの差し入れですのよ」
「あら、そうなの。それじゃ何か欲しい物があって？」
「そうですね……」
唇に人差し指を当てて暫く考え込んでいたカトレアは「そうだわ」と、ぽんと手を叩いて輝くような笑顔を浮かべた。
「ついでに私にも新しい【ぶらじゃあ】を買って来てくださいませんか？　今着けている物、窮屈になって来ましたので」
恐るべきカトレアの天然体質により、エレオノールは一瞬で石化されガラガラと崩れ落ちたのだった。勿論、精神的な意味で。
その日の午後、とある喫茶店で血涙を流しそうな勢いで愚痴を言い合いながら、ケーキを貪り食うスレンダーなブロンド美女と童顔幼児体型の日本人女性の姿が見られたとか見られなかったとか。
どっとはらい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8901m/

虚無を継ぐもの

2011年9月24日16時57分発行